
アクアマリンの瞳に抱かれて

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクアマリンの瞳に抱かれて

【NNコード】

N6033T

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

深夜、石神島の海で突然光に包まる

翌朝、目を覚ますと横には、綺麗な少女が眠っていた。

水の精・退魔師・鬼 ちょっとドタバタのラブストーリー。

これが、全ての始まり。

ここは石神島いしがみじまの名底湾なじわん。

新月の大潮の日、潮の引き始めて海に入り電灯で照らしながらガザミを獲りに来ていた。

もう、ガザミ獲りのシーズンも終わろうとしていた。
だいぶ暖かくなってきていた。

どうしてもと頼まれて来たものの、まったく獲れなかつた。

満点の星空、波の音と風の音しかしない世界。

波間には夜光虫が星空を映した様に、水面に輝いている。

そして、時を忘れたように、宇宙を仰いだ時……

突然、激しい光に何もかもが包まれた。

その光は、とても優しく懐かしい感じがする、その色は例えるならアクアマリン色だった。

朝、いつもの様にベッドの上で目覚めると俺の目の前に、見知らぬ女の子が眠つていた。

『ん?』

『はあ?』

『誰?』

『なんなんだ? いつたいわけわからん……つて?』

しばらく、まだ、覚醒していない頭をフルで回転させる。

昨夜、知り合いに頼まれたガザミ(マングローブクラブ)を獲りに名底湾に……

そこで、光に……包まれて……

その後の事は良く覚えていなかった。

『あがあ！』

おいおい。なんなんだよまったく無言でいきなり殴るか普通。
現状からすればしかたないのか？

俺がなんかしたか？

覚えてないけれど。

『ここは、何処？』

透通る様な声だった。

その女の子は、薄いストールの様なものを纏っているだけで、黒と言つか濃紺と言った方が近いだろうか。

絹の様な長いストレートの腰まである髪の毛で、宝石の様なとても澄んだ瞳をしている。

見たことも無いくらい綺麗な小柄な女の子だった。

『ここは、俺の……』

答える間もなく、また殴られた。

『違う！』

違う？ 地名を聞いているのか？

『ここは……石神島 東京から2000キロ南西の島だけど』

ものすごい形相で睨まれている、俺は何もしてないぞ。
すごく綺麗な人の怒った顔は、すさまじく怖かつた。

『つて、あんたこそ誰なんだ？』

『私は、海』

『水無月 海』

ヤバイってバイト遅れる。

しかしこじやいぐらなんでもまずいだろ。』

本当に勘弁して欲しい。神様、本当にごめんなさい。

この時ほど口頭のを行いを後悔した事が無かつた。

『痛い……なあ』

まったく朝から訳わからず、ボロボロですか？

腹が立つほど殴られた。

『貴様は名乗らんのか？』

『ハイ、隆羅す！』

『如月隆羅です』

マジ、怖えええ、神様仏様、本当にごめんなさい。

とりあえず、穩便について無理なのか何を怒っているのだろう？

その時、枕元に置いてあつた携帯が鳴ると彼女が徐に携帯を切つた。

「プチッ」ってマジですか？ もしかして、店長からの電話だったんじや？ 殺されるな確實に。

どうじょうと言い訳を考えていると、「クウ~」と、とても可愛いらしい音が彼女の方からしてきた。

彼女の方を見ると睨みつけられていた。

いやいや……そんな怖い顔しなくても……

『じょうがねえなあ。ちょっと待つてくれ、何か買つてくるか

そう告げて近くの、コンビニでとりあえずパンと紅茶なんかを買って来て彼女に渡した。

そんなに睨んで食べなくても毒なんか入ってないし。

それと、一応2人分なんですけど、俺の分はなんて怖くて聞けなかつた。

全部、食べ終わると……

「スゥー」と寝息が聞こえて来た。って寝ますか普通？

これで、もし起こそうものならボコボコにされるのが目に見えた。本当に泣きたくなつてきた。

これから、どうすれば……バイトやばいでしょととりあえず連絡いれてと。

バイト先の店長に休む事を告げた。

『スマセンですハイ。』

もう、凹み様のないくらい嫌味言われた、あのクソ店長め。「ゾク」と背中に悪寒が走り視線を感じる、お目覚めになられたのかしら？

振り向き恐る恐る聞いてみる。

『あの、大変申し上げにくいんですが、何故、君が俺のベッドに？』

『私は水の精』

『この世と妖かしの世をつなぐ門の番人』

『はああ？』

少し危ない人なんじや、この21世紀にだぞ「水の精」「妖かし」「門の番人」ありえないって。

アニメや漫画じゃあるまいしそんな話。それとも電文 かまつたく。

『昨夜、大切な鍵を落とした、鍵の波動を追つて来たら此処に』

つて、こじろ階なんですけど玄関には鍵かけてあつたはずだし、いつたいどりやつて。

100万歩譲つて「水の精」だとしよう、でも水の精つてなんなんだ？

人間にしか見えないけれど。ライン川のローレライとか？

セイレーンとか半魚人＆人魚？

人魚つてここら辺だとジュゴンとか？

ジュゴンつて『ブツ』自分で言つて笑つてしまつた。

スパーーン また殴られた。

なんで俺が？ 何か悪い事でもしましたか？

無理絶対に無理！

お願ひだから出て行つてくれないと心の中で叫んだ。

『隆羅とか言つたな、この島を案内しろ』

つて、有無を言わさずですか？ ありえないくらいありえないんですけど。

そして戸惑つていると……

『お前、1回死んでみるか？』

勘弁してください極道じやあるまいしつて、もしかして極道なの？

当たり前のように殴られたし。

『しううがねえなあ、とりあえず、これでも着てくれ

俺のシャツと麻のパンツを渡すと、あからさまに嫌そうな顔をされた。

『そんなんに嫌そうな顔しなくとも、ちゃんと洗つてあるし、その格好じゃ外に出られないだろ』

先にこいつの着替えから買い物に行くしかないのか。

俺の朝のバイト先でもあるこの島一番の大型店舗に買い物に向かつ。島と言つても9つの島からなる群島で、その中でも2番目に大きく、島々の中心で一番の街な訳である。

『さあ、行くぞ。俺のポンコツ車に乗つてくれ』

『このスクラップ動くのか?』

悪かつたなスクラップで。

店に入り速攻で衣料品のある2階へとエスカレーターに乗ろうとした時に捕まつた。

『如月くん?』

『店長……』

『おや、バイトさぼつてデートですか、いい根性していますね』
いや、『デートなんてもんじゃなくて、これは拉致に近いモノだと、もちろん拉致られたのは、俺の方で……』

『はじめまして、私、水無月 海と申します。如月君とは親が決めた許婚で突然押し掛けてしまい、皆様にこの迷惑をお掛けして大変申し訳ございませんでした』

『えつ?』

海さん、今どんでもないこと口走りませんでした?

『店長? あの店長』

店長の顔を見ると一瞬惚けた顔が見る間に怖い顔になつた。

『如月、貴様! このヘタレの如月に、こんな見た事も無い様な綺麗な女の子が許婚だあ? 許さん、後から尋問と言つ名の拷問だからな』

ハア～泣きたくなつてきた意味くじ分からぬし、なんですか許婚つて誰ですか?

店長に尻に蹴りを一発くらいい2階へ上がる。

自分に合ひ洋服を選んで来るよりに海に泳ぐ、すでに疲労困憊氣味の俺はレジの近くのベンチに体を投げ出して休んでいた。

『そう言えども、所持金あんまり持つてないけど』

などと考えていると、レジの辺りがなにやら騒がしい。

見ると店員と海が何かを言い合っていた。

何を揉めているんだ？ あれ？ カードなんか持つてたけアイツ。店員さんはなんだか駄目だししているけど、しょうがねえなあまつたぐ。

立ち上がりレジに近づく。

『これで、お願ひします。』

財布からカードを出して支払いを済ませるつて、ドンだけ買つたんだよ。

レジカウンターの上には山の様に洋服が積まれていた。

『はあ～』

今日何度目かのため息をつく。

『後から、ひやんと返す』

海さん、そんな哀れな人を見るような眼差しやめてください。

確かに貧乏だけどカードくらい持つてているから、ネットするのに必要だしネットじゃなければこの島では手に入らない物いつぱいあるからだ。

それに俺はネットがなければ生きていけないプチ秋葉系だしな。

でも、あの黒いカードって何だったんだら、まさかそんな訳ないか。

海の着替えを済ませて、車を東海岸沿いの道路を北へ走らせる。

『海さん、あの……』

『海でいい』

外を向いたままそれ以上返事も無い、聞きたい事でんこ盛りなのに。

しばらく走らせるとい、そろそろ玉城崎だなと思つた時。

「クウ～」と聞き覚えがある音が車内に響いた。

『隆羅、飯！』

呼び捨てですか……

『しうがねえなあ、ここの先に飯屋があるから』

この辺で、飯食えるところは、あそこしか知らない。
また許婚とか言われたらどうしよう、そんな事を考え巡らせて
いると視線を感じた。

えつ睨んでいます？ 行きます。行かせて頂きます……

そこは、夜のバイト先のオーナーの友人で、文さん夫婦がやつて
いる可愛らしい黄色の平屋建ての小さなお店だった。

ココの一押しはタコライスか石神牛の煮込みで文さんの腕はこの島
一番だと俺は思つてゐるのだ。

『お久しぶりです、結さん』

『おつ、セー君久しぶりだね』

『ん？ その娘は』

『ただの友達です』

石神牛の煮込みをセットで一つ注文する、海は腹が減っているせいか黙々と食べている。

とりあえず一安心か。

文さん達と、他愛の無い会話をしていると、結婚の奥さんのマコ姉が興味津々な顔で聞いてきた。

『ねえ、きーちゃん、彼女?』

『マコ姉、それは、天と地がひっくり返るへりこありますん』

そう言つた瞬間、「ゴンー」と鈍い音とともに、ゴーヤに激痛が、島では弁慶の事をゴーヤって言つのだ。お願いだからゴーヤだけは跳らないで涙が出てきた。

文さん夫婦は、隣で笑つているし、シャレにならないくらい痛いんですよマジ跳りだから。

『馳走様でした、また来ますね。』

店を後にして車へ。

『なあ、海 何も喋らなかつたな』

『鬼の気配』

『えつ 鬼?
空耳ですか?』

島の最北端の平崎灯台を回つて西海岸沿いを南へ下つて市街へ戻る。

『橋・アーチ・青』

海が呟いた。連想ゲームかなんかですか?

『部屋からも見えるサザンウェストブリッヂがそんな感じかなあ』
また、海に睨まれ車を橋に向けて走らせる。

その橋は、市街地の近くにあり橋の先には人工島の公園がある。
橋に着いた時はまだ田も高く、田の前には港が広がっていた。

欄干に腰をかけ海を眺める。

さすが春の大潮ちょうど潮が動いている時間だから、もの凄い勢いで流れていた。

ふつと海を見ると辺りを見回している。
綺麗な顔立ちでメチャ可愛いのに何であんなに何時も不機嫌なのか
？

そんな事を考えながら何気なく空を見上げると黒い影がものすごい勢いで向かって来た。

『なんだあれ？』『ウモリ？』

そう思つた次の瞬間、真っ青な空とエメラルドグリーンの海が回転した。

落ちた？　いや落とされたのだ。

下は激しく流れる大潮の海。

背中の辺りから海に投げ出され『ゴボッ』水を飲んだ。
ヤバイ流される。

慌てて何とか水面に顔を出すと橋の上から何かが飛び込んでくるのが見えた。

遠くなる意識、その中で微かに見えた物は人魚？　青い長い髪でア
クアマリン色の瞳をしていた。

どれだけ時間が過ぎたのだろう、意識が引き上げられていく。

感覚が戻つてくると顔に水滴のようなものが落ちてくるのを感じる。
それは冷たくは無くとても温かかった。

ゆっくり目を開けると海の顔が見える、俺の顔を覗き込むよつじて海が泣いている。

それは海の涙だった。

『ゴ・メ・ン・ナ・サ・イ』

海が絞り出すような声で謝った。

辺りはオレンジ色の夕日に包まれている。

なんだつたんだ、あの巨大なコウモリの様なものは。体を起こし海の顔を見る。泣き止まない。まだ濡れている手で頬を伝う涙を拭いた。

『鬼』

『狙われている』

『私の責任』

擦れる様な声だった。

『大丈夫だから』

何も理解できていけどそんな気がして、海の頭を優しくなでて『家に帰ろう』と続けた。

その時、これと似た事が昔あつた様な気がした。

子どもの頃の俺・どこかの池・泣いている女の子・光の玉ぼんやりしていてハッキリとは思い出せなかつた。

海がなかなか立ち上がらうとはしない。

しゃがんで顔を覗き込むとなんだか海の顔がほのかに赤かつた。照れているのかと思った瞬間、パンチが飛んできた。

女の子の泣き顔よりは、怖い顔の方がまだましか。
殴られるのはゴメンだけどね。

あつと言つ間に、それこそ島じゅうに俺と海の噂が広まり大騒ぎになり身動きが取れなくなつてしまつていた。

『あのへタレ如月に彼女が出来たらしい』

『いや、如月の許婚らしこつて聞いたけど』

『見た事も無いくらい綺麗な女の子らしいぞ』

『クソ如月の野郎』

『彼女を泣かしたら口ロス』

『夜道は気を付けるよ』

『車に注意』

なんて中にはドス黒い話まで。

追い出すわけにもいかず。それに、まだ分からぬ事だらけだつた。

噂の件はある意味、海にはめられた感じで完璧に外堀は埋められてしまつた。

相変わらず不機嫌そうな顔しかしてくれないが。

『如月先輩!』

『あーちゃん』

『如月、行くぞ』

大型連休前の日曜日、海ちゃん大歓迎ビーチパーティーが行われた。バイト仲間、ネット仲間、店長＆オーナーまでどんなコネクションで集まつたんだ？

しかし、はつきりしている事がひとつだけみんなの目当ては、『海ただ一人』不安だ……

場所は、地元の人間しか知らないような秘密のビーチで、そこは俺のホームグラウンドと言うかホームシーと言える場所だからたぶん危険は無いだろう。

ビーチパーティーというかビーチでバーべキューが正しい言い方かな。ここ沖縄ではビーチパーティーかビーチパーティーが正式名称になっている。

準備が出来て、誰かが乾杯の音頭をとる。

『海さんようこそ石神島へ、皆で楽しくやりましょう!』

『乾杯!』

はじまちやつたよ、いきなり弾けまくつている奴等居るけど大丈夫か？

俺がそつと隅の方で静かに黙つて思つていると女の子が声を掛けた。

『先輩、如月セ・ン・パ・イ』

夜のバイト先の後輩 瞳月 美夢だった。

『ドコまでいったんですか？ B? C?』

おいおい何をいきなり聞いてくるかなこの子は。

『彼女の血液型は、誕生日は?』

『ドコの出身なんですか?』

『…… あ』

怒濤の質問攻めだった。困り果てて腕を組んだ。

『さあって、先輩! ひとつ屋根の下で暮らしているのに何も知らないなんて。それに、海さんて、小柄なのにナイスバディですよね。何カツプですか?』

なんて答えて良いもんだか戸惑つ、「水の精」だぞ、「門番」だぞ、だいたい血液型や誕生日なんかあるのか?

やはりここは黙秘だらう言つても信じてもうかる訳も無く、言えば多分変態扱いされるだらうしな。

『先輩、最低です、大馬鹿者です』

『そんな事言われてもなあ、美夢、少しぱつこいぞ。お前

『うう、先輩の馬鹿ちん!』

美夢が涙目になつていた。

『泣くなつて』

『本氣で心配しているのに』

『ゴメンな本当に、美夢は、俺にとつて妹みたいなもんだからなあ。しうがねえなあ、何かあつたらすぐ】報告するよ』

美夢の頭を優しく撫でた。

『でも、良かつた。あまりイチャイチャしないし』

『なんだか距離が空いているよつた感じで、まだチャンスありかな

あ』

『話の後の方はよく聞き取れなかつたんだけど』

『いいの、いいの、こっちの話だから』

海も皆に囲まれて大変そうだなと思つて、助け舟を出さうとする。
店長に感づかれてしまった。

『如月、お前はツマミの魚でも獲つて来い！』

『しようがねえか』

『早く行け。邪魔だ』

『ハイ、ハイ、邪魔ですか』

辺りを見ると、オーナー達は釣りを始めているし、飲んで語り合つ
ている奴等も居る。
見事なまでにバラバラだな。

マスク・シュノーケル・フインをつけてイーラン（鰯）を持つて腰
には網を括り付けて準備完了さあ行きますか。
海と目が合つた、とても哀しそうな目をしている、何故？

『早く行け！』

海の視線が気になつたが店長にせかされて海へ入つた。

『流石に早いな、あいつシュノーケリングや泳ぐことだけは上手い
からな、普段はヘタレのくせに』
いつものポイントに向かう、このイノー（礁湖）の中の地形はすべ
て頭の中に入つてゐる。

途中で何度も水面から顔を出し大体の場所を確認する。

ビーチに目をやると、流石に今日は大人数の為にビーチは貸切状態

だつた。

『海ちゃん、ドコ行くの？』

風に乗り声が聞こえてきた。

まあ、気にする事ないか、皆が居る事だし。魚獲りに集中する。

おつ居た、居た。大きなジャノメナマコ、イーグンでチョンチョンとノックしてウートートー（お祈り）をする。

『なに？ 誰かに見られている感じがする』

キヨロキヨロと見渡すが誰も居ない。気のせいだろ？と思いつつ、ひとり通りポイントを回つてミーバイ（ハタ）やクモ貝などを獲りビーチに戻る。

早めに戻らないとウルサイ奴等が多いし、海の事も気になった。途中でまた、巨大ジャノメナマコせんにノックをしてウートートーする。

『まだ、誰？ 誰も居るわけ無いか……』

ビーチに戻ると宴もたけなわ、店長やオーナーが矢継ぎ早に命令を下した。

『如月、遅いぞ！』

『獲物をとつととさばけ酒の肴が無いぞ』

まったく、この人たちは俺を何だと思つていいんだ。

『下僕』

『ヘタレ』

左様で御座いますか。

渋々、波打ち際で魚をさばいていると、美夢が近づいてきた。

『先輩、海さん見ませんでしたか?』

『海がどうかしたのか美夢』

『先輩が海に入つて少ししたら、海さんも泳ぎに行つたやつたみたいで』

辺りを見渡すと居た。少し離れた珊瑚の岩の上で海を眺めていた。

『あそこにはいるじやんか』

『本當だ、海さん』

美夢が海に向つて走り出した。

あれ、アイツ水着なんか着てたつけ? そんな事を考えながら魚をねばく。

夕方になり片づけをして撤収タイム&お開きになつた。

帰りの車の助手席で海が寝息をたてている、かなり疲れたのだろう。本当に、寝ているときの顔は、まだドコとなくあどけなくつて可愛いんだけどなあ。

今日は俺も本當に疲れた、ほとんどパシリか酒の肴状態。でも、アイツのはにかむ様な笑顔も初めて見られだし、あんな顔もするんだな。

そんな他愛の無い事を考えている内にアパートに着き海を起しき。起きないどうするか。

『お~い、海、しょうがねえなあ。』

起しきないようにそつと抱き上げる、軽い! それでも、万年運動不足のヘタレには3階まではかなりキツイ。

『あ~、起きた……あのそんな怖い顔しなくても、危ないから暴れ

るな！』

抱き上げていた海が暴れて落ちた。バランスを崩し階段を数段踏み外し、背中と頭を踊り場の壁に打ち付ける。

『つつ、痛つてえ！』

『海？ 怪我は無いか？』

ありえないくらい目の前に、海の顔があつた。

お姫様抱つこのまま、後ろに倒れて慌てて思い切り抱きしめていた。

『ボツ』と音がするくらい海の顔が真つ赤になり、そのとたん頬に平手が飛んできた。

海は怒った顔をして落ちている鍵を取り、部屋に入っていた。

部屋に戻ると、海はシャワーを浴びていた。

俺は車に置いてある荷物を取りに駐車場に降りた。
何でこんな目にばかり逢つのだろう、ただの一般ピープルだぞヘタレだけど。

優柔不断、誰にでも優し過ぎで良い人とよく言われるけど良い人つて都合の良い人つて事だろう。

『はつきりしないその性格は、確実に痛い目に逢うからな』

3バカトリオと呼ばれていた頃のスギやクロにはよく言われたよなあ。

確かに、痛い目に逢いつばなしだった。
部屋に戻ると、海は髪を乾かしていた。

『さあ、俺もシャワー浴るか』

その前にイーグンやマスクやフインを洗つ為に浴室に運びシャワーで水洗いする。

その後でカラスの行水ごとシャワーを浴びて部屋へ行く。

『何？』

海が何か言いたそうに、俺の顔を見上げている。

相変わらずの険しい顔で、何かしましたか僕？

『隆羅、海の中で何していた？』

『魚や貝を獲つていたけど』

『違う。祈り？』

『祈り？ ウーネーーーーの事か？ あれは、海の神様にお邪魔しますとありがとうと言つていたのだ。海に潜るときに必ずする儀式の様なものだ。信心深い訳じやないけれど、海や山、空や風、木々や土、自然の中には何故か神様がいると子どもの頃から信じてきたからな』

『でも、隆羅は魚食べない』

確かに俺は魚貝類が苦手だ。

『だからと言って無闇に獲つている訳じやないし、無益な殺生はない』

『必要な分だけ、その日獲れる分だけしか獲らない。時々、小遣い稼ぎにはしているが潜つて魚獲りや名底湾でのカニ獲りは、楽しい生活の一部だし、魚やカニをあげて喜んで貰つてくれる人達もいる。その笑顔は何にも代えられないし、命を無駄にしているつもりもない。何よりも、俺は海が大好きだ。泳ぐのも見ているだけでも。それじや、駄目か？』

『駄目じやない』

少し何かを考えて、海が答えた。

『でも、鈎は危険だし怖い』

『怖い？』

そうか、だから今までんな顔していたのか。

『海、いいか良く聞いてくれ。人間が作り出した物は、殆ど便利な道具だと思つ。でも、悲しい事にその殆どの物が凶器にもなつてしまつ。それは道具を使う人の心によつて便利な物にも凶器にもなつてしまつ。道具に責任は無いんだ』

『俺は、今まで、そしてこれからも海かいも海うみも傷付ける事は絶対にしない。信じて欲しい。』

俺の部屋には釣竿、網、鈎なんかの漁具がいっぱい置いてある。だから警戒していたのだろう、怖かったのだ。言葉だけで信じて貰えるだろ?か。

そんな思いはしばらくすると何処かに消えてしまつてゐる事に気が付いた。

海の瞳の中に僅かに優しさが見えるよつになつたから。

しばりくして困った事がいくつか起るようになった。

今朝も、良い匂いが鼻をくすぐる、そして、とても柔らかく温かい物が……

「ドクン！」

心臓の鼓動が跳ね上がる。

海が何故、俺の横で寝息を立てているのか？
あれから、少しずつ誤解が解けて、ほんのちょっとだけ海を近くに感じるって近すぎるだろう。
困った事のひとつがこれだ。

俺は、朝と夜のバイトを掛け持ちでしていてプライベートな時間など殆どないのだが。
睡眠時間を削つて時間をひねり出している。

そのひねり出した時間は何をするかと言えば、もちろんチチ秋葉系の俺はパソコンの前に張り付いているわけだ。

海はとと言うと俺の後ろのベッドで気持ちよさそうに寝息を立てている。

健全な男女がこんなに近くにいてと思うかもしないが、ドキドキしない訳では決してないのだが。

俺も一応男だし。

しかしだ、見た目はアイドルも顔負けの凛としたとても可愛い女の子だが「水の精」だぞ「門の番人」だぞ。

今までの経験上、何かしらうものならボコボコの壁に逢つのは確実だった。

それ故、俺はソファーで寝ているのだが、朝、目を覚ますと目の前

に海が居て。

海がソファーで寝ていれば俺はベッドで。

そして朝になると海もベッドの中に潜り込んでいる。ほかの部屋で寝ればいいだろ?と思つかもしれないが、それは、また違う意味で困つた事が起きているのだ。

仕方なく、他の部屋で寝た事があるのだが。
朝、聞き覚えのない声で起きた。

『おい、ヘタレ朝飯はまだか』

体の上に何かが乗りそこから声がする。

『キサラギ、喉が渴いた』

もづひとつの声は耳元で。

目を開けると黒猫のロンが俺の胸の上で、そして耳元では雉虎の猫チイーが……

しばりくぼんやりしていると。

『喉渴いたつてば、がぶつ』

『痛つて』

耳をかじられた。

昔から、猫が2匹住んでいて食事を『与えている。

住んでいると言うのは俺が飼い始めたわけでなくいつの間にか居座るようになつてしまつたのだ。

パソコンとベッドのある俺の部屋には、こいつ等が入らないよう正在しているのだが。

他の部屋は出入り自由に使わせている。

その猫たちがしゃべりだしたのだ。

しゃべりだした訳ではなく俺が動物の鳴き声を理解出来る様になつ

てしまつたというが正しいのかもしれない。
あの光のせいなのだろうか。

理由は後で分かる事ながら、今の俺には分かるはずもなかつた。
そして、俺の知らない所で静かに確實にとんでもない計画が進めら
れていたのだつた。

それは突然やつてきた。

梅雨も終わり、そろそろ石神島もトップシーズンにならうかと言つ
6月の終わりの土曜日の朝だつた。

『今日も、暑い1日なのかな』

などと考えながら、いつもの様に事務所でタイムカードを押し職場
に向かう。

朝のバイトは大型店舗の中のベーカリーの仕事だつた。

店長が早朝に仕込みをしたものを、俺がオープンで焼き上げる。
そして、焼き上げながらサーティーアンダギーなんかも揚げていた。
自慢じや ないけど（ちょっと自慢）サーティーアンダギーは俺のオリ
ジナルも含めて60種類くらいあるのだ。

『お早うございます、店長』

『相変わらず、朝から良い匂いさせているな、このヘタレエロ魔人
め』

いやいや好きで良い匂いさせている訳じゃないですし。

『まあ、お前とも、これで最後だからな。』

『えつ店長、転勤でもするんですか？』

『お前の後釜が決まつたんだよ。』

『へっ？ 僕クビですか？』

『クビって訳じやないのだが、上からな滅茶苦茶歯切れの悪い言葉だつた。』

『上からつて、クビと一緒にじやないですか！』

『まあ、元気にやれよ、海さんに宣しくな』

俺の肩をたたいて微妙な笑顔を繕つて店長が言った。まったく納得できなかつたが、じたばたしてもしょづがない。ひと通り仕事を終える、ここも今日までなのか。まあナンクルナイサーだ。

『お世話になりました、今まで有難う御座いました。』

礼だけはきりんとしるど、小さい頃から叩き込まれてきた。俺の実家はとても躰の厳しい家だつた。

考へても答えが出るわけもなく、夜のバイトに向かつた。

夜のバイトは、居酒屋の調理だ。

睦月美夢がホール、オーナーはホール兼調理でオーナーは他にも店舗を持つていてるからいつも居る訳じやなかつた。

朝も夜も調理系の仕事な訳だ理由は簡単。

昔から料理やお菓子作りが大好きで、自分でもかなりいけていると思つていたりする。

それに、美味しい物を食べている幸せそつた顔を見るのがこの上もなく大好きだつたりするからだ。

夕方、そろそろ美夢が出勤の時間かなと思い時計を見ると5時を指そうとしていた。

『おはよつ』『やこ』『ます』

美夢の声がいやに沈んだ暗い声だった。

不思議に思い調理場から顔を出し『おはよつ』と声を掛けた。すると今にも泣きそうな顔で抱きついて来た。

『先輩、辞めちゃうつて本当ですか?』

『美夢、何を言つているんだ?』

『だつて、オーナーから連絡があつて、先輩が内地に帰るつて』話がまったく見えず。とりあえず、オーナーに連絡を入れてみる。今は手が離せない状態なので居酒屋のクローズ時に話に来るとの事だつた。

いつたい何が起きているんだ? 朝も夜も勘弁して欲しい。

居酒屋も一息ついて賄いを食べて片付けを始め、30分程で片付け終わらせてオーナーが来るのを待つ。

『美夢は明日、朝から海たちと遊ぶ約束しているんだる、早く帰れ俺の シャツの裾を掴んで離さず美夢が帰らつとしなかつた。そして哀しそうな目で俺を見た。

『しようがねえなあ、まったく、そんな目で見るな分かつたから、話を聞くだけだぞ。』

『うん』

ほんの少し笑つて頷いた。

オーナーの話を纏めるところだつた。

オーナーの携帯に昨日連絡がありその内容は、『如月様のご両親の代理の者ですが、お会いして取り急ぎお話したい事があると』。会つてみると、とても綺麗な女性で何処かの弁護士か秘書かみたいな感じだつたらしい。

そして、委任状を見せられ、俺を何があつても内地に連れて帰ると

告げたらしい。

その委任状を見ると、そこには確かに親父たちの字で『如月 仁じん』『如月 沙羅さら』と署名捺印されていた。

オ

ーナーも対応に困り俺に確認しようとしていたらしい。

そして、代理人の名前は『水無月 潮つしお』嫌な予感がする、水無月って海の知り合いか？

『とりあえず、保留にしてください、両親に確認してみます』

クソ親父舐めるなよ。

深夜に帰宅する為、今日は実家に連絡も出来ず。

家に帰りパソコンに向かっていたが苛ついて落ち着かなかつた。いつたい何が起こっているんだ訳が分からぬ。後ろを振り向くと、海は気持ちよさそうに寝ている。

こんな時は、料理するに限る（持論だが）。

料理をしていると不思議と落ち着いてくるものなのだ。

キッチンで作業を開始した。

しばらくすると眠そうな目をして海が起きてきました。

『隆羅、何をしているの？』

『海、起こしちゃったか、ゴメンな』

『今ちよつとケーキを焼いているんだ』

『ケーキ？』

『そり、ガトーショコラ』

キッチンにはチョコレートの甘い香りが立ち込めている。

ふにやつと海が満面の笑顔を浮かべた。

くう、可愛い過ぎる抱きしめたい衝動に駆られていると、俺の背中

『おーおー海、
こことおでこをくつけて来た。

『おーおー海、

海さん？ しょうがない奴だな』

固まつてこると返事がない、もしかして寝てこいつ。

『すう～～すう～～』

寝息を立てていた。

海を部屋に連れて行き寝かせる。

焼き上がったガトーショコラを軽くラッピングしてメモを貼り付けて。

『海へ みんなで食べてくれ。 隆羅』ヒ。

昨夜遅かつたし朝のバイトも無くなつたそんな訳で、遅い時間まで
ゆつくり寝ていると視線を感じる。

海は朝から遊びに出てこむし、猫たちがこの部屋に入るのはすむない
じゃ、誰？

目を開ける。

そこにはメガネをかけて長い髪を後ろで一つに束ねている、海に良
く似たとても綺麗な女性が俺の顔を覗いている。

『おはようござります、如月さん』

『うわあ～』

飛び起きて壁際に後ずさつする。

『そんない、驚かなくともいいじゃありませんか？』

いや普通は驚くでしょう。

『私、水無月 潮と申します』

水無月 潮その名前はどうかで聞き覚えのある名前だった。

『あつ、代理人の人』

『ハイ、海の姉です。』

『海のお姉さんですか?』

海のお姉さんならびづやつて何処から入つてきたなんて聞くだけ無駄だらう、慣れつて怖いものだ。着替えを済ませて話を聞いてみる事にした。

『朝のバイトの件は、少し圧力を掛けさせて頂きました。』

『あらつと壓力って、あなた達はいったい何者ですか?』

『秘密です』

委任状の件は石神島でお付き合つさせて頂いて、妹の姉だと言つたら快く話を聞いてくれたとの事らしい。

お袋達はなんですが信じるかな、まったく。

『隆羅様をこちらに連れて帰つて来たいと申し上げたらお母様はとても喜んでいらっしゃいました』

クソ親父は、お袋が喜ぶ事なら絶対に反対しないからな。

そして彼女は、少し強い口調でこう言つた

『何があつても一緒に帰つていただきます。』

腹がたつた、俺の意思なんかまったく無視して無理やりこでも事を起こそうとしている事に。

あのクソ親父と同じ事をしようとしている人に對して。

実家にいる時も、特にやりたい事もないままフリーターをしていました。
そしてある日、親父が勝手に就職先を決めてきたのだ。

今回の様にバイト先に手を回し俺をクビにして。

親父のやり方にキレて俺はあつたけの金を集めて家を飛び出した
のだ。

『自分だけの力で生きてやる』

『お前に何が出来る、絶対無理だ。馬鹿者が』

『やつてやるよ』

そして、東京から2000キロ離れたこの島に辿り着いたのだ。

彼女に告げた。

『ふざけないで下さい。俺は何処にも行く来はありません
そう言って部屋を飛び出した。

『しかたない。それじゃ海ちゃんでも探しに行つてみましょ

その頃、海たちは街中のアーケードを抜けた所にある甘い物大好きな女の子御用達のバーラハウスに向かつて歩いていた。

『海ちゃんて兄弟いるの?』

『3人姉妹だよ』

そんな事を話しながら歩いていると。

『いたいた、海ちゃんお久しぶり』

潮さんが手を振りながら海に微笑んだ。

『えつ? 潮お姉ちゃん、ビうしたの? 突然』

『はじめまして、私、海ちゃんの友達の睦月美夢って言います』

美夢が潮に自己紹介をして頭を下げた。

『ハイ、はじめまして海の姉の潮です。宜しくね』

『ねえねえ、海ちゃん。お姉さんて、すごく綺麗な人だね』

『あらあら、ありがと。私、素直な子大好きよ。これから何処かに行くの?』

『あそこにある、バーラハウスで甘い物を食べに行こうかと』

『じゃ、お姉さんがみんなにじて馳走してあげる、その代わりー一緒にせて頂戴ね』

『やつた! ラッキー。海ちゃんのお姉さんて、大人な感じで素敵だね』

『でも、お姉ちゃん怒るとものすごく怖いんだよ』

海が小声で言つた。

『そう言えば、如月先輩も海ちゃんが怒るとすぐ怖いって言つてたけ』

美夢がいらない事を言つ。

『隆羅、ロロス』

海がつぶやいた。

『ヘックション』

風邪でもひいたかな。

ここはアパートから程近い海岸。サウスウェストブリッジが良く見えた。

考え事をする時に良く来る場所だ。

防波堤の上に腰を下ろして海を眺めていると声がした。

『如月先輩』

自転車に乗つた美夢だった。

『もうお開きか?』

『海ちゃんのお姉さんが来て、2人で話がしたいからつて、それに時間も時間だしね』

空は、まだ明るかった。腕時計を見る。

『もう6時過ぎか石神島は日が長いからな』

『先輩はこんな所で、何しているのですか?』

『なんも別に』

『また、隠し事ですか?』

『そんなんじゃないってば本当に、それにいつ俺が隠し事した?』

『海ちゃんの事とか、海ちゃんの事とか』

ふっと空を見上げると、影が見えた嫌な気がする。

あのサウスウエストブリッジの出来事が脳裏をかすめる。

嫌な予感は的中するもので、その影は美夢の真後ろに降りた。

『鍵を渡せ！』

『美夢、逃げろ！』

遅かった。美夢は手を掴まれてその瞬間気を失つてしまつ。

そして影の足元に崩れ落ちた。

『鍵を渡せ！』

『美夢に手を出すなよ』

影が、足で美夢を抑えようとした瞬間。俺の頭の中で「バチン」と音を立てて何かが弾けた。

体が熱い。

体中がちぎれそうだ。

何かがものすごい勢いで膨れあがつてくる意識が飛びそうだ。
必死に何とかしようとするがどうにも出来ない。

右腕を見るとタトゥーの様な模様が浮かび上がっていた。

何が起こっているのかまったく理解出来ない。

理解とかの問題じゃない、すでにそんな物何処かにぶつ飛んでいた。
でも、この感覚は前にも……

『うおおおおおおおおお』

訳もわからず雄たけびを上げていた。

近くの街灯が、爆発する様に割れ。

影が苦しんでいる、何故だ？

頭が割れてしまいそうになり再び雄たけびを上げる。

『つおおおおおおおおおおおお…』

ものすごい閃光が走り、凄まじい炸裂音が響きわたり離れた所の車のフロントガラスが割れ影が消し飛んだ。

次の瞬間。

「ドクン」と胸に激痛が走り意識が途切れた。

夢を見ていた。

子どもの頃、何処かの池のそばで泣いている女の子と何かを探している。

青い光。

女の子が笑っているように見える。

顔はよく分からなかつた女の子の言葉。

『誰にも絶対に内緒だよ……』

そこで目が覚めた。

『ここは俺の部屋か?』

自分のベッドの上だつた。

頭が割れそうに痛い起き上がりうつとすると体中に激痛が走つた。

『痛つてえ、何なんだ』

意識がはつきりしてくる。

『そう言えば美夢が、美夢』

『まだ、起きちゃ駄目…』

ベッドから立ち上がるうつとすると海に止められた。

『彼女は大丈夫ですよ。ちゃんと家にお送りしました。気を失つていて何も覚えてないようでしたけど』

その静かな声は潮さんだつた。

『何があつたのですか? 私たちが行つた時には2人が氣を失つて

倒れていただけでしたけど』

『影が現れてからの事を全て話した。

しかし、頭の中で何かが弾けてから『記憶はとても曖昧だった。

『影が言つていた鍵つて何ですか？』

『この際、全て聞いておこうと思った。

『如月君は、海から何処まで聞いているのかしら』

『水の精・門番・鍵を落とした事、それと鬼に狙われているくらいかなあ』

『分からない事だらけなのである。』

『潮さんが優しい声で話し始めた。』

『私たちが水の精であることは、知っているのね。この事は誰かに話した？』

『いいえ、誰にも。話したところで誰も信じてくれないでしょう。』

『ありがとうございます。あなたは信じてくれるのね、優しいんだ。』

『でも、水の精つて』

『如月君も聞いた事があるでしょう。人魚・龍・河童、全て水の精、水の妖かし。セイレーンとかライン川のローレライも仲間みたいなものかなあ』

『そして、私たちは人の世とあの世を結ぶ門番の一族』

『門は、いったい何処に在るのですか？』

『その門は、何処にでも在つて、何処にも無いものよ。水はある世の通り道つて聞いた事は無いから水さえあれば、門は何処にでも現れる』

『あれですか、お盆に海に行くなつてやつ』

『それもその1つ、お盆には門が開きやすくなるから』

『その門の鍵が、今、あなたの体の中にある』

『俺の体の中に? まさか、何故?』

『それは、事故と言いつか、偶然と言いつか。海ちゃんが、鍵を運んでいるときに落としちやつて、たまたま下にあなたがね』

『ねつて。それって、あの水色の光の玉……』

潮さん人の話を聞いています? 俺の事なんかお構い無しに潮さんが話を続けた。

『あなたの体の中の鍵で門を開けてしまつと完全にあの世と繋がつてしまつ。そうなれば人間の世界は地獄と化してしまつ。それを企んでいるのが鬼と呼ばれる者たちよ。そして、あなたを狙つてきた影は鬼が使う使い魔。鬼は陸上の動物を使い魔にする事が出来るの。多分あれは元々コウモリね。ここからが、如月君あなたの体について。すこし、あなたの事を調べさせてもらつたわ。あなたの体には退魔師の血が流れているのそれも少し特別な退魔師の末裔なのよ、あなたは』

『俺が退魔師の末裔、そんな冗談みたいな話、聞いた事ないですよ』

『冗談じゃないわ、あなたの名前の「羅」の文字、それは代々受け継がれてきた文字、もちろんお母様の名前にも含まれている。少し特別なつて言つのは、あなたの一族は鬼の力で鬼や妖かしを封じている、簡単に言つと退魔師の血じやなくて鬼の血が流れているの』

『俺の体に鬼の血が』

さらに分からぬ事が増えてきた。

『鬼の力を発動させると体に文様が現れる事、このくらいしか私たちにも分からなかつた。鬼の力は全てを燃やし尽くす地獄の業火。そして私たちの力は業火を消し去る水の力。そして二つの力は決し

て交わらない。しかし、今あなたの体の中には、鬼の力と水の力が一つの場所にある』

『どれだけ説明されても判らない事だらけだった。

『これはありえない事なの。あなたは特異体質なのかも……今あなたには力を制御できていない。もし力を全て放出してしまえば廃人か死が待っている。今回は、あなたの中の鍵の力が相殺しあつてこれだけで済んだけど、非常に危険で不安定な状態なの』

そんな事を話されてもいまだにピンとこない。

俺にどうしろと言つのだ、俺自身の力でどうにかなる問題じゃないだろ。

奥歯をかみ締めた。

『鍵を取り出す方法は無いのですか?』

『それも、今は解らないわ。普通の人なら鍵に触れた時点で死んでいる。たとえ鬼の力があつてもただじゃ済まない筈なの』

理解の範疇を超えていた。

判るといえば普通に暮らし普通に生きてきたそんな俺が周りの人間を大切な仲間を巻き込んでいる。

俺の所為で……揺れていた。

『後悔しているのね、あの子を巻き込んでしまった事。それはあなたの責任じゃないわ。でもここにいれば、また同じ事が起こる可能性はある』

潮さんの言葉が決め手となつた。

『俺はここに居てはいけない存在なのだと』

彼女たちに従う。今の俺にはそれしか出来なかつた。

ひと通り話しあつると『クウ~』海のお腹の虫が鳴いていた。緊張感がない奴だな鼻で笑つたら「ゴフツ」と殴られた。

『あらあら、うふふ』

潮さん笑つてないで何とか言つてください。

『仲が良いのね』

『コンビニで食べ物、買つてくる』

そう言い、海が部屋を出ようとしたりしたので『しょうがねえなあ』と言
いながら財布を渡した。

そして、すっかり体や頭の痛みが無くなっているのに気付いた。
潮さん曰く、水の力（鍵）にはヒーリングの力もあるとの事だった。
体の痛みも無くなつたのでシャワーでも浴びようかと思い。
起きて歩き出すと潮さんが忠告してきた。

『体に文様が出ている時は、水に触っちゃ駄目よ』
『はいはい、分かりましたよ』

『本当に分かつたの?』

『何がですか?』

『行つてらつしゃい、うふふ。体に教えないと駄目なのかしり?』

如月君で

シャワーを浴びた瞬間、全身にスタンガンも真つ青なぐらいの電撃
が走る。

薄つすらと文様が残つていたのだ、軽く意識が吹っ飛んだ。

『だから言つたのに力が放出するつて。それと放出し過ぎると死ん
じやうからネ』

そんな事言つてないでしょ、まったく。

『でも、如月君て可愛い、うふふ』

つて何がですか……

『「あれも」それと、しばらく私もここに住むからヨロシクね』

そう感電して吹っ飛んだ俺を、運び体を拭いてくれたのは潮さんだ
つた。

『感電? そんな事、ありえるはずが無い』

潮さんが隆羅に聞こえない様に呟き唇をかんだ。

数日後、俺の職場だつた居酒屋で送別会が行われた。店長と美夢には、家庭の事情で帰らなければならなくなつたと説明した。

潮さんも誘つたのだが……

『私、ちょっとした有名人だし仕事があるからバスさせて頃戴』と不参加だつた。

『おす!』

『先輩!』

手を少し上げ美夢に軽く挨拶をすると飛び跳ねながら近づいてきた。

『先輩、体は大丈夫なのですか? 雷が落ちたらしいですね。気が付いたら家で寝ていてビックリしちゃいました』

『お前こそ体なんともないのか?』

『はい。私、体だけは丈夫ですから』

『俺もだ』

2人して笑う美夢が無事で本当によかつた。

ここでも海は大人気だつた、海の周りに人だかりが出来ている。送別会と言う宴会は盛り上がり皆楽しそうにしていた。

今日の主役は一応俺だぞそんなドウでも良い事を考えていると、いつに無くハイテンションな美夢が俺にべつたりくつついて来た。

『相変わらず美夢ちゃんは、先輩大好きっ子だね』

姉妹店の女の子が言つた。

『如月さんは、どうなんですか?』

『どうつて言われても、こいつは妹みたいなもんだから『楽しく話をしているとあつという間に時間が過ぎていつた。』

『そろそろ時間も時間なのでこの辺で閉めたいと思います』

『……如月君、内地に行つてもがんばつてください』

閉めの挨拶はオーナーだつた。

さつきまで笑っていた美夢が泣きじゅくしながら抱きつきました。

『私……グシュ……先輩の……グシュ……事がグシュ』

殆ど言葉になつていなかつた。

しゃくり上げながら泣いていたが酒が入つてゐせもあるのだらう、しばらくすると眠つてしまつた。

『おい如月、ちゃんと美夢ちゃん送れよ』

『へいへい』

美夢は俺の背中で気持ち良さそうに寝息をたてていた『好きだら』意味分からぬ寝言を言つながら。

出発は翌日の午後だつた。

送別会の前に潮さんに確認をしておいたのだ。

『明日よ、明日の午後』

『明日つてなんでそんなに急に』

『善は急げつて言つでしょ、文句言わない!』

『何も準備していないですよ』

『ノープロブレム。着替えだけでいいから』

『アパートはどうするんですか? 俺の荷物まんまだし』

『モーマンタイ。ここは水無月家が管理します。ちゅうどいこんな島にも部屋欲しかつたしね、鳥小屋みたいに狭いけど』

『鳥小屋つて……』

猫たちは元から自由に入入りしていたから問題ないだらう。見送りはするのもされるのも嫌なので出発前に居酒屋の前で別れる事にした。

美夢の目はもう既に真つ赤だつた。

『先輩のデカプリンや贿いもう食べられないのですね』

『また、作つてやる必ず。ほら、指切り』

美夢の頭を撫でながら言つた。

『先輩、子どもです』

『お前もな』

「さよなら」は言わない。

ここが俺のホームだと思っているから。

『じゃあ、行つてきます』

そう言つてみんなと別れた。

タクシーに乗り、空港までと詰め合つとして潮さんに遮られた。

『ターミナルまで』

『ターミナルって港ですか?』

今日、船なんか出でていたかな?

離島に住んでいる故に大きな船の出入りを把握していないと商売に支障をきたすのだ。

『行けば分かるわよ』

潮さんがそんな俺の不安を笑い飛ばした。

石神港ターミナルに着くとそこには馬鹿でかい客船が停泊していた。

『なんだ、こんな大きな船見た事無いぞ』

『東京まで行くつて言うから、ちょっと寄り道してもらつたの』

『ちょっと寄り道つて、あなた達はいつたい』

『それは、ヒ・ミ・ツ』

潮さんが嬉しそうに口に入差し指をあてた。

『俺、船苦手なんですけど』

『男の子がグズグズ言わない。可愛いかつたけどね、うふふ』

『マジ、勘弁してください』

海は何も言わず、俺の腕にいつまでも抱きついたままだつた。

『確実に迷子になるな』

それくらい大きな船でクルーは日本人が殆どだけどお客さんは外国人ばかりだつた。

デッキにでて海を見ていた。

何日くらいで着くのだろう、俺が石神島に来た時も船だつたけど、本島経由で1週間くらい時間がかかつた気がするのだが。

『そんなに不安な顔をしなくても大丈夫よ』

不意に横から声がした、潮さんだつた。

『鬼たちも海の上では襲つて来ないわ。それに、あなたが影を消滅させたから退魔の力があると分かっているはず、だからじばりくは安全よ』

『海はどうしているんですか?』

『部屋で寝ているわよ。心配?』

『いや別に』

『素直じゃ無いんだから』

そんな事を言いながら潮さんは仕事があるからと言つて戻つていった。船旅はとても快適だつた。

何より色々な事を見つめなおす時間が出来た。

俺は1日の大半をテックのサマーベッドで過ごしていた。

いろいろな事、主に過去の事を考えていると時々断片的に記憶がフ

ラッショバックする。

「校舎裏」

「不良グループに囲まれている」

「突然割れるガラス」

「白い部屋、病院か?」

覚醒したあの時の感覚が甦りゾッとする。

幼い頃、婆ちゃんが、俺の額に指を当て何かをつぶやいている。

「お前は、出逢い必ず助けてくれる」

「愛は力なのよ、宿命は変えられない でもね……」

「まだ、お前に難しいかな」

霞がかかっていてぼんやりとしか思い出せない。

バイクで事故に遭い、病院に担ぎ込まれ。泣いているお袋を見た瞬間。重傷の俺を殴りつけたクソ親父の事など、とりあえずいろんなことが頭に浮かんでは消えていく。

そして、これから未来の事も考える。

海の事・石神島の事・行く先の事、不安が無いわけじゃない。
でも今、考え込んで仕方が無いのだ。
何とかなるさ、島で教わったのだ。

『ナンクルナイサー』

数日が過ぎ東京が近づいてきた。

あれは横浜の、みなとみらいの観覧車かな？

下船すると黒塗りの高級車が待ち構えていた。
車に乗せられ横浜方面に車は走り出す。

ここは、どちら辺なんだ？

あまり横浜方面的地理は詳しくないのだが。

あれ、ここって？

普通の鉄筋2階建てのアパートの前に車が止まつた。
変わつた所と言えばアパートの前に大きな森がある事位だらう
か。

『いいで、生活してもらつから良いわね』

『いいから辺て、横浜の小倉山じゃないですか』

『そりだけど、どうして？』

『いや、前に半年くらい小倉山に住んでいた事があるので』

『それじゃ安心ね。多少地理も分かるでしょ？』

部屋は2階だつた、部屋に入るとガランとして何も無いワンルーム
だつた。

『あの、何も無いんですけれど』

『あつ、忘れていたわ。明日、海と買い物して来てちょうだいね。
今日は、とりあえずこっちへ』

アパートを出て裏手に案内される。

そこには高い塀がありすぐ近くに大きな門があつた。
門をくぐり森の中を歩いて進んでいく。

『私、先に行くね』

『転ばないようにね』

海が言い走りだすと潮さんが子どもに言い聞かすように声をかけた。

『やう言えば、如月君もといター君は海とどこまで行つていいのか
しり』

『潮さん、ター君は却下です』

『そんな事、私に言つていいのかなあ？　この写真を海に見せちゃうぞ。いいのかなあ』

その写真は、俺が感電してプチ失神した時の生まれたままの格好で白目をむきピクピクしている写真だった。

『マジで勘弁してください、お願いします』

顔から血の氣が引いて泣きそうになつた。

『ター君はヘタレだもんね、うふふ』

『黙秘しますつて、何もあるわけ無いじゃないですか？』

『本当にヘタレね、あんな可愛い子がそばに居るのに』

『はいはい、どうせヘタレですよ。俺は』

視界の中に大きな黒い動物が入つてきた。

『キルシユお出迎えご苦労様』

『潮さん。猫にしてはデカくないですか？』

『サーバルキャットよ。黒くされちゃつた』

『さらつとすごい事言つてないですか？』

『豹柄が黒くなつたつていつたい何が……』

でつかい黒猫の横を通り過ぎよつとした時に『ヘタレ』と声がした。

『コイツか？』

猫にヘタレ呼ばわりされる覚えは無いので軽く鼻で笑うと飛び掛つてきた。

押し倒されてマウントポジションを取られた。

『キルシユ！　海の大切なお客様よ。止めなさい』

『後で、シラかせ』

潮さんが制すとキルシユが耳元で囁いた。

20分くらい歩いたらうか田の前が急に開け、そして田を躊躇つた。目に飛び込んで来たのは何と表現すればいいのだろう、そう「水の宮殿」だ。

とても澄んだ大きな池がありその上に、ガラス張りの2階建てくらいの大きな四角い建物が建つていて、

建つていろと言つより浮かんでいと言つた方が正しいかもしだい。

池のほとりにはカキツバタかハナショウブが植えられていてとても幻想的である。

その隣には半地下の建物があり、その建物の屋根の部分にも綺麗に手入れされた芝が敷き詰められていた。

多分ガレージか何かだろう。

『あの、こんな事聞いて良いのか分からぬのですが、両親もいらっしゃるのですか』

緊張してへんな日本語でしゃべっている。

『ター君、緊張しているのとても変よ。父はとても忙しい人だから滅多に屋敷には顔出さないわ。母は海が幼い頃に亡くなっているの一般ピープルがこんな所に連れてこられて緊張しない訳がないのだ。』

『あまり気にしないでね、もう昔の事だから。ここには私たち3人姉妹しか暮らしていないわ。そうそう、ター君にはここも案内しないや』

ター君はやめて下さって何度も言つてているのに……

潮さんに連れて行かれたのはあの半地下状の建物だった。

中に入るとそこはメチャメチャ広いガレージになつていた。

ガレージと言つよつ車の展示場の様と表現した方が良いかもしだい。

ぱつと見た感じヤンチャな車ばかりの気がした。

『なんで俺をここに?』

『ター君はこいつの好きでしょ。島のポンコツもかなりいじつてあつたじゃない。それに何度もバイクやカーレースで入賞しているみたいだし。よければ好きに使っていいわよ。キーは付けたままだから、ガソリンは満タンで返してね。それと屋敷内の設備は自由に使ってかまわないから』

『なんでそんな事まで、あなた達はいつたい』

『言つたじゃない。ター君の事、調べさせてもらつたつて』

『潮さんにかかると丸裸ですね』

『そう、スッポンポンよ』

潮さんの視線に気付きたじろいだ、つて何処見ているんですかまつたぐ。

『本当に、マジ勘弁してください』

バイクやカートのレースは子どもの頃から、クソ親父に無理矢理やらされていたのだ。

年齢詐称までしかして。

親父は若い頃かなりヤンチャだつたらしく、ビジギの族のヘッドまでやつていたらしい。

そして、車やバイクのレースにのめり込んでいて俺も出場させられていたのだ。

入賞しなければ小遣いは遣らないと黙つ脣しを掛けられて。

クソ親父は今でもヤンチャなのは変わり無く『今でも、ワンコールで、百人以上は集まるぞ』なんて平氣で言いやがるくらいだった。その後で広いお屋敷の一室に案内される。

『今日は、ここで休んでね、用があるのならこれを鳴らしなさい。明日の朝、迎えをよこすから』

と言われ小さなベルを渡された。

こんなのアニメの世界でしか見た事無いぞ、メイドさんでも出でくるのかな。

まあ、そんな事はどうでも良いのだ。今日は疲れたから眠る事にした。

『如月様。潮様がお呼びです』

翌朝ノックの音で目が覚めた返事をして着替えてからドアを開けるとそこにはメイドさんじゃなくて黒いスースツ姿の男の人人が立つていた。

『潮様がお呼びです。こちらへどうぞ』

「水の宮殿」の中の廊下を黒服の人連れられて歩いていると、後

るの方から誰かが走つてくる気配を感じ振り返る。

いきなりドロップキックが飛んで来た。

吹き飛ばされて床に頭を打ち付ける。

『痛つ……』

呻きながら見上げると海より一回り小さいツインテールの女の子が仁王立ちしていた。

『お前なんかに、海お姉ちゃんは渡さないからな！』

『凪な、ぎお嬢様も、ご一緒に』

黒服が何事も無かつたように言つた。

大きな食堂に通されると、そこには潮さんと海が座っていた。凪とか言う女の子は直ぐに海の後ろに隠れすごい形相で俺を睨みつけていた。

『あらあら、ター君は凪にすっかり嫌われちゃったわね。うふふ、凪は海のこと大好きだからね』

『そうそう、凪は一番下の妹よ。ヨロシクね』

朝食を済ませ、海と俺の部屋に必要なものを買いに出かける事になつた。

『お金の心配なら要らないから海に任せなさい。ここまで無理矢理に連れて來たのだからこれくらいの事させなさい。分かった』そんな訳には行かないのだが、潮さんに押し切られてしまった。

『それと海はすぐに迷子になるから気をつけとけ』

潮さんに念を押された。

電車を乗り継ぎ秋葉へ向かつ。

電化製品と言えば秋葉、秋葉と言えば電化製品なのだ。

昨今ではヲタクと言えば秋葉、秋葉と言えばヲタクに変わりつつあるが今は関係の無い事だ。

大型店で色々と物色して回る。

『隆羅、これがいいよ』

海が指差したのは、特大の液晶テレビだった。

庶民の俺にはまつたく着いていけない感覚だった。

必要最小限の冷蔵庫・テレビ・洗濯機・レンジ・掃除機そして、ち
ょつとだけ上等のパソコンを購入する事にする。

プチ秋葉系にはパソコンの無い世界など考えられないのだ。
庶民根性丸出しで値切りまくつて支払いは海にお願いする。
例の黒いカードを海が出したとたん店員の顔色が変わり。
すぐに店長らしき人物が現れて対応する。

『早急にお届けにあがりますので』

住所すら聞かなかつた。

その後、細々としたものを買つたため百貨店に行く。そこでの対応もほ
ぼ同じものだつた。

水無月家つて何者なんだ？ 謎は深まるばかりだつた。

そして男の買い物なんてあつという間に終わつてしまい。

『時間が空いたから、近くに動物園があるけど行くか？』

海に聞くと嬉しそうに頷いた。

歩いて動物園に向かう、着くまでに何度も無く海を見失いかける。
潮さんの言葉が浮かんできた。

「すぐに迷子になるから」

その時は子どもじや無いのだからと軽く考えていたが違つよつであ
る。

園内は平日だと言つのに混んでいた。

『しようがねえなあ、ほらつ』

手を出すと海は少し考えて端っこを掴んだ。

『それじゃ、迷子になっちゃうだろ』

手を握り直すと海の顔が見る見る真っ赤になつた。

そんなに照れられると、こつちまで恥ずかしくなつてきた。
平静を裝つて動物を見て回る。

お昼近くになつたので園内のファーストフードで食べる事にする。

無難にハンバーガーとポテトのセットを2つにウーロン茶とコーヒー

そしてチョコレートのショイクを1つ注文した。

海は初めてらしく最初戸惑つていたが、食べ方を教えると美味しいそ
うに食べ始めた。

甘い物好きな海はシェイクがお気に入りになつたらしい。
口元にソースが付いていたのでテーブルの紙ナフキンで拭いてやる
と不思議そうな顔をしながら顔を赤らめた。

俺は海の顔を見ながら、これから的生活の事を考えていた。
生活する上でお金は必要不可欠でその為には仕事を探さないと家賃
も払えない。

昔、石神島で世話になつた先輩の言葉を思い出した。

「東京に戻る様な事があれば、必ず連絡をしろ。約束だからな」
それは、多分仕事の話だろうと見当は付いた。
先輩は東京に戻り飲食店を経営しているのだ。
ちょっと顔を出してみるかな。

海に少し用事が出来た事を告げ、少し早めに動物園を後にする。

浜木町の駅で降り北口から徒歩5分程度で店の前に着いた。ランチタイムは終わっているが連絡を入れておいたので居るはずだ。店は雑居ビルの2階にあった。

『五月先輩、お久しぶりです』

『如月か、よく来たな。いつこっちに戻ってきた。』

『えっと、2日前です。』

『そうか、こちらの綺麗なお嬢さんは?』

『ええっと、自分のアパートの管理人さんです』

『管・理・人の、水無月 海です。はじめてまして』

『海の機嫌が悪い、なんだ?』

『相変わらずお前は歯切れが悪いし、にぶチンだな。管理人さんね、なんで管理人さんと一緒になんだ。まあ細かい事はいいや』
変わらず大雑把な先輩だった。

『とりあえず、明日からでも来いや』

即決だつた。『コーヒーをご馳走になりながら少しだけ話をして、出勤時間だけ確認して店を後にした。

ちょっと通うのには遠いけれど乗り換え1回だけだし、まあ何とかなるだろう。時給いくらなのだろう、そんな事を考えながらアパートへ帰つた。

海と別れ部屋に入ると見事なまでに家電たちは全て綺麗にセッティングされていた。しばらくすると黒服の人が呼びに来た。応接間に通されると潮さんが微笑みかけてきた。

『デートはどうでしたか。手をつないで2人とも真っ赤になつて初々しい事、うふふ。』
『デートって、見ていたんですか?』

『そんな野暮な事はしないわよ、遠くから少しだけね』

この人達はまつたく。

『潮さん、仕事を決めてきたのですけれど、家賃はどうすればいいですか？』

『家賃ね、別にいいんだけれど』

『そんな訳にはいきませんから』

『己の事は己で何とかする。如月家の家訓だった。』

『ター君のそういう真面目な所。大好きよ。光熱費その他込みで払えるだけ支払いなさい。支払いは給金を貰つてからでかまわないから。食事はまだでしょ今口はこいつちで食べていただきなさい。海も喜ぶからネ。あと、これは命令よ。数日中に必ず実家に顔を出す事。分かつた』

『ハイ、わかりました。ありがとうございます』

海の機嫌は相変わらず直つていなかつた。食事中もこいつを見ようともしなかつた。

アパートへ戻るヒドアの前でアイツが待ち構えていた。キルシユだ。

『ついて来い』

あくまで命令口調で近くの公園に連れて行かれる、遅い時間なので公園には誰もいなかつた。

『何の用だ』

俺から切り出した。

『貴様から、綺羅きらの匂いがする。何故だ』

『キラ？ 誰だそれ』

『退魔師だ』

退魔師？ キラ？ 少しだけ考える思い当たる事があつた。

俺は婆ちゃんの事を「キラ婆ちゃん」と呼んでいた。俺が退魔師の末裔なら答えは1つしかない。

『婆ちゃんの事か？』

『やはり、貴様も奴らの仲間か！』

叫びながらキルシユが襲い掛かってきた。

必死に逃げ回る。

『逃げ回るな。戦え』

『冗談じゃない、どのくらい逃げ回つただろうかネコ科の動物から逃げ回れるわけも無くボロ雑巾の様にされ息が上がつていた。不意に通りの方から声がした。

『隆羅いるの？あの馬鹿、何処に』

海だつた。やばい見つかる。

その瞬間、頭で考えるより早く体が動いていた。

キルシユに向かつて走りだし左手で殴りかかり左腕を噛ませる。瞬時に右腕でキルシユの首を押さえ込んでありつたけの力で近くの茂みに飛び込んだ。

『クウツ』

左腕に激痛が走るり奥歯を噛み締め必死に声を押し殺した。

『ここら辺だと思うんだけどな』

海はしばらく探していたが公園から出て行つた。

キルシユを押さえ込んでいた右腕を離し激痛の走る左腕の傷口を押さえる。

骨には異常なさそだが少し傷が深かつた。

『貴様、何故わざと』

キルシユが睨みつけてきた。

『お前は、海の泣き顔が見たいのか！』

強い口調で言つと返事はなかつた。

公園の水飲み場で傷口を洗い破れたシャツを使って止血する。

ついでに汚れた顔を洗うため頭から水をかぶる。

今、アパートに帰る訳には行かない海がまだ探しているはずだ。ベンチの横で地面に座り左腕をベンチに置き心臓より高くして止血しながら休んでいるとキルシユが近づいてきた。

『大丈夫なのか？』

『多分、少し休めば大丈夫のはずだ
確信はないが多少の自信はあった。』

それは、島で影に襲われた時の体の痛みは数分で治つていつた。
今は俺の中にあると言う鍵の力を信じるしかなかつた。
そして少しずつキルシユが話しだした。

昔、無理矢理に使い魔にされ綺羅婆ちゃんにボコボコにされ。
逃げ回り生死の境を彷徨つてゐる時に幼い頃の海に助けられキルシ
ユと言う名を貰つた事。

その事に報いる為に今は水無月家を守つてゐる事を。

キルシユが俺の顔を見た瞬間笑い出した。

『俺の顔がどうかしたか?』

『いや、顔じゃなくその額だ。そんな状態で馬鹿かお前』

猫が大笑いしている姿は見ていて気持ちの良いものじやなかつた。

『お前、暴走した事があるのか?』

キルシユの言つてゐる意味が解らない。

『島での事か? あれが暴走ならそうなのだろう?』

『言い方を変えよう。力が開放した事があるのか?』

『ああ』

『その状態で力が開放してよく生きていたな。普通なら死ぬぞ

『何なんだいつたい、判るように説明しろ』

『お前、俺や動物の言葉が解るだろ? それは鬼の力だ。強い力を持
つた鬼だけが動物と会話して使い魔の契約をする。お前のポテンシ
ヤルは推測だが異常なのだ。お前の額に封印の文字がある水の梵字
か何かだろう、強い力は簡単には制御できない。ちょっとした感情
の高ぶりで暴走する事がある。だから封印されたのだろう、多分、
綺羅だな』

その話を聞いた時、今まで点だった物が線になり繋がり始めた。
幼い頃、俺の額に指を当て何かを呴いている婆ちゃん。

高校の校舎裏で不良に絡まれて力が暴走しガラスが割れ、その後病院に担ぎ込まれた。

それ以上は思い出せない、考え込んでいるとキルシユが話しかけてきた。

『今のお前には誰も守れない。俺には封印を解く事は出来ないが俺様が何とかしてやる。覚悟しておけよ』

俺もキルシユに言つておく事があった。

『今日の事は絶対に海に隠し通せ。いいな絶対だぞ』

『しかし、お前はそんなボロボロで隠しとおせるのか』

『大丈夫だ、慣れている。子どもの頃から怪我なんかしてお袋に心配掛けると親父に殴られたからな大抵の事は隠し通した』

『そんな父親がいるのか本当に?..』

怪訝そうな顔でキルシユが聞いてきた。

『居るさ、バイクで事故を起こした重傷の俺を殴り飛ばすくらいだ』

『そう言えば、無理矢理に使い魔にと言つていたが望んで使い魔になる奴なんて居るのか』

『人間を恨んでいる動物なんていくらでもいるからな』

『そうか』

それ以上は何も聞けなかつた。

翌朝。まだ、左腕にはまったく力が入らなかつたが傷はすっかり消えていた。

証拠隠滅も完璧だつた。

ほつと安心して氣を抜いた瞬間、顔面にパンチが炸裂した。

『隆羅の、馬鹿！ へタレ！』

海だつた、まったく居る事に気が付かなかつた。

目に涙を浮かべて真っ赤な顔で部屋から飛び出て行つた。

起きてバイトに行く準備をしているとドアをノックする音が聞こえた。

ドアを開けるとキルシユが申し訳なさそうに座つていた。

『すまない昨夜、血の匂いをさせているのを潮に感づかれ洗いざら
い白状させられた。その話を少し海に聞かれたらしい』

『潮さんも、お前と話せるのか？ あつ、秋葉や動物園で俺らを監

視していたのはお前か』

『ああ、俺様は水無月家に使える身、潮には絶対服従なのだ。』
海がある状態になるともう手が付けられないらしい。

時間が無かつたのでこの話は俺に預けさせてもらつた。

初出勤に遅刻するわけに行かず。ギリギリで間に合つた。

『おはようございます。先輩』

『おはよう。なんだお前の顔は喧嘩でもしたのか。ああ、彼女に殴
られたとか？ お前はヘタレな所あるからな』
本当にこの人は変な所だけ感がいい。

『先輩、あのでつかいビルは何ですか』

誤魔化す為に話を変えた。

『あれは、水神みなかみコンシェルンのビルだよ、テレビで見たこ
と無いのか？』

『自分はテレビ見ないですし、パソコンと海さえあれば島では十分
でしたから』

拳を握りガツツポーズをする。

『お前は昔から、人が知らない事は詳しげに普通に知つて
いるはずの事には疎いからな』

『如月、この間連れて来た娘「水無月」とか言つたな、水神の総帥
も確か水無月……』

『いらっしゃいませ』

ランチタイムが始まるとこの会話は途切れた。

初仕事も何とか終わり帰りの電車の中、海の事を考えていた。

明日の仕事は無理を言ってランチタイムは休ませてもらい夕方から
の出勤にしてもらつた。

買い物を済ませて帰るとアパートの前にキルシユが居る。

海の事だろうと思った。

『明日、屋敷のキッチンを使いたいから潮さんに言つておいてくれ。それと迎え宜しくな、屋敷内の事はまったく分からぬからな。海の事は俺が何とかしてみる、今日は疲れているからこれで勘弁してくれ』

そう言つてキルシユと別れた。

翌朝、キルシユの案内で屋敷内のキッチンに向つ。迎えの時間だけ確認して作業を開始した。

ココア生地を焼き上げチョコレート味のスポンジを作る。ザーネクリームを作りクリームとサワー・チェリーを挟み込みこんで残りのクリームで仕上げて、チェリーとチョコレートフレークでデコレーションし冷蔵庫で落ち着かせる。

その間に、片づけをはじめる。

そして、洗い物をしながら声を掛けた。

『凪そこに居るんだろ』

俺がキッチンに入つてからずつと隠れて覗いていたのだ。

『お前が、海お姉ちゃんを』

凪が俺の事を睨みながら言つた。

『本当に申し訳ない。すまなかつた、全て俺の責任だ』

誠心誠意謝つた。

俺の反応に驚いたのか凪はキヨトンとした顔をしていた。

出来上がつたケーキを切り分け皿に盛り付け。海に渡して欲しいと凪に頼んだ。

『お前の為じやないからな、お姉ちゃんの為に持つて行つてやる』怒つてはいたが了承して貰えたみたいだ。

残つたケーキは、適当に処分して構わない事を告げ。迎えに来たキルシユとキッチンを後にし、俺はバイトに向つた。

バイトを終えアパートに帰るとキルシユがアパートの前で待つていた。

部屋の方をキルシユが見上げる。

『誰か居るのか、海か?』

『少しいいか』

そう言いキルシユは歩き出しこの間の公園へ向つた。

『お前、海に何をした。あんなに嬉しそうな顔あまり見た事が無い。どんな魔法を使つたのだ? あの状態ですぐに機嫌が直るなんて考えられない』

『シユヴァルツヴェルダー・キルシユトルテ』

『何だ、それ何かの呪文か』

『俺が作つたケーキの名前だよ、そのケーキを風に頼んで海に渡して貰つたんだ』

『そんなケーキで海の機嫌が直るのか?』

『ああ多分な、お前の名前と同じ呼び名のケーキだからな。日本での呼び名は「キルシユ」。お前の名前は海が付けたと言つていたよな、「キルシユ」は元々キルシユヴァッサーと言う酒の名前だ。幼い海が酒の名前を知つているはずが無い。海は甘い物好きだから「キルシユ」と言うケーキは食べた事があつたのだろう美味しいケーキだからな。ただ、それだけだよ』

それだけで機嫌が直るかは俺には分からなかつた。ただ、本当になんとなくそれでいい気がしたのだ。

『お前は何者なんだ』

『俺はただのヘタレだよ、カクテルバーでバイトした事があるから酒の名前には詳しいし、それにケーキ作りをする人間にとつてキルシユヴァッサーなんて知らない奴は居ないからな。俺もそんなひとりだよ』

アパートに帰ると、海が二コ一コして部屋の中に居た。

しかしこの部屋の鍵はどうなつてているのだ?

俺のプライバシーは無いのか、でも海が笑顔ならそれでいい心からそう思った。

後日、キルシユの言つていた覚悟の意味を理解した。

不意打ちをしけけ襲い掛かってくるのだ、牙や爪は立てないがそれなりに衝撃はすごい生傷が絶えなかつた。

その不意打ちは寝ているときでも関係なくやつて来るものだから堪つたもんじやなかつた。

生傷が絶えないので心配する海には簡単に話をじて「承をしてもらつていた。

新しい生活やバイトにも慣れ、ようやく落ち着いてきた。

世間では夏休みが始まり朝から、近所の子どもたちが騒いでいた。今日も真夏日だった、俺はクーラーの効いた京浜東西線の電車に揺られていた。

電車を乗り継ぎ小武藏浦谷の駅で降りる。

しかし暑い。

島の夏より暑いのではないかアスファルトの照り返しがきついかった。

『えっと、確かにこっちで良かつたはずだが俺が向っているのは自分の実家だった。』

何故、迷いそうになつていてるかと言つと俺が島に歸る間に引越しをしていたからだ。

1回しか来た事が無くおぼろげな記憶をたどりて歩く。しばらく歩くと前に日傘をさして白いワンピースを着てヒョウヒョウコと体を左右に揺らしながら歩く女の子が歩いていた。あの独特な歩き方、間違いないアイツだ。

『茉弥！』

思い切つて後ろから名前を呼ぶと女の子は振り返り、驚いて目をまん丸にして満面の笑顔で走り寄つて来た。

『ええ、兄さま、兄さまだ、どうしてどうして？』

か細いハスキーボイスで腕に抱きついてきた。

『相変わらずだな、その呼び方』

『兄さまは、兄さまだのに』

プウと頬を膨らました。

この独特な歩き方をして、どこぞの御嬢様の様な呼び方で俺を呼ぶ

女の子は少し年離れた妹だった。

迷わず家に着く事が出来た、俺の実家は普通の住宅街の中の一軒家だ。

玄関を開け家中に入ろうとした時、お袋が抱きついてきた。

『タカちゃんお帰り』

お袋も相変わらずだつた。

『お袋、ただいま』

『もう、ママかお母さんと呼びなさい、タカちゃん』

『お袋も、タカちゃんの呼び方止めてくれ、ハズいから』

『駄目よ。タカちゃんはタカちゃんだもん』

『茉弥と一緒に？ お袋は幾つだよ、まつたく』

『ペチン』

お袋に『コピン』をされた。

『それ以上言つたら御仕置きよ、もう』

リビングでくつろいでいると茉弥がべつたりくつ付いて離れようとしている。

『しようがねえなあ。茉弥は本当に、甘えん坊だな』

『マーチちゃんばっかりズルイ』

お袋がそんな事を言つていて、俺の横に来ようとするのを制する。

『親父は？』

『出掛けているわよ、心配』

『いや、会いたくないし』

『もう、そんな事言わないの、めつ』

『めつ』つてもう子どもじやないんだから。

俺の家族はいつもこんな感じだつた。

お袋はメチャクチャ童顔で天然系だし、いつも動き回つていてチッコイ体の何処にあんなパワーがあるのだろうと思つ。

妹は、おつとり系で小さい頃、体が弱くいつも家の中で遊んでいた。遊び相手は俺ぐらいだったから、いつも俺にべつたりだつた。親父はヤンチャの固まりで殆ど家に居ないし直ぐに殴る。

長男の俺は風来坊でヘタレ。

それが普通か変わっているか分からぬが如月家ではこれがノーマルなわけだ。

久しぶりに家族がそろい（親父は居ないが）島での生活や仕事の事、こっちに戻ってきてからの事など質問攻めだった。

『マーちゃん、あのね、タカちゃん彼女が出来たらしいわよ。お姉さんがあんなに美人なんだからとても可愛い子なんでしょうね、きっと』

『兄さま、彼女見てみたい写真は』

『そろそろ、タカちゃん写真くらい持つているのでしょう、早く出しなさい』

『いや、持つてないしそんな物』

『そんな物つて彼女に失礼でしょ。めつよ、めつ』

そんな会話ををしていてふつと思った、俺と海との関係つて何なんだろ？。

彼女？ 友達？ 鍵の繋がり？

どれも微妙だつた。

出会つた頃は敵意むき出しだつたけど少しずつ心を開いてくれている。

俺も 最初はなんだコイツつて感じだったが、海の笑顔を見ていると嬉しくなる。

これが好きと言つ氣持ちなのかと言つと違つ氣がする。

嫌いなんて事は絶対にありえないし。

まあ、気に入つてしまつたという事なのかな。

近い様な遠い様な微妙で不思議な関係。

そう言えど、俺は海の事あまりよく知らないんだよな。

出会つて4ヶ月くらいか海は俺の事どう思つて何処まで俺の事知つているのだろう。

俺と同じような物なのかもしね。

潮さんは全て知り尽くしていそうで怖くなり身震いした。

気がつくと横で茉弥がウトウトし始めた。

『マーちゃん2階で、少し眠りなさい』

『うん』

茉弥が頷いて2階へ上がつていった。

茉弥が2階に上がりしばらくしてから、少し真面目な顔をしてお袋が話し始めた。

『タカちゃん、少し変わったわね。大人になったと言つか、男の顔になってきた。』

少し間をおいてから真剣な目をして続けた。

『石神島で何があつたの？ 水無月さんて水の力を持った人たちよね』

ドキッとした。やつぱりお袋もそうなのか？

どこかで信じたくなかったでも今は信じるしかなかった。この人も退魔師の一族なのだと。

俺と婆ちゃんが持つていて、この人が持つていない筈がなかつたのだ。

俺も、きちんとお袋に向かい正座をして島であつた事を話した。海に出会い、使い魔に襲われて力が発動して騒ぎになつた事。

そして今、水無月家の近くで暮らしながら石神島で世話になつた先輩の店で仕事をしている事。

鍵が俺の体の中にある事は伏せておいた。

理由は俺自身にも分からぬでも、その事は話してしまつてはいけない気がした。

お袋に、俺も聞きたいた事が沢山あるのだが何をどう何から聞いていいのか分からなく戸惑つていた。

『これを、タカちゃんに渡しておくわ』

それは長さ5～6センチ直径は1センチ位の細い管の様な銀色のペンダンストップのような物で、表面には模様か文字のような物が黒

く彫られている。

『これは何?』

『これは「羅閃らせん」よ。代々家に伝わる家宝と言つか宝具ね。あなたは頭で理解するより実際に体験した方が早いでしょう、目を閉じなさい』

お袋の言ひとおりに目を閉じると空気がピンと張り詰める。

『ドクン』

少し鼓動が高鳴る感じがして『ピィー』と笛の音の様な音がして次の瞬間。

目を閉じているはずなのに目の前にいるお袋の映像が鮮明に浮かんできた。

『ママの姿が見えたかしら? どんなに離れていても、たとえ地球の裏側にいても同じ事が起るわ。今は、ママとタカちゃんを結んでいる。この笛はそう言う物なの』

『笛なんか吹いたら茉弥が目を覚ますぞ』

『大丈夫よ、あなたにしか聞こえないものこの音は』

『俺にしか聞こえない?』

『そうよ、タカちゃんが吹けばママにだけあなたの映像と笛の音が聞こえる。何処にいようともね。この笛には、ママの気とタカちゃんの気が込められているの。だから、ママとタカちゃんにしか使えない。それとこの笛にはかなりの力が封印されていて魔除けにもなるの魔除けだけなら他の人にも有効よ』

『なぜ、そんな物を俺に』

『必ずいつか必要になる時が来るはずよ、だから』

お袋がチエーンを外して俺の首に掛けた。

『ごめんなさいね。タカちゃんは、もう知っていると思ひながらママの一族は退魔師の家系なの。ママのお母さん、つまり、あなたのお婆ちゃんはすごい人だったわ。日本では屈指の退魔師よ。でも、ママにはそんな力は無いの。まったく無いわけではないのだけど簡単なお払いくらいしか出来ないわ。だから、お婆ちゃんはママに詳し

い事は話さなかつた。たぶん、普通の女の子として生きて欲しかつたのかもしれない。だつて普通の人には見えない異形の者が見えるなんて変でしょ。この笛にしたつて2人の氣の込め方さえ知らない。あなたが知りたいと思つてゐる事に対してもママは何も答えられないと思うわ』

そしてこう続けた。

『お婆ちゃんが居ない今、詳しい事を知つてゐる人は誰も居ない。でも確かな事が1つだけあるのお婆ちゃんの口癖よ「愛は力なり」』

『LOVE IS POWERよ』

片手を前に突き出し拳を握りながら叫んだ。

そこに居るのは紛れも無く普段どおりの天然ボケのいつものお袋だつた。

夕方、2階から茉弥がまだ眠そうに目をこすりながら降りてきた。

『あら、マーちゃんおはよー。じゃあ、みんなでお買い物に行きましょ。今日はタカちゃんの為に腕を振るうわよ』

『みんなつて、何で俺まで行かないといけない訳?』

『だつて、荷物重いんだもの荷物持ちよ。今日はいっぱい買い物するから』

歩いて駅前の商店街に向つ。

茉弥は俺の左手を両手で掴み二コ二コしながら振り回していく。お袋が、俺の右手を掴もうとしたので振り落つた。

『マーちゃんばっかりするー、ママも、ママも』

膨れつ面をして大声をだす。本当にこの人は親なのか、まるで子供もだな相変わらず。

『しようがねえなあ、もつ』

恥ずかしさを堪えながら手を繋ぐと嬉しそうな顔で俺の顔を見上げた。

ハズい、ハズ過ぎる。

周りから見たらどう写つてゐるのだろう。

お袋は小柄でメチャメチャ童顔だから「ん〇歳まえ」には絶対にみえない。

3人で並んで歩いていても、どつ見ても親子には見えないのだ。

それも手を繋いで……

突つ込みドコロ満載な訳である。

こんな所、潮さんにも見られたら大変な事になるぞと思しながら辺りを気にしてしまひ。

判る筈も無いのに。

その夜は久しぶりに3人で食事をする、お袋の手料理は絶品だった。料理の腕前はプロ顔負けなのである。

翌日も朝から仕事があるので終電に間に合ひよつて実家を後にした。やはり、潮さんに知られていた。

『ラブラブね、両手に若い子をはべらして海に報告しなきや』

『そんな誤解を生むような真似止めてください』

遅かつた。海にボコボコにされ誤解を解き機嫌を直すのに数時間を要したのだ。

実家に顔を出した翌週の日曜日、仕事が休みという事もあって俺は惰眠をむさぼるはすだつた。

幾度とない深夜のキルシユの襲撃、そして昨夜は帰宅途中に不意打ちを掛けられた。

それも牙や爪をむき出しで。

『大怪我したらどうするつもりだ!』

『同じことをしていたら駄目なんだ、レベルアップだよ』

キルシユが笑いながら言いやがつた。

そんな事があつて疲れきつっていた。

朝早く誰かが、ドアをノックする音で起しきされた。

『どうひらさまですか?』

『タカちゃん、おはよ』

『兄さま、おはようございます』

寝起きで田をこすりながらドアを開けるとそこにはお袋と茉弥が立つていた。

お袋が部屋の中を見て固まつている。

『マーちゃん、見ちゃ駄目』

お袋が茉弥の目を手で塞いだ。

ボーとした頭で振り返るとそこには海が寝ていた。

俺の格好はTシャツにパンツ一枚だった。慌ててドアを閉める。まだハツキリしない頭をフル回転させた。

そう言えば昨夜、俺の事を心配して海が部屋に来て傷の手当てをしてくれて俺は疲れてそのまま寝てしまつたのだ。

それからの事は覚えていなかつた。

とりあえず海を起こす。もう、どうしようもないので2人を部屋に入れ一応事の顛末は説明したけど、どう思うかはお袋任せな訳だ。

『で、今日は何しに来たんだ?』

『タカちゃん、その前にちゃんと紹介しなさい』

『彼女が、海。前にお姉さんの潮さんには会っているよな』

『海、こつちがお袋と妹の茉弥だ。以上』

『もうタカちゃんは。はじめまして、私が隆羅の母の沙羅です。海ちゃん宜しくね。でも、海ちゃんてすごく可愛いのね、タカちゃんにはもつたいないわ』

『で、何しに来たんだ?』

『デートよデート、美少女3人とデート』

『少女3人つて? 1人は少女じゃないだろ』

「ペチッ」

『デコピンを食らつた。』

『さあ、準備して行くわよ。横浜に、ヨ・コ・ハ・マ』

小倉駅に向かいそこから西横線に乗り横浜で乗り換えて桜本町で降りる。

電車の中でもお袋の全開パワーは炸裂していた。

『海ちゃん、ご両親は? そうなの。じゃあ、今日から海ちゃんも私の子どもね。だつてタカちゃんの大切な人だもの』

殆ど海の話なんか聞いていなかつた。

『キヤア、可愛いもう我慢できない。如月ママと呼んで』

叫びながら海に抱きつく、海は固まつていた。

『お袋、恥ずかしいから騒がないでくれ』

『だつて、嬉しいんだもん』

今のお袋には誰も敵わなかつた。

茉弥は茉弥で海に『茉弥ちゃんだつて、宜しくね』と言われて、恥ずかしそうに下を向いてモジモジしていた。

お袋に茉弥の恥じらいを分けてやりたかつた。

桜本町に着き、駅を出る。

『何処に、行くんだ?』

『もちろん最初はコスモパークよ』

コスモパークはみなとみらいの大観覧車があるアミューズメントパークだ。

『悪い、俺バス』

『駄目よタカちゃん。海ちゃん引っ張つて来てね』

渋々、歩いてコスモパークに向かう。

海が少し緊張した顔で俺の横で間を空けて歩いているので、ふつと見ると俺のすぐ後ろを俺の右手を掴みながら茉弥が歩いている。そして右手で海の洋服の裾をちょこっとだけ摘んでいた。

コスモパークに着き俺は3つ田のアトラクションでダウンした。まさか茉弥まで絶叫系が好きだとは思いもしなかった。

ベンチにへタレこんだ。

『タカちゃん、情けないわねまったく』

『俺がこういうの苦手なの知っているだろお袋は』

『海ちゃんにカツコいいところ見せなきや駄目よ』

『いいんだよ、俺はへタレで』

『すぐにそんな事言うんだから。めつ』

『俺は、ここで休んでいるから3人で行つて来いよ』

『しかたがないわねえ、3人で行きましょう』

海が少しだけこちらに振り向いて2人に手を引っ張られアトラクションへと姿を消した。

しばらく放心状態で空を見ていた。

この空も島に繋がっているんだよな、そんな事を考えていると田の前にソフトクリームが現れた。

海が何も言わずにソフトクリームを突き出した。

『ありがとう』

礼を言いベンチを軽くたたいて座れと合図した。

『仲が良いのだな』

『ああ、久しぶりに会つたからな』

『そりやか』

『海のお母さんてどんな人だつたんだ』

『よく覚えていない、皿を産んすぐ死んじやつたから。でも、すこく優しい人だつた。今はお姉ちゃんが母親代わりだ。羨ましいこづこづの』

『じや、また皆で遊びに行こつうな』

お袋の大きな声で会話は途切れた。

『あつ居た。海ちゃん急に居なくなつちやうんだもん。でもラブラブね』

『兄さま、ラブラブ』

茉弥は意味分かつてゐるのかこいつ?

『そろそろ、お腹もすいたしどこかでお腹こしましょひ』

お袋の提案に賛同した。

『あそこの大桟橋のターミナルの中に港の見えるカフェがあるから行くか?』

『タカちゃん詳しいわね』

『ああ、半年くらい横浜に居たからな』

『ママ初耳よそんなの。で、誰とデートに来たの? 誰と

そりやそうだらう家を飛び出した後の話だ。

『デートなんかじゃないさ、ただ海を見にな』

『タカちゃんはロマンチストなんだから、もつ

ロマンチックなんて欠片も無かつた。

家を飛び出して金を貯める為に横浜で仕事をして、その職場の寮が小倉山だつたのである。

これから先の事を迷つてゐる時に職場の人に港が一望できるレストランが在ると聞き、ここで海や船を見ながら考えていた。

その時なのかもしれない頭の何処かに南の島が浮かんだのは。

でも、それはただ何処か遠くへ行きたかつただけなのかもしないのだ。

それに『』のスイーツは評判だし。
こっちが本当の理由なのかも。

大桟橋のカフェに入りメニューを見ながら迷っていると茉弥が話しだした。

『姉さまは、何にするの？』

俺とお袋は驚いて目を合わせた。

『口コモコがいいかなあ』

『茉弥も、姉さまと同じの』

珍しい事もあるもんだと思いながら俺たちもオーダーをした。

食後にこのお店お勧めのパフェを食べていると茉弥が話し始めた。

『兄さま、お船がいっぱい』

『茉弥は、海が好きなのだな』

『茉弥、海大好き。広くって大きいから』

『そうか、じゃ今度、兄ちゃんが居た石神島に一緒に行こうな。とつても海が綺麗なんだぞ』

『兄さま、約束』

『ああ、約束だ』

茉弥が小指を出し指切りをした。

石神島の美夢の事を思い出していた。

今頃、何をしているのだろうと。

カフェを出て、少し大桟橋を歩き山上公園へ向かう。

8月だけあってかなり暑かつた。

茉弥の体を気遣つて船が展示されている近くの木陰で少し休む事にした。

海面が太陽の光を浴びてキラキラと光りとても綺麗だった。

『ママ、冷たいジュース買って来るね』

お袋が言いながら立ち上ると『私も一緒に』と海が言った。

2人がジュースを買いに行き、俺は茉弥の奴よほど嬉しかったのだ

など考えていると茉弥の体が俺にもたれ掛かって來た。

『茉弥、茉弥どうした?』

返事が無い氣を失っていた。

その時、ちょうど2人が戻ってきた。

『タカちゃん、海ちゃんて、とっても可愛いの……どうしたの?』

『いつものやつだ。何処か寝かせて休ませる場所を』

俺がそう言つと海が辺りを見回して『こっち』と俺の袖を引っ張つた。

あわてて茉弥を抱きかかえ後をついていく。

近くの大きなホテルに入りフロントの前で海が誰かに電話していた。フロントの人に電話を変わるとフロントの人の顔色が変わり直ぐに

『こちらへどうぞ』と案内してくれた。

案内されたのはスイートルームだつた。

直ぐにベッドに茉弥を寝かせ買ってきたジュースで顔を冷やしてい
るとホテルの人が氷枕を持ってくれた。

『ありがとう』

お礼を言い茉弥の頭に当たがう。

15分位すると茉弥が目を覚ました。

『兄さま、母さま』

まだ少し苦しそうだつた。

いつもしているように茉弥のおでこに自分のおでこをゆづくつ
付けた。

するとスーと楽になつたのか眠り始めた。

『もう、安心だわ。茉弥はママが見ているから、2人で何処か見て
きなさい。皆でここに居てもしょうがないから1時間後にロビーで

待ち合わせね』

海が心配そうに俺の顔を見上げる。

『大丈夫だ。1時間もしたら元気な茉弥に戻るから行こう』

俺がそう言つと安心したのか俺と一緒に部屋を出た。

ロビーに降りホテルを出て何処に行こうか考えながら海に言った。

『ありがとうな。ここのお礼だ。1時間しかないけれど海の行った

い所やりたい事があれば、何でも俺に言つてくれ』

『ん~ん、観覧車』

少し海は考えてから答えた。

『隆羅、手』

『しようがねえなあ』

海の手を握りコスモパークへ向かつ。

公園の遊歩道を歩き、赤レンガ倉庫を過ぎるとコスモパークは目の前だつた。

観覧車にすると微妙な空気が2人の間を流れた、海と面と向かつて何を話せばいいのだろう。

そんな事を考えていると海の方から話しかけてくれた。

『茉弥ちゃんは、いつもあんな感じになるのか?』

『いや。いつもじゃない、でも時々な』

『あの、おでこをくつ付けたのは何なのだ?』

『ああ、おまじないの様なものかな。理由は分からぬけど、あれをすると楽になるらしいんだ』

そう言いながら額を触る。

その時、キルシユが言つた水の梵字の事が頭を過ぎつた。まさかな。『茉弥が小さい頃はとても体が弱かつたからな、外で遊べないから俺がいつも遊び相手だつた。少し年が離れているからアイツが産まれてしまらくな寂しい思いもしたけどな。前に今回の酷いのが起きて島から呼び戻された事があるんだ。病院でいくら検査しても原因は解らなかつた。だから、あんなおまじないの様な事でも信じたいんだ』

『隆羅はやつぱり優しいね』

『こんなの普通だろ』

『違つと思つ。強さとか思いやりは優しくないと生まれない、優し今まで居る事が一番難しくてお姉ちゃんが言つていた』

『そりなのかな？　でも、俺はヘタレだぞ。海も本当に優しいんだな』

『私がなんですか？』

『茉弥が初対面の人に話しかけたり触ったりする事は、今まで一度も見た事が無かつた。だから今日は俺もお袋も驚いていたんだ。きっと、海が本当にとても優しい人だと感じたのだろうと思つぞ』

自分で言つておいて少し恥ずかしくなり話題を変える。

『そう言えば、フロントで誰に電話していたんだ？』

『お姉ちゃんに』

『潮さんて何の仕事をしている人なんだ？　水無月家はすぐお金持ちみたいだし』

『普通だと思う、お姉ちゃんの仕事は「ソウスイ」って言つてた』

普通つてそれが普通なら俺なんかミジンコみたいな物か、それにソウスイってなんだと考へていると。

ボソッと海が呟いた。

『私はそんな優しい隆羅の事がす……』

最後まで聞き取れない今まで観覧車のドアが開いた。

聞き返そつと海の顔を見ると何でも無いと言つ様横に首を振つていた。

観覧車から降りる時に手を差し出すと『うん』と頷きながら手を繋いだ。

そのまま少しブラブラと歩きホテルに戻る。

ロビーに入るとすつかり元気になつた茉弥とお袋が待つていた。

フロントで清算の確認をしようとする。

『いえいえ、そんな結構ですよ。水無月様にはいつもお世話になつておりますので』

まったく理解できなかつたので聞いてみた。

『ところで水無月　潮つてどんな人ですか？』

この人何を言つているのと言う顔をされてロビーで放送中の大型液

晶テレビををしてこう言つた。

『あちらの方でござります』

テレビに田をやる。いつも俺の事をおもひやにして遊んでいる人が
真面目な顔でテレビに出ていた。

テロップの名前を見ると

「水神コンツェルン 総帥 水無月 潮」とある。

頭の中が真っ白になり『ありがとうございます』とだけ告げて、
お袋たちの所に行きお袋の肩を叩きテレビを指差す。

『ええええええーー!』

お袋の絶叫がホテルのロビーにこだました。

人間と言う生き物はビリしようもなく理解を超えた事に出会つた時
は、とりあえず笑つておくか考えない事にするのが一番なのだ。
その後何事も無かつたかの様に4人で本町まで行きショッピングを
して近くの駅でお袋たちと別れた。

後日、潮さんの書斎でこの事を聞いた。

『なんだ知らなかつたの? 聞かないから言わなかつたけど。まあ、
タ一ちゃんにはいう必要も無いかなて』

大きな机に寄りかかるように座り腕組みをしながら言つた。

『俺、テレビとか見ないですし、よく普通の事知らないって言われ
ますから』

『で、私がコンツェルンの総帥だからってタ一ちゃんが変わる訳じ
やないでしょ。それとも私たちに対する接し方が変わるのかしら?
違うでしょ。タ一ちゃんは総理大臣でも大統領でもそんなのお構
いなしだものね、私はタ一ちゃんのそういう所大好きよ』

それって褒められているのだろうか、それにいつから「君」から「
ちゃん」付けに……

凄くヘタレぽいんですけど。

『私も、海も、凧も、みんなタ一ちゃんの事が大好きなの。これか
らもヨ・ロ・シ・ク』

総理大臣や大統領はともかく、確かに潮さんの言つとおりなのである。

ホテルのオーナーだろうが会社の社長だろうが違う事は違うとはつきり言つてしまつし、筋の通らない事されると反発し向かつて行つてしまつ。

それ故にいろんなバイトや仕事をしているのもこんな理由のせいなのである。

周りからは『不器用な奴だな、馬鹿かお前は』と言われるが嫌なものは嫌なわけで俺は俺の思ったとおりに生きるしか出来ないのだ。そんな事を考えながら部屋から出ようとドアに向かい、振り向いて挨拶をしようとすると頭めがけて潮さんの回し蹴りが飛んできた。とつさに上段の受けを取つたが吹き飛ばされてしまった。

『いきなり、何をするんですか？ 殺す気ですか？』

『ちょっと試しただけよ。それよりターチちゃん、あなた空手が何かやつていたわね。その上段の受け方何処で習つたの？』

『島ですよ、知り合いの飲み屋のマスターに古武術の道場に無理矢理連れて行かれて』

本当なのである「男は女の1人や2人守れなくつてどうする」などと言われ、おまけに「そのへタレ根性を叩きなおす」とシゴキまくられたのである。

『最近、生傷も無くなつて来たことだしそろそろ大丈夫ね』

『大丈夫って何がですか？』

『こつちの話よ、うふふ』

はぐらかされて部屋をでたのだ。

『その前に、お楽しみはこれからよ』

怖い事も言つていたのだ。

横浜での一件から、確実にそしてかなり俺と海の距離が近づいてきていた。

明日から3日間お盆休みになつている。

何をしようか色々と考えていたのだがそれは見事に打ち砕かれた。

お盆初日の早朝、朝刊すらまだの時間にあの3人姉妹が何故か俺の部屋に居た。

凪は潮さんに暴れないよう抑えられて口を塞がれていた。

『隆羅。起きて、隆羅つてば』

昨晩、遅かった事もあり寝ぼけ眼だった。

『んん、海。ん、今何時だ』

時計を見ると見た事のない時間だった。

『まだ、寝る。お前もここで寝ろ』

寝ぼけて海の首に手を回しベッドへ引きずり込んだ。

その瞬間、押さえつけられていた凪が潮さんを振りほどき俺に向つて走り出した。

『あつ凪、駄目!..』

凪の突撃は止まるはずもなくカカト落しが俺のボディーに炸裂した。

『ドスツ』

鈍い音がして目が覚めたと言つより、お花畠が見えた気がした。

『グッゲエ。ゴホ、ゴホ、ゲエ……』

踏み潰された蛙の様なありえない声を出し腹を押されたままベッドから落ちた。

『お姉ちゃんに何するんだこの野郎!..』

訳も分からず口を開けると仁王立ちした凪とその向うに潮さんが見えた。

『こんな、朝っぱらから殺す気ですか?..』

『「ゴメンなさい悪気があつた訳じや無いの』

『悪気が無いのに、なんで俺の部屋に居るんですか！』

寝起きで最悪な気分だった。

『凪、謝りなさい』

『こいつが悪いんだ、お姉ちゃんに変な事するから』

『隆羅、大丈夫なの？』

海が心配して声を掛けってきた。

『ああ、大丈夫だ』

こんな事されて笑えるのは死人くらいだろ？、まあ死人は笑わないけれど。

『で、何の用ですか？ いつたい？』

『お盆休みにみんなで一緒に泊りがけで海に行こうかと思って』

『はいはい。行けばいいんでしょ、行けば。準備するので外で少し待つていてください』

3人が外に出て行く。

もづやけくそだつた、着替えと水着をとりあえず『ダイバッグに詰る。

『もう、凪は。あんな事されたら、いくじターチャんだつて怒るわよ』

『潮お姉ちゃんが少し脅かしてやるうつて言つたんじやん』

『凪。今度あんな事したら海お姉ちゃんが怒るからね』

『私は、何も悪くない。悪いのはあいつだ』

『でも、ターチャん凪には怒らなかつたわね、流石ね』

表に出るとアパートの前に大きなワゴンが止まっていた。

『この車の運転手をしろと言う事ですね。了解いたしました。お嬢様方』

『悪いと思っているのよ。本当にでもこんな車あまり運転した事ないし、それに私の車はみんな車ばかりだからね』

その通りである。あんなヤンチャな車で遠出なんてするものじゃない

いのも事実だ。

渋々、運転席に座ると海が助手席に潮さんと凪は後ろに座った。

『どこまで行けばいいんですか?』

『取りあえずタ一ちゃんの実家まで。お母様や茉弥ちゃんと6時に待ち合わせしているの』

完全にはめられていた。

早朝の為、道は空いている。

『ねえ、隆羅いつまで怒っているの? ねえてば』

『もう、怒つてないよ』

『嘘つき、怒つていてるじやん』

『海だつて知つていたんだる。どうせ』

『だつて、お姉ちゃんが……』

『もう、分かつたからそんな顔をするな』

コンポにCDを入れる。

『隆羅、この曲好きだよね。いつも部屋で聞いてる』

『ああ、Heart of Diamondsって言つグループの曲だこのボーカルのYumiのハスキーボイスな声と詩が好きなんだ』

『ふうん、そうなんだ。隆羅ってこんなハスキーボイスの声の人気が好きなんだ』

海が少し寂しそうな顔をして窓の外を眺めた。

『このグループのデビューって俺らが生まれる前だぞ』

『ええ、何でそんなグループ知つているの?』

『たまたま、親父の車で聴いた事があつてそれから良く聴くようになつたんだ』

『そんな昔の、よかつた……』

『何か言つたか』

『ん? 何も言つてないよ』

ルームミラーを見ると潮さんは夢の中だつたがツインテールはこちらを睨んでいた。

『やつだ、隆羅。朝』はん作って来たのだけど食べる

『そりだな』

『お姉ちゃん。ちょっとそれかして、お姉ちゃんが作つたんだよね』
『夙が海から弁当箱を奪い取る。

『うそ、隆羅にと思つて』

『本当にアイツに食べさすの?』

『駄目なの? 一生懸命に作つたんだけれど』

『そこが、問題なの! お姉ちゃんの料理はかなり下手くそなの』

『だつて、あまり料理したことないんだから仕方ないでしょ』

『ちょっと、私が味見するからいいよな』

『夙が何かをつまんで食べた。

『……不味い』

『一生懸命作つたのに』

海が頭を垂れてシュンとしていた。

『何を、コソコソやつているんだ。ちょっとコンビニに寄るが』

『どうしたの? 隆羅』

『トイレだ』

コンビニの駐車場に車を止めてコンビニに入る。

『ああもう、煩いわね。2人でさつきから何をもめてくるのまた

く』

『だつて、お姉ちゃんがアイツに手作りのお弁当を食べさせるつて

『食べさせればいいじゃない、ターチャんなら絶対に文句は言わな
いわよ』

『えつ? 食べさせるの? お姉ちゃんがアイツに嫌われてもいい
の?』

『夙もターチャんの事、気に入つてているのね。それにターチャんな
らこれくらいで海の事、嫌いになつたりしないわよ』

『違う私は、お姉ちゃんの事を思つて。それにあんな奴大嫌いだし
認めてないんだから。いいからお姉ちゃん、今すぐコンビニで何か

別の物を買つてきなさい。早く』

俺がコンビニで買ったお茶のペットボトルを手に持つて出でると、

『海が車から降りてコンビニに向つて歩いて歩ってきた。

『海、そんな顔してどこに行くんだ。行くぞ車に乗れ』

『でも、だつて』

『いいから乗れ』

『う、うん』

海が車に乗り込んだ。

『海、お茶を買つてきたから弁当を食べさせてくれ』

『お前、こんな物本当に食べるのか?』

『人が作ったものをこんな物つて言うな。こんな物つて言って良いのは作った本人だけだ。それにこの弁当は海が俺を作ったものだ周りがゴチャゴチャ言うな』

『隆羅、はいこれ』

海が申し訳なさそうに弁当を出した。

『いただきます』

手を合わせ軽く頭を下げる。

『どれ、うん、うん。まあ変わった味だけど、良い感じだぞ』

『えつ 隆羅。本当?』

『俺は、食べ物の事に関して嘘は言わない。食べる事も作ることも好きだし、それに一応調理の仕事をしているからな』

『そうそう、隆羅の作った料理やケーキつて凄く美味しいんだよ』

『ターチャンは、どこかで習つたの』

『潮さん起きてたんですか? 別に習つた訳じやなく子どもの頃からお袋が作つている所見ているの好きで。それに基本を教えてもらつた訳じやないからオリジナルばかりですし。でも一応、和・洋・中、イタリアン、ケーキ類は作れますよ』

『そうなの、凄いわね今度ヨロシクね』

『激しく遠慮させていただきます』

『ええ! 私もターチャンの作った料理やケーキ食べてみたいのに』

切りが無いので放置した。

『『じ馳走様でした。ありがとうな海』

『うん、今度はもつと頑張るね』

『ああ、またようしくな』

『ふん、バカじゃないの』

凪は納得できないようだった。

『いいんだよ、料理なんて物は作つてあげたいと盡つ氣持ちと作つてくれてありがとうと言つ笑顔があれば直ぐに上手くなるもんなんだ。凪ちゃんもそのうち分かるようになるわ』

『そんな事言われても分かんない』

でも凪は海の料理をこんなに美味しいに食べる人を始めてみたのだった。

『出発しますか』

しばらく走るとすぐに実家に到着した。家の前でお袋と茉弥が待つていた。

車を止めて車から降りる。

『おはよひ、茉弥』

『兄さま、おはよひ』

『タカちやん、おはよひ』

『おす』

『今日は、誘つてくれてありがとひやこます。潮さんと海さん…』

…』

凪を見てお袋がフリーズしていた。

『大勢の方が楽しいですからね、タ一ちゃん』

『キヤー可愛い。小さな海ちゃんがいる』

お袋がいきなり凪に抱きついた。

『おいおい、お袋。凪ちゃんが固まつてゐるから恥ずかしい事止めてくれ』

『は、はじめてまして。い、妹の凪です。よろしくお願ひします』

凪が力チンコチンになつていた。

『それじゃ、改めて出発しますか

『で、どうに向かえばいいんですか？

『潮さん』

『西伊豆よ』

『えつ、ああ……西伊豆ですか。海が綺麗ですもんね。また、遠いなあ……』

『レッシ ハー』

海が声を上げる。

取りあえず車を出し首都高に乗つた。

流石に早朝だけの事はある、道が空いていて気持ちが良かつた。
『タカちゃん、朝ごはんまだでしょ。作つてたんだけど食べる』
『お袋、悪いんだが。さつき海が作つた、弁当食べたばかりなんだ』
『あらあら、それは愛情たっぷりでお腹も満足でママのは食べられない』

『ちよつとは食べるから、後はみんなにあげてくれ』

『うふふ。冗談よ。はい、みなさんどうぞ』

『まあ、美味しそう。頂きます』

『ほら、凪ちゃんもどうぞ』

『はい、頂きます』

『茉弥ちゃんは食べないの？』

海が不思議そうに聞いた。

『茉弥はママが作つてていろ。てに時むかし、いっぽい味見してお腹いっぽいなんだもんね』

『母さま、内緒つて言つたの。もひ』

茉弥が頬を膨らませ赤くなつていてる。

『海ちゃんには取り分けましょつね』

『あつ、ありがとうござります』

『隆羅。凄く美味しいよ』

『そつが、お袋は料理上手いからな、昔から』

『海、ターチャンにも食べさせてあげないと。ほら、あーんつて『潮さん、そんなに面白いですか?』

『面白くは無いわよ。楽しいの』

『一緒にです。どっちも』

『あの、その、隆羅。あーん』

海が真面目な顔をして、楊枝に刺したから揚げを口元に差し出した。

『ば、馬鹿。ああもう』

俺が口を開けると海がから揚げを口に入れた。

『きやーきやー。タカちゃん、真っ赤か』

『ターチャン、海のお弁当とどっちが美味しい』

『そんなの比べられません』

『本当にハツキリしないんだからターチャンは』

『どっちも愛情たっぷりで美味しかったんですね』

『でも海ちゃんの愛情にはママ負けちゃうかなあ』

海が隣で真っ赤になつて下を向いたままだつた。

今日から3日間の事を考えると憂鬱になつて来た。

車は東名に入り順調に進んだ。サービスエリアに1回止まり休憩をして東名をひた走りそして高速を降りてから西伊豆の宿へ向かつた。

『今日の宿がある場所は、穴場中の穴場だから人も少なくつて気持ちいいわよ』

『でも、潮さんお盆に海つて』

『ターチャンは考えすぎよ、多くは確率の問題なの。お盆休みに海や川へ出かける人が多ければ事故も必然と多くなる。それだけの事よ。まあ全部がそうだとは言えないけれどね。それに沖縄なんかは今も旧盆でしょ。気にし過ぎるのが一番いけないの判つた?』

『はい、了解です』

『判ればよろしい』

宿に到着すると昼までには時間があり。

部屋の準備がまだだといつ事で着替えだけさせてもらつてビーチで遊ぶ事にした。

宿の目の前がビーチになつていて。

しかし、本当に人が少なかつた。

お盆休みの書入れ時に、もしかして潮さんがこの辺り一帯を貸し切つてなんて考えたが気にし過ぎるのが一番いけないのかもしない。ある意味、潮さんを敵に回すのが一番怖い事なのかも……しかし何で俺の周りの人間は人使いが荒いんだ?

『はあ、はあ、はあ、死んでしまう』

『何、ヘタつてるの? この位で』

『これ位つて、荷物運びにセッティングまで全部ですよ』

『女の子にさせる気なの? ターちゃんは』

『だから、全部、やつたじゃないですか……少し眠ら……』

倒れこむようにパラソルの下で眠つてしまつた。

寝不足で車の運転しての強行軍だつたのでヘトヘトだつた。

どのくらい寝ていたのだろう。

『隆羅。隆羅、起きてスイカ割しようよ』

目を開けると、綺麗な顔立ちの海が透通るような白い肌によく映えた綺麗な青いビキニを着ていた。

『人魚……』

その時『ドスッ』と鈍い音がして息が出来なくなる。

屁が俺の腹に大きなスイカを落とした瞬間だつた。

『うつ、げほ、げほ、げほ、苦しい……』

『お姉ちゃんが起きろつて言つているだろ』

目を開けると赤いビキニの屁が立つていた。

『凪、ちょっと来なさい。さつきお姉ちゃんが言つたでしょ
『海、いいて気にしていないから。大丈夫だ』

『でも』

『俺が大丈夫だと言つているんだ』

『分かつた、ゴメンね隆羅』

『何も、海があやまる事は無いだらう。誰も悪くないんだ』

『海は、みんなとスイカ割して来い俺はもう少し横になるから。このスイカ忘れるなよ』

『うん』

ビーチには白いワンピースの水着を着た潮さんに、フリルの着いた

花柄の水着の茉弥。

そしてお袋は日焼けしないように完全防備な格好をしてスイカ割りの準備をしていた。

そして俺は夢の中へと誘つ。

まあ凪の焼きもちも分かるし、それにお袋や茉弥と仲良くしているのでそれで良い様な気がしたのだ。

遠くでみんなが楽しく遊んでいる声がした。

気持ちが良い幸せだ……しばらくウトウトと眠る。

『隆羅、寝てばっかりいないで行くよ』

いきなり手を引っ張られ連れ去られた。

そこには大き目のゴムボートがあり。ボートにはとても見慣れたシノーケリングの3点セットが積まれていた。

『あの、これは潮さん』

『ちょっと沖まで行つて見たくつて』

『で、俺に何をしろと?』

『漕いでちょうどいいね男の子』

『はあ、俺は使い魔か?』

ボートには、お嬢様が3人と俺の計4人だった、お袋と茉弥はビーチで何か拾つていた。

しばらく漕ぎ沖に出る、ここは入り江になつていて波はそんなに無いのだが限界だった。

『うう、気分悪い』

『大丈夫、隆羅』

『全然大丈夫じゃないぞ』

『もう、ヘタレなんだからターキちゃんは』

『俺が舟は駄目なの知つていてるくせに』

海に入れば何とかなると3点セットを着け始める。

『これ、使いますよ』

『ええ、ターキちゃんのだもん、『自由に』

『やつぱりそなんだ。じゃ、行つてきます』

大きく息を吸いバツクロールで海へ、そのまま潜る……

『えつ、お姉ちゃん上がってこないよ……』

海が不安そうな顔で潮の顔を見た。

静かな青い世界で光がキラキラと舞う。
しばらく、上を眺めていると誰かが覗いている影が見えた。
そろそろ上がるかな。

『隆羅。隆羅つてば』

『大丈夫よ、ターキちゃんなら』

『でも、隆羅上がつてこないよ』

『隆羅。もう隆羅!』

『なんだ? 海』

海が覗き込んでいるのと反対側から顔を出した。

『うふふふ』

『あはははは』

泣きそうな海の顔を見て潮さんと凪が大笑いした。

『隆羅のバカ!』

海が急に立ち上がりこっちに来よつとした。

『えつ? お姉ちゃん危ない!』

『海、座りなさい！』

ボートが大きく揺れた。

次の瞬間、ドボーンと水の音がして海が落ち。そして『ゴボッ』と水を飲む嫌な音がした。

ジャックナイフで急潜行をする、海の白い体が沈んで行くのが見えた。

手を伸ばして体を抱きかかえフィンを漕ぎ急浮上する。海を抱きかかえて勢い良く水面に出た。

『海！ 海大丈夫か？ 海？』

『ゴホ、ゴホ、ゴホ』

『こ、怖かったよ』

海が抱きついてきた。

『大丈夫か？ もう安心だ』

『た、隆羅。隆羅……』

『大丈夫だな』

『ん、うん』

落ち着かせる為に体を抱き寄せボートを見ると2人がこじあらをジャツと見ている。

『へえ、お姉ちゃんて、だ・い・た・ん』

『もう、ラブ・ラブね。2人とも』

『そんな場合じゃ、もういいす』

海がからかわれたのに気付いて真っ赤になつたが怖いのか離れようとしなかつた。

『もう大丈夫だな。ボートに上がれ』

『あれ、あれ』

ボートにつかまらせると、もがいているが上がれないらしい。

『しょうがねえなあ。海、両膝を曲げて右手でボートのロープをつかんでおけ。分かつたな』

『うん、こう？』

『もうちょっと手はこいつちだ。そつそつ、良いか行くぞ』

大きく息を吸い真下に潜る。

海の下まで潜り海を左肩に乗せ左手で体を支えてフィンを大きく漕いで一気に浮上する。

水面に上がった瞬間にボートを右手で押さえ手の力も加えて体を持ち上げ反転させる。

『ヒヤアツ！』

『えつ、どうなつてるの？』

海が変な声を上げると海はボートの縁に座っていた。

『す、凄い』

凪が驚いている。

『やるじやないターちゃん』

『あ、ありがとう隆羅』

まだ、なんだか海の顔が赤かった。

『もう、ボートの上で立つなよ、少し潜つてくるからな』

隆羅がボートから少し離れて素潜りをしている。

ボートの上では3人が空を見上げていた。

『気持ち良いわね』

『うん』

『ねえ、お姉ちゃんアイツ凄いな』

『そうだね』

『凪、あまりターちゃんに可哀想な事しちゃ駄目よ。あの子は凪に何をされても絶対に怒らないわよ』

『潮お姉ちゃんなんで怒らないのわ』

『だつて海があなたの事を大事に思つているからよ。あの子は自分の大切なものを傷付けられたり侮辱されない限り怒らないわ。とても優しい子なの優し過ぎるくらいにね。それに凪だつて大切なものが優しくしてもらいたいのよ。海の事も少し考えてあげなさい』

『だつて、お姉ちゃんアイツの前だと凄く楽しそうなんだもん』

『しようがないじやない海にとつてターちゃんは、とつてもとつて

も大切なんだからね、そつなんでしょ。海

『私は、その、とっても大切に思つてゐるけど隆羅はその……』

『はいはい、この話はおしまい。凪、判つたわね』

俺が水面に顔を出すと潮さんの呼び声が聞こえる。

『ターチャンそろそろ戻るわよ』

『分かりました』

ボートの後ろにつかまりゅうへつワインを漕ぎ始める。

『人間船外機みたいねターチャン』

『でも、結構重いんですけど』

『失礼ね、レディが乗つてこゐるのに重いって。この口がそういうと

と言つの』

『痛つたたたたた』

潮さんがほつぺを思ひつきつねつた。

ビーチに戻るとお袋と茉弥は、まだ何かを拾い集めていた。

『兄さま、戻つてきた』

『タ力ちぢんお帰り』

『ああ、疲れた』

2人の横に腰を下ろす。

『何をやつていたんだ、2人で』

『綺麗な石を集めていたんだよね、マーちゃん』

『うん、ほら、兄さま綺麗』

茉弥が小さな両手を開くと小さな石が光つてゐた。

『本當だ綺麗だな、そうだこれお土産』

それはキラキラと太陽を反射してとても綺麗な石だった。

『兄さま、くれるの?』

『ああ、茉弥に持つてきたんだ』

『茉弥、嬉しい。母さまで見て綺麗』

『まあ、綺麗ね。帰つたらマーちゃんの宝箱に入れよつね』

『うん、入れる』

昼食の後は各自ゆっくり過じていた。

俺は少し離れた岩場で海を見ながらボーとしていた。

ここは海の水も綺麗だけど、やっぱり島とは違うんだなあ海の色が青と紺しかないや。

去年の今頃は何をしていたつけそんな事をぼんやりと考へていると頬に冷たい物があたり振り返る海が立っていた。

『隆羅、ジュース飲む?』

『おっ、サンキュー。今来たのか?』

『ちょっと前に来たけど、隆羅が寂しそうな顔していたから声かけられなかつた』

『そりが、そんな顔してたか』

『うん、少し怖かつた』

海が不安そうな顔をして俺の顔を覗き込んだ。

『怖いって何で?』

『隆羅が居なくなつちゃいそつで』

『何処にも行かないよ』

『何を考えていたの?』

『去年は今頃なにしていたかなつて』

『隆羅は、時々遠い目をするね』

『そりが』

『うん、とても不安になる』

『何がだよ、海なんか変だぞお前』

海の目が真剣な眼差しになり俺の目を真っ直ぐに見つめた。

『知りたいの』

『何をだよ?』

『隆羅の気持ち』

『俺の気持ちつて?』

『隆羅は私の事をビーチ……』

『ああ居た。居た。こんな所で2人だけでコソコソとお姉ちゃん行くよ。ほら』

不意に嵐が現れて会話が途切れた。

『うん、分かった』

『潮お姉ちゃんが、ターちゃんはつてお前の事、探していたぞ』

『ああ、分かつたすぐ行くよ。先に行ってくれ』

嵐に連れられて海がビーチに戻つて行つた。

俺の気持ちか、どう答えれば良いんだろう。もう少し時間が欲しかつた。

ビーチに戻ると脚が片付けを始めていた。

『ターちゃん、早く撤収よ』

『ういーす』

『どうしたの？ 少し変よ、ターちゃん』

『元からですよ』

『そつかしら』

『俺はヘタレですか』

『そつそつ、もし釣りするよつなら車に道具積んであるから』

『ういーす』

『本当にどうしたのかしら』

宿はとても落ち着いたい感じの宿だった。

部屋からは海が見えてとても気持ちが良く、食事はみんなで食べられる様に小さな宴会場に用意されていた。

『わあ、凄い美味しいそつ』

『母さま、お魚が動いてる』

それは、海の幸テン「盛り」の豪華な食事だった。

『乾杯！』

宴の始まりの合図だった。

『おいしいね、隆羅』

『やつだな』

『お、茉弥。エビ食べるか？ ほりお兄ちゃんのも食べていーぞ』

『凪、いぼさないの、もつ』

『ピールおかわり』

『ワイワイガヤガヤと宴会は続いた。』

『ねえねえ、凪ちゃんこれ見て』

茉弥が俺が潜つて取つてきたあの石を出す。

『うわ、綺麗。茉弥ちゃんこれどうしたの？』

『あのね、兄さまにもひつたの。茉弥の宝物』

『良かつたね』

『うん』

『ターチャん、あの石つてまさか』

『潜つた時に採つてきたんですよ。西伊豆の海は綺麗ですから底まで良くな見えましたよ』

『でも、あの辺で深いんじやないの？』

『あのくらこの深さなら余裕かな』

『それじゃ、あの海をボートに上げた技つてどーで覚えたの？』

『島で海人うみんちゅの所で世話になつていていた事があるんですよ。その海人がダイビングもやつていて、そこで遊びながら憶えたんですよ。ダイバーの女の子には評判良かつたですよ』

『そうちの、そんな事していたんだ』

『そうだ、潮さん車のキー貸してください夜釣りに行こうと思つているんで』

『餌はあるの？』

『ええ、夕食前に買つて来ました。ありがとうございます。じゃ、行つてきます』

鍵を受け取り宴会場を出ようとすると、お袋が紙袋を差し出した。

『タカちゃん、待つて。はい、これいつもの』

『ああ、悪いな。サンキューお袋』

紙袋を受け取り宴会場を後にする。

『えっと、竿はこれか道具はど。これだけあれば十分か』

駐車場の車から竿と道具を取り出し、餌の入ったクーラーボックスを持ってビーチの近くの船着場まで向かう。

そして、先端まで歩き準備に取り掛かる。

道糸に通し錘を通してサル環を付けてハリス付きの針をつけて終了と。

餌を付けて投げ込む、竿先に鈴をつけて胡座をかいて足の間に竿を差し込んで横になつた。

その頃、他のメンバーは食事も終わり部屋に向かい歩いていた。

『茉弥ちゃん、これから嵐達の部屋で遊ばない』

『うん、良いよ。遊ぶ』

『潮さん、本当にありがとうございます。茉弥もみんなに楽しそうで』

『いえ、いつもターちゃんには無理ばかり言っていますから』

『気にしないでいっぱい使ってやってくださいね。タカちゃんの事、よろしくお願ひしますね』

『あれ、そう言えば隆羅は?』

海が潮さんに聞いた。

『ターちゃんなら、釣りに行くなつて出て行つたわよ。たぶん船着場じゃないかしら』

『ふうん、そうなんだ』

『そうそう、これから私達の部屋で騒ぎません? こんな事あまり無いですからね、沙羅さん』

『そうね、それは楽しいかも。是非』

潮さんたちの部屋でおしゃべり大会が始まつた。

茉弥は廻と、潮さんはお袋と楽しそうに話した花を咲かせていた。

『お姉ちゃん、私ちょっと散歩して来るね』

『うう、氣を付けるのよ』

『うん』

『あ、お姉ちゃん何処に、まさかこんな夜にアイツと
『凪、邪魔しちゃ駄目よ。海、行つてらっしゃい』

『うん、ちょっと行つてきます』

海が宿を出て辺りを見渡す。

『確か、船着場はあつちだよね』

俺は夜空を眺めながらどう答えて良いか迷つていた。

海の事は嫌いじゃない、だが気になる事があるのも確かだった。

ビーチの方から足音が聞えた。

『隆羅、そこに居るの?』

『ああ、こつちだ氣を付けろよ』

横になつたまま返事をする。

『見つけた、横に座つてもいい』

『ああ、いいぞ』

海が体育座りをして膝を抱え膝に顔を乗せてこちらを見た。

『どうしたんだ?』

『隆羅が釣りをしているつて聞いて見に来たの』

『そうか。星が綺麗だな』

『うん、そうだね』

あの岩場での事があつて2人とも緊張していた。

『なあ』『ねえ』

2人の言葉が重なる。

『その』『あの』

また、言葉が重なつた、なんだか可笑しくなりどちらかとも無く笑
い出した。

『うふふふ……』

『あははは……、悪いが海から始めてくれ』

『うん、分かつた』

いつもの2人に戻つていた。

『ねえ、隆羅』

『なんだ?』

『何故、隆羅は私たちの事あまり聞かないの? 私達が水の精の事とか。普通は怖がったり、変な目で見たりするでしょ』

『そりだなあ、多少は潮さんから聞いたけれど根本が他の所に在るからかな』

『根本が?』

『そりだ、水の精や門番だとして、海が変わる訳じゃ無いだろ。それは海が自分でどうにができる問題じゃない、例えるなら田の色の違い肌の色の違いや髪の色の違いみたいなもんだと思うんだ。海は田の色が違うから、それはどうしてだつて聞くか? 聞かないだろ。海は海なんだから、俺が知りたいのは水の精とか門番の事じやなく。海がどんな女の子なのが知りたいんだ。だからかな』

『どんな女の子だったの』

海が不安そうな顔をした。

『すぐ殴るし、すぐ泣くし、食いしん坊で甘いものが大好きで』

『もう、隆羅!』

『そして、とても優しくって温かい、凄く綺麗な女の子かな』

『ありがとう隆羅』

『なあ、海。岩場で俺に聞いてきた事なんだけれど』

『うん、あのね、隆羅って私の事どう思つているのかなあつて。隆羅の気持ちが聞きたいの』

『そりだ』

『うん、教えて欲しい。隆羅の本当の気持ち』

大きく息を吸つて気持ちを落ち着かせる。

『こんな言い方は、するいかも知れないが。俺は海の事嫌いじゃないぞ、優しいし綺麗だし海が俺の事を好いてくれていてのもよく分かるんだ。でも、もう少し返事を待つて欲しいんだ』

『え、どうして?』

『海と出会つてからいろいろな事が起こつて。海は自分の力の事は昔から知つていたのだろ。でも俺は最近鬼の力を持つていて鬼の血

が流れている退魔師の一族なのを知った。鬼の力が在りうる無かるうと俺は俺なんだけど凄く戸惑っているし怖いんだ。すこし気に入る事もあるしな。海には悪いと思っているんだ、中途半端な気持ちで居させてしまつている。『ゴメンな本当に』

『そなんだ、少し気になる事つて何?』

『それは、俺の問題かな俺自身の』

『そうなの』

『だからもう少しだけ時間をくれないか俺に。もつと海の事知りたいし俺自身の事も知りたいんだ。そうヨンナ～ヨンナ～で行きたいんだよ』

『ヨンナ～、ヨンナ～?』

『沖縄の島の言葉で焦らずゆっくりとつて意味だ。友達以上恋人未満みたいな宙ぶらりんとハツキリ出来なくて悪いとは思つてている。これだけは知つておいて欲しい。俺も海といつも一緒に居たいと思っている。だから、もう少しうつくりと行かないか。それじゃ駄目か?』

『うん、分かつた。隆羅の本当の気持ち聞かせてくれてありがとう』
チリン。チリン。

その時、竿の鈴が鳴つた。

『来た!』

竿を上げる、糸がピンと張つた。

『凄い凄い、隆羅』

『で、でかいのか?』

竿がギュンギュンとしなる。パチッんと糸が切れた。

『うわああ

勢い余つて尻餅をついた。

『ふふふ、隆羅つて面白い』

『そだな、もづ、帰ろつか』

『うん』

翌朝。朝食後、俺は宿のある集落の中を歩き回っていた。

それは朝食の時だった。

『今日のランチは、海辺でバーベキューしましょ』

『潮お姉ちゃん。田も賛成』

『海でバーベキューって素敵ね、タカちゃん』

『兄さま、茉弥も楽しみ』

『という訳で、ターちゃん買出しワロシクね』

『結局そつなるんですか。はあー了解です。大佐』

『海も一緒にターちゃんのお手伝いお願ひね』

『うん、判つた。お姉ちゃん』

『ねえねえ、潮お姉ちゃん。お姉ちゃん何かあつたのかな、あんなに嬉しそうにして』

『さあ、知らないわ。でも、あんまり邪魔ばかりしちゃ駄目よ』

『うん、判つてる』

『あら、ずいぶん素直ね』

『でも、まだ認めた訳じや無いからね。ただお姉ちゃんの事をとても大切に思つているつて判つたから』

『あらあら、まだ素直になきらうないの。もつ少し時間が掛かるかあ、困つたものね』

こんな感じで潮さんの思いつきで買出しに備つ出されたのだった。

『おーい、海行くわ』

『うん、隆羅。待つて』

『まじまじ、そのなんだ迷子になつたつ困るからな』

『う、うん』

隆羅が手を差し出すと恥ずかしそうに海が手を握る。

しかし、買出しにかなり時間が掛かってしまった。材料をそろえてビーチに向かう。

ビーチでは4人が道具を運んでいた。

『ねえ、潮お姉ちゃん。この辺で良いの?』

『いいわよその辺で』

『しかし、結構大変なバーベキューするのも。ターチャンがもう1人いたら楽なのに。それにしても遅いわねラブラブカップルは』

『母さま、楽しみね』

『そうね、マーチャンはバーベキュー初めてだもんね』

『うん』

ビーチに着くと道具は運んであつたが。見事に運んだままだった。茉弥と凪それにお袋の3人は波打ち際で遊んでいた。

『ターチャン、後はヨロシク。運ぶだけでクタクタよ』

『はいはい。分かりかした、やるか』

Tシャツの袖を捲り上げる。

『隆羅。何か手伝う事ある』

『大丈夫だ、海は食材をクーラーボックスに入れておいてくれ。それと宿に頼んだ、あれを取つて来てくれないか』

『うん、判つた。行つて来るね』

『ヨロシクな』

まずは、バーベキュー台を組み上げ、炭を入れ着火剤で火を熾す。潮さんは隣で見ていくだけだった。

テーブルを組み立ててその上に割り箸や皿などをセッティングする。ドリンクと食材のクーラーボックスを運んで完了だ。

『準備できたぞ』

遊んでいた3人が戻ってきた。

『しかし、ターチャン手際が良いのね』

『ああ、島でよくビーチパーティーしていましたから』

『ビーチパーティー?』

凪が不思議そうに聞いてきた。

『海辺でするバーベキューの事を沖縄では、ビーチパーティーやビーチパーティーって言うんだよ』

『よくやるのか?』

『さうだな、暖かくなると休日はどこかで誰かが必ずやっているよ。俺達もよくやっていたからな』

『おーい、貰つて来たよ』

海は宿に頼んでいたオーラリを取りに行っていたのだ。

『転ぶなよ』

そう言いながらオーラリを受け取りに行く。

『きやー』

海がつまづき、前のめりに倒れる。

『危ない!』

おにぎりの乗った皿を左手で取り、右手で海の左手首をつかみ引っ張り上げるが海が勢い余つて体ごとぶつかって来た。勢いで後ろに倒れる。

ゴツッと鈍い音がして後頭部と背中に痛みが走った。

『痛つ』

オーラリはなんとか無事のようだ。

『嫌あーー!』

嵐の声で目を開けると海の顔があり得ないくらい近くにあった。俺が手を引っ張り上げてそのまま後ろに倒れたので海の体が俺の体の上に覆いかぶさっていたのだ。

海が慌てて飛び起きてしゃがみ込んだ。

『大丈夫か?』

『うん。うん』

海の顔が真っ赤になり。首を縦に振るだけしか出来ないでいた。

『タカラちゃん大丈夫、あら大きなタンコブ。冷やした方がいいわね。お袋が俺の頭を擦る。』

『痛いて』

『お姉ちゃん怪我は無い?』

凧が声を掛ける。そして真っ赤な顔のまま、凧に連れられバーベキュー台の所で座っていた。

『もう、ターチャンは相変わらずヘタレね。カッコいいのは海の中だけなのかしら』

バーベキューが始まった。

焼く係りはもちろん俺の担当だった。島でもこつもれつだった手馴れたもんだ。

焼いて焼いて、オニギリ食べてまた焼いて、オニギリ食べてオニギリ食べて。

『タチちゃんは、未だに駄目なの』

『ああ、残念ながら。魚なら大丈夫だが』

『それでよく調理の仕事なんてするわね』

『それはそれ。これはこれ。だからな』

『まあいいか、頑張っているみたいだし』

『そりそり』

『ターチャン、早く焼かないと無くなっちゃうわよ。あつ凧それはお姉ちゃんが育てたエビよ』

『早い者勝ちだもん。お姉ちゃんも食べないと、はいエビ』

『しょうがねえなあ、もつ』

『マーチャンもいっぱい食べなさい、お兄ちゃんが心を込めて焼いてくれたのよ』

『兄さまとラブラブ』

『茉弥、それはちょっと違うから。それにしても潮さんの影響受けすぎだる』

お腹もいっぱいになり。

みんなビーチで横になりお昼寝タイムに突入したようだ。

俺はビーチに座りジンジャー・エールを飲みながら疲れを癒していた。海を見ていると心の底から落ち着いてくるのだ。

横にはいつものように海がいた。

『さつきはありがと』

『海はあわてんぼうだからな、気を付けろよ』

『えへへへっ、デッカイなあ』

俺の後頭部のタンゴブを触つた。

『お前が言つな』

『隆羅、なんだか凄く楽しいね』

『そうだな、みんなと一緒にだからかな』

『そうだね。こんなに楽しいの初めてかも』

『そうなのか?』

『うん、だつて今まであまり出かけたりしなかつたから。これも隆羅と出会えたお蔭かな』

『そつか、それじや一生懸命遊んでいっぱい楽しまなきやな』

『今度は、隆羅と2人でどこかに行つて見たいな』

『判つた、今度な』

『うん、約束だよ』

『ああ、約束だ』

夜は昨夜に続き大騒ぎの宴会だつた。

酒の肴はいつもの様に俺と海の話だつた。

『ねえ、タカちゃん。もう、チコウはしたの?』

お袋が突拍子の無い事を聞いてきた。

『していません!』

『ええ、本当なの。でも今日はBも見られたし』

『あれはBじゃなくつて事故です』

『でも、この間の横浜の時は朝一緒に寝ていたんでしょ』

『ば、バカ。お袋こんな所でそんな事言つたら……』

『えーえ、タカちゃんもうそんな事までしていいの。進んでる?』
『誤解です。あのー、もの凄い顔をして睨んでいる極道の娘さん見たいのがいるんですけど……』

『お前、殺す』

潮さんが冷やかすと屁が飛び掛ってきた。

『痛つたたたた』

あつたり腕の関節をきめられた。腕ひしき逆十手とこりやつだ。

『屁、やめて隆羅が痛がつているから』

『ギブ、ギブ、ギブ』

俺が床を手で叩くと屁が腕を開放した。

『痛つたた』

『ターちゃん情けないわね。屁くらい掃えるでしち』

『タ力ちゃんは、どんな事があつても絶対に女の子には手を上げないものね』

『女の子に手を上げるなんて男のする事じゃないから』

『そんな事言つているとターちゃん今に痛い目に遭つわよ』

『今、遭つています。散々な目に。俺その辺ブラブラしてきますから』

『タ力ちゃん、はい。いつもの』

『悪いな、お袋』

『ママつて言こなさい』

『却下します。じゃ、ちょっと出でてくるから』

部屋を出て玄関に向かつ。

茉弥は疲れて寝てしまつていた。

海はたぶんトイレか何処かだらつ、屁はふくれ面のまま外を見ていた。

『ねえ、沙羅さん。あの紙袋は何？ 昨日も確か渡していましたよね』

『ああ、あれは。タ力ちゃんはあれだから。つぶつ

そこに海が戻ってきた。

『あれ、隆羅は？』

『出て行つたわよ、ブラブラして来るつて』

『じゃあ、私も』

『海、悪いんだけど廻の『機嫌とつてちょうどいい。ターサンは私が見てくるから』

『うん、判つた』

俺は防波堤の上でペットボトルの紅茶を飲みながらパンを独りで食べていた。

そこに潮さんがやつて来た。

『ターサン、何しているの？ 横いいかしら？』

『ええ、どうぞ』

『あら、何でパンなんか食べているの？』

『ああ、これですか。俺、子どもの頃から生ものや魚介類駄目なんですよ、魚は生じやなれば大丈夫なんですけれど。それで昔から海に来る時はいつもお袋がパンを用意してくれたんです。今回も気を使つて用意してくれたんだと思います』

『それなら、言えばいいじやない遠慮なんかしないで』

『でも、海に来ればメインは海鮮料理が普通の事じやないですか。それには今は調理の仕事をする様になつた訳だし宿の人に悪いですよやつぱり。美味しい獲れたての魚貝類を食べてもらいたいと思つている筈なのに』

『あなたつて子は本当に、どうしようもないくらい優しいのね』

『そんな事ないです、俺はけつこうこうしてパン食べるの嫌いじや無いですよ』

『そうだわ、この際だから聞いていいかしら』

『何ですか？』

『海との出会いよ、まだ聞いた事無かつたし』

『えつと、いいですよ。あれは春の大潮の時だから3月の終わりに近かつたと思います。前に世話になつた海人から名底湾での力二獲りを教わつたんです。潮が引き始めたたら海に入つて行つて捕まえるんです。冬場は毎年行つていて。あの日も、知り合いに頼まれて力二を名底湾に獲りに行つたんです。凄く星空が綺麗で、海面には夜

光虫が煌いていて。夜空を見上げたら、とても綺麗な水色の光が輝いていて何だろ?と思つたら、もの凄い勢いで近づいてきて。次の瞬間その綺麗な光に包まれていたんです。でも嫌な感じじゃなくて、なんだか優しい様な、そして懐かしい様な感じもしました

『懐かしい感じ、何故?』

『俺にも、分からぬけどとにかくそんな感じがしたんです。その後の事はあまり憶えていなくて、朝、目を覚ましたら自分の部屋のベッドで寝ていて、目の前に海が寝ていたんです。メチャメチャ驚きましたよ。そうしたらいきなり殴られて、それが出会いですかね』

『そうだったんだ。今は海の事、隆羅はどう思つていいの』

『どうつて何がですか?』

『好きなのか、嫌いなのかよ』

『嫌いじゃ無いですよ』

『ずいぶん、ずる言い方ね。あなた』

『俺も自分でそう思つていますよ。ずるい。逃げているつて。でも『でも、何なの』

『今、俺の体の中には海が持つていた鍵がある訳ですよね』

『そうね、事故とは言え』

『だから、海の俺への気持ちつて鍵のせいじゃ無いのかなつて』

『そんな事、考えていたの』

『だけど、それつて変ですか。俺だつて不安なんですよ、凄く。海との関係は絶対に失いたくないし』

『そうだったの。海は海よ、鍵の事とは関係ないわ。変な言い方かもしけないけれど体は鍵の入れ物に過ぎないわ。鍵が他の人に移つたからつてその人に惹かれる事は無いの。安心しなさい』

『そうなんですか。判りました。潮さんを信じます』

『ありがとう。それで海には』

『伝えました。本当の俺の正直な気持ちを。もう少し時間が欲しい事、そして一緒にゆっくりと進んで行きたい事、俺も海と一緒にいたいと』

『 そ う な の 、 本 当 に 大 切 に 思 つ て く れ て い る の ね 。 さ あ 、 戻 つ て 茉 弥 ち ゃ ん も 起 こ し て 。 み ん な で 花 火 で も し ま し ょ う 』

『 そ う で す ね 』

ま た 、 少 し 海 に 近 づ け た 気 が し た 。
そ し て 、 翌 日 は お 土 産 を 買 つ て 体 を 休 め る 為 に 、 早 め に 宿 を 後 に し た 。 も ち ろ ん 僕 の 運 転 で 。

夏休みも終わり、夏の暑さも和らいで少しすつと都会でも秋の気配を感じていた。

俺は最近、少し早起きをしてランニングをしている。写真をちらつかせる人に言われて。

いつものようにランニングをしてアパートへ戻るとキルシユが待っていた。

『潮さんの伝言で、貴様の所へ行き「キッド」を呼んで来いと言われたが「キッド」て誰の事だ』

とても嫌な予感がした。

キルシユが来る一時間ほど前に屋敷の中では、嵐と海が言い争っていた。

『嵐、さつさと行きなさい』

『嫌だ、絶対に行かない』

『早く準備をしていきなさいって、お姉ちゃんが言っているでしょ』

『もう、みんな行つちゃつたもん。絶対に行かないんだから』

『嵐が寝坊するからいけないんでしょ。まったく』

『違うもん。お姉ちゃんがあのヘタレの所に行つていて起こしてくれなかつたからだもん。不潔よ！』

そこに潮さんが現れてキレた。

『2人とも朝から、いい加減にしなさい。キルシユ！ 隆羅の所へ行き「キッド」を連れてきなさい。大至急よ！』

と言われ、そして俺の所へ来たらしい。

『「キッド」知らないなあ』

言いかけてキルシユを見ると頭の後ろに紙の様な物をつけていた。

『キルシユ頭に何を付けているんだ』

剥がすと、あの生まれたままの姿の写真だつた。

写真を握りつぶし『5分だけ待つていてくれ』と言い部屋に上がつた。

そんな訳で派手なオレンジ色のキャップをかぶりメガネを掛けパークーを着て真っ黒なコンバースのブーツを履き水無月家の広いガレージに居るわけだ。

『ターちゃんに、お願いがあるの。長野まで行つて来てちょうだい長野つて今からですか？ これから仕事があるんですけど』

『お店の方には遅れるつて連絡しておくから場所はここよ』
『お』
潮さんに地図を渡された。有無を言わせずですか？ 大体、いつも潮さんの話はこんな感じなのである。

『なんで、コイツなんだ』

眞が怪訝そうに言った。

『だつてしようがないじゃないお姉ちゃんは仕事で忙しくつて行けないし、車の運転出来るの他にターちゃんしか居ないんだから』

『いつもの運転手に言えばいいじゃんか』

『他の人じや絶対に間に合わないものターちゃんじやないと』

『ターちゃん、早く車を選びなさい』

仕方なく見回して車を選んだ。

『これで良いですよ。俺、外車なんか運転した事ないし車の事よく分からぬから』

俺が選んだのは型の古い国産車だつた。

『本当にそれで良いの？ 車の事知らないわりにあのポンコツかなりいじつてあつたじやない』

『それは車種とかそんな事はよく分からぬけれど、機械メカは好きだったので親父に連れまわされて居る時にメカニックの人といつも一緒に居たからエンジンの事や足回りはそれなりに。それに、この車はこの中でも1番ヤンチャ仕様なんじやないですか？ 上の回転数はどれくらいですか？』

何故、潮さんにそんな事を聞いたかと言うと初めてここに案内された時に車に関してはあのクソ親父と同じ匂いを感じたからだ。

それにこの車は他の車に比べてよく整備されているし足回りはガチガチにセッティングされていた。

『お前、この車は何だ?』

凪が不安そうに聞いてくる。しばらく考えて答えた。

『走る棺桶みたいなものかな、怖いのか?』

『わ・私には、こ・怖い物なんか無い』

『じゃあ、そのうちこい体をシートに沈めてシートベルトを締めてくれ』

『このイス硬いぞ』

凪が文句を言うと、

『凪のお尻の皮が剥けちゃつたら可哀そうだもんね』
と言いながら潮さんがシートにジャストサイズの長方形のクッショングをシートに載せた。

『後のは全て任せなさい、出来るだけ早く帰つて来るのよ』
潮さんには全てお見通しなのだろうと確信した。

『それと、明日から2~3日、ターサーちゃんを連れていきたい所あるからお店の方はお休みしてね。凪の事ヨロシクね。凪ちゃんも大好きなお兄様の言う事良く聞くのよ』

潮さんが言うと、凪の顔が少し赤くなつた気がしたが気にせず車を出した。

『蛙の子はやっぱり蛙ね。仁』

車を見送りながら潮さんが呟いた。

しばらく車の調子や挙動を確かめながら京浜道路を走り環状線に入る。

『悪いけれど窓を開けるぞ』

風を受けながら走るのが俺のスタイルだった。凪は詰まらなさうに外を見ていた。

『凪ちゃんは、まだ学生だらう何処の学校なんだ』

『「ひやん」はいらない、凪でいい。白百合学園だ』

『すうじいな、でもそれが普通なんだらうな、有名な小・中・高一貫教育のお嬢様学校だよな。中等部なのか?』

『中等部じやない、高等部だ』

『えつ、でも凪はまだ確か』

『15歳だ、飛び級したんだよ』

『へえ、頭すうぐ良いんだな。俺の事もよかつたら名前が何かで呼んでくれないか。お前じやなくてさ』

『兄貴』

よく聞き取れなかつたので聞き返そうとする。

『じや、しかたない今から、お前の事を兄貴と呼んでやつてもいいぞ』

『兄貴が、了承した。』

少し笑いながら言つ。

『なんだ、文句でもあるのか』

『いや別に』

凪とはちやんと話した事があまり無かつたが本当に素直で良い子なんだなと思つた。

ヤマングウだけどな(ヤマングウとは島の言葉でお転婆と言つ意味だ)

『あ、兄貴は何処の学校に通つていたのだ?』

『俺か、地元の学校だ』

『どんな感じだつたんだ』

『どんなつて、学生の頃は楽しい事なんて何も無かつたなあ、休みは親父に連れまわされていたしな』

『凪はどうなんだよ』

『私は、詰まらなぐは無いが』

微妙な返事だつた。

かなりのハイペースで走っていたので白と黒のツートンの車が追いかけてきた。

『前の車左に寄せて止まりなさい』

潮さんの後の事は全て任せろの言葉を信じてアクセルを開ける。前を大型トラックが平行して2台走っている、ドアミラーを倒しほんの少しひらくの間が空いた瞬間を見逃さず2台のトラックの間を矢の様にすり抜ける。

トラックと車の間は5センチ位だつただろうか。

それ以上追つて来る事は無かつた。

嵐を見ると固まっていた。

『ごめんな、怖かったか

『ー、怖いわけ無いじゃないか。お姉ちゃんの運転の方がもつとすごいで』

やつぱり潮さんはヤンチャらしい。

しばらく走ると突然携帯がなつた。潮さんだつた。

『その先のインターの近くで待ち伏せしているから迂回しなさい』

本当にこの人はスパイ衛星でもと思うと本当に持つていそうで寒気がした。

仕方なく迂回して高速にアクセスする事にした。

高速に乗りしばらく走り給油をかねて一休みする。俺が車のドアに寄りかかりながら空を見ている、飲み物を買いに行き戻ってきた嵐が話しかけてきた。

『兄貴は沖縄の島に住んでいたんだろ。どんな所なんだ?』

『そうだな、海が綺麗で太陽が輝いていて空がでっかくて夜は満点の星空で。人はみな優しく、とてもゆっくりとした時間が流れている所だ』

『そりか、いい所なんだな帰りたいか』

『ああ、いつかきつとな。そろそろ行くぞ』

時間的には、まだ余裕があつたが早め早めはいいことなのである。

交通法規など完全無視して白と黒の車をちぎりながら進む。

これで潮さんの言葉が冗談なら確實に塙の中だらうなと考ふる。

凪はまだ、詰まらなそつに外を見ていた。

『詰まらなそつだな』

『別に』

『しようがねえな』

長野に入る前に高速を下りる。

『何処に行くんだ？ まだ先だぞ』

『少し寄り道だ、凪はジエットコースターとか好きか、潮さんの車はそんな凄かつたのか』

『そうだな、こう「アーッ」て壁が寄ってきて、ドンッて車が重つんだ』

『潮さんてどんな運転しているんだ……』

しばらく走るとそこは親父に度々連れて来られた。

走り屋さんと言われる人が集まる有名な峠道だつた。

メガネ橋の近くで車を止める。

『あの、レンガの橋はなんだ』

『あれが、昔の鉄道の橋だよ、メガネ橋と言つてかなり有名だぞ』

『じゃ、行くぞ』

アクセルを開け、車を軽くスライドさせながらコーナーを抜ける。

『それ、どうだ』

『それ、それ、それ』

『ほら、ほら、行くぞ』

コーナーの度にテンションを上げ叫ぶ。

時々、走り屋らしい車とすれ違つ、田中なのでそれ程多くは無いが。

『バカ、バカ』

『止める、止める』

『行け、行け』

しばらくすると凪も笑い始めた。

近くで馬鹿をやられると、その馬鹿は伝染する。

途中で止まつて少し休む事にした。

そして通り過ぎる走り屋や止まつて遠巻きに見てゐる車の走り屋たちは、口々にほほ同じ事を言つてゐた。

『なんだ、見ない顔だな、それにあの古い車なんだ』

『おい、あれつて伝説のクイーンのシリビアじゃないか?』

『クイーンの車だぞあれ、あの伝説の』

『それに、あの派手なオレンジのキャップにあのメガネ「キッド」じゃないか?』

『なんでクイーンの車をキッドがこりやすげーぞ』

その後、大騒ぎになつた事は知る由も無かつた。

『そろそろ行くか、本氣で飛ばすぞ。寄り道し過ぎて時間があまり無いからな』

何年かぶりに全開で走つた。

ケイサツは1台も来なかつた、たぶん潮さんだらう。

俺が真剣な顔でいたせいか、凪も何もしゃべらなかつた。

長野市内の大きなホテルの駐車場には大型バスが何台も止まつていた。

タイヤを鳴らしながらホテルの入り口に車を着けるとロビーに居たお客様や生徒が一斉にこいつを見た。

『凪、着いたぞ』

返事が無い、気にせずに車から降りてトランクの大きなバックを取り出し肩に掛けて、助手席のドアを開け。

もう一度、凪に声を掛ける。

『凪、着いたぞ』

肩をゆするとハツとして俺の顔を見上げて叫んだ。

『兄貴のバカ!』

しゃべらないのではなくしゃべれなかつたようだ。

立とうとしたが立てないらしい。モゾモゾしながら『あれ、あれ』

と言つてゐる。

『凪お嬢様、失礼します』

シートベルトを外し、肩にバックを担いだまま、凪を抱き上げた。海も軽かつたけれど凪は鳥の羽の様だった。

嫌がる素振りは見せなかつたが、恥ずかしいのか少し顔が赤くなつてゐる。

お姫様抱つこの状態でロビーに入ると視線が集中した。

『わあ、凪ちゃんが来た』

同級生が騒いでいた。

ロビーのソファーに凪を座らせ横にバックを置くと友達が集まつてきた。

『凪をよろしくお願ひいたします』

同級生の女の子達に、軽く会釈をして立ち去ろうとする。

『兄貴、ありがとう』

軽く手を上げて合図をして車に向かう。

『凪ちゃん、あの男の方、どちら様なの?』

『ああ、もしかしてあの方が、あのお兄様なの?』

『キヤアー』

などと言つ声が聞こえてきた。

その後、全開で峠を飛ばす今日は本当に人が多かつたが、そんな事気にしている時間は無かつた。

俺は、あの峠のメガネ橋の下で携帯で写メを撮つていた。やけに人が多いなと思いながら。

何故、こんな事をしているかと言つと。

凪を抱きかかえてロビーを歩いている時に、凪が耳元でこんな事を言つたからだ。

『あのメガネ橋の写真が欲しいから、帰りに撮つて来てくれ』

お嬢様はやはり、少しづがままだつた。

『本当に、しようがねえなあなのだ』

潮さんに言われたとおりに水神のビルの駐車場に車を止め。

管理人に車のキーを預け店に向かい猛ダッシュした。

息を切らして店に入ると『遅かったな』と先輩が言った。

『遅れて本当にスイマセンでした。』

返事をしてキッキンに入る。

『何していたんだ？ 今日は』

『ちょっと長野まで』

『如月、お前冗談も程々にしろよ、馬鹿かお前は』
まったく信じてもらえなかつた。当然である。帰りに撮ってきたメガネ橋の写真を見せると。

『お前、壊れているだろ？』

一言で一蹴されてしまった。

仕事を終え、潮さんに言われたとおり、先輩に明日から2~3日、急用の為休みをもらいたい事を告げる。

『お前、最近、弛んでるな。女が出来るところだからな、でもしょうがないか。ビシッと決めて来いよ』
変な勘違いされてしまった。

俺ですら何の用事か知らないのである。

その夜、ネットなどでは、大騒ぎになつていていた事を俺は知らなかつた。

『クイーンが帰つてきた、いやキッドだ』

『キッドはやっぱりキングとクイーンの？』

『クイーンの愛車にキッドが』

等々その大騒ぎのネットを潮さんは見ながら、微笑んだ。

『クイーンがキングに会つた時には、キングには、もう可愛らしいお姫様が居たのよ』

その晩の峠はお祭り騒ぎだつたらしい。

そんなお祭り騒ぎも、吹つ飛ぶほど大変な事が、後に俺の身に起つた事を誰も知らなかつた。

俺は殴られた頬を腫らしながら、半べその海とイタリアンシェフ直伝の特製チーズリゾットを屋敷のキッチンで床に座りながら2人で食べていた。

話は1週間前の朝に遡る。

長野から帰った翌日キルシユが来て潮さんに呼び出された。いつもの様に森を抜け「水の宮殿」の様な屋敷に向かう。しかし、屋敷には入らずその先の森の中にあるコンクリート打放しの建物に案内される。

壁には「水神第2ラボ」と書いてある研究室か何かか?
『キルシユ、このコンクリートの塊みたいな廠ついこの建物は何なんだ』

『ああ、潮の研究室だよ』

『研究室? 何を研究しているんだ』

『俺らみたいな力の研究だ』

『俺らつて鬼や水の力か』

『そうだ、アイツは探求魔人だからな』

『探求魔人つて、潮さんの場合、冗談に聞こえない所が怖いな』

『誰が、魔人ですつて失礼ね』

何重にもなつた扉から潮さんが出てきた。

『ここは、普段あまり使っていないのだけれど、今回は何が起こるか分からぬから、屋敷から離れたここを選んだの、万が一何かがあつてもすぐに対応できるしね。』

『万が一って怖いですね』

それが現実の物になるうとは誰も思わなかつたのだ。

『隆羅、冗談は言わないで』

潮さんが俺を名前で呼ぶなんて本当に真剣なんだ、そんな事を思い

ながらラボの中に入ると棚の上に小さなフォトスタンドがあった。

『この綺麗な人は、誰ですか』

『母よ。ここは元々母のラボだったの』

ラボの中には、最先端の医療機器と思えるものが殆どそろっていた。それは、どんなオペでさえすぐに出来てしまつくらい。そして、その他にも見た事も無い設備や機器が数多くあった。『あの機械は何ですか』

『あれは私達が造つた氣の流れを見るものよ。全ての力は氣の流れと連動しているの』

『隆羅、これから私の言つ事をきちんと聞いてちょうだい』

潮さんが真つ直ぐに隆羅の目を見て一呼吸おいて話し出した。

『本当に何が起るか分からないわ、その覚悟は出来ているの?』

『覚悟つて言われても、そんな急に困るなあ。大丈夫ですよ、嫌だと言つても調べるでしょう』

『お気楽ね』

『気楽な訳無いじゃないですか。自分の体の中にある得体の知れない物を弄るんですよ、怖いはず無いじゃないですか』

『それはそうよね。隆羅にも怖い物あるんだ』

『怖い物だけですよ、なんたつて俺へタレですから』

『うふふ。そうね、そうだったわ』

少しずつ緊張が解けていくのを感じた。

『ターちゃんつて本当に分からないわね。鋭いのか鈍感なんだか』

『よく言われますよ。人の事に対してはよく気付くのに、自分の事に関してはヘタレだつて』

『じゃあ、手順を説明するわね、今日はあなたの体を徹底的に調べさせてもらつわ』

『いいですよ、潮さんにはもう丸裸にされてますから』

『あなたこんな時に、よくそんな事を言つていられるわね、本当にヘタレなの?』

『ホンマもんのヘタレですよ』

『ここからが本題よ。明日、あなたの封印を一部解き力を解放する実験をするわ』

潮さんの表情が強張り声のトーンが下がる。

『実験ですか?』

『実験って言うのは語弊があるかも知れなしけれど、予測は不可能なの。だからちゃんと覚悟していて欲しいの。判るわね』

『ナンクルナイサーですよ。潮さん』

『それは、どう言う意味なの?』

『島の言葉で、何とかなると気楽に行こうって感じです。俺の好きな言葉ですよ。今まで独りで島に飛び込んで生きてきて何とかならなかつた事、一度も無いですから大丈夫ですよ』

『不思議な子ね、あなたが言うと本当に大丈夫だと思えてくるから不思議ね』

『明後日には、元気で居られるはずよ、始めるわよ』

MRI、マルチスライスCT、その他、色々な検査が潮さんと会話のやり取りをしながら進んで行く。

『あなた、かなり骨折していた箇所があるのね』

『ああ、それは多分、バイク事故を起こした時のですよ』

『それと、肋骨に古い傷があるけど』

『そんな事まで解っちゃうんですか凄いですね。子どもの頃に大人に蹴り飛ばされた時の傷ですよ』

『大人に蹴り飛ばされたって何故? そんな酷い事を?』

『俺、小さい頃から親父に連れられてカートやバイクのレースに出されていて、親父の出るレースにも連れて行かれていましたから。周りはライバルが大人ばかりで。でも、俺の性格ってこんなじやないですか、それに解っちゃうんですよ大人が考えている事が子どもだから上手く言えなくて、だから疎ましく思っていた大人もいっぱい居たんですよ。その中でも特に俺の事を気に入らない大人が居て、

そいつにレース前に誰も見ていない所で思いつきり蹴り飛ばされたんですよ。多分、その時じゃないかな。お陰でレースは散々で親父にまでボコボコにされたし』

『何故、お父さんと言わなかつたの?』

『言えば大騒ぎになるだろ?』、お袋が心配しますから。お袋を泣かせたら、また親父にボコボコですよ。親父はお袋命ですからね』

『そうなの、じゃ学校はどうだったの友達いっぽいで楽しかつたんじゃない?..』

俺は何も答えなかつた。

『違うの?』

あまり答えたくなかったのだと思う、無意識のつむぎで話題を変えていた。

『そう言えば、僕は今日、学校へ行きましたか?』

『ええ、とても楽しそうに、なんで』

『いや、長野に行つた時は車の中で、とても詰まらなそうな顔していましたから』

『そりなの、おそれく飛び級しているから回りはみんな年上の子ばかりだからね、子どもの頃の1、2歳の差つて大きいわよね』

『そうですね』

『でも、今日は楽しそうに行つたわよ、ターチャんのお陰かしり』

『俺は、何もしていないですよ』

『そりなのかしら、帰つてきてから、ズーとあなたの話ばかりしていましたわよ。大きなトラックの間をすり抜けたとか、ジエットコースター見たいだつたとか。メガネ橋の写真を見せられたわ。峠に行つたのね』

『ちょっととした寄り道ですよ。潮さんもかなりヤンチャだつたんですね、車に乗つてよく判りました。それとケイサツの件ありがとうございました』

『別にそれはいいのよ気にしないで、こっちが無理矢理頼んだ事だしね。ヤンチャだつたのは昔の話よ、ちょっとだけね』

『ちょっとですか？かなりでしょう、それに今もね』

『本当にターちゃんには敵わないわね』

『いやいや、潮さんに勝てる人なんて居ないですよ』

そんな会話をしている間にも検査は順調に進み。

頭から足の先まで電極やコードを付けられて気の流れを見る機器の検査を始める。

『これじゃまるで実験動物のサルみたいですね。ウツキーなんぢやつて』

『ふざけないの行くわよ』

悪ふざけでもしていないと押し潰されそうな位、ラボの中は重い空気だった。

5分が過ぎ、10分が経ち。

潮さんの表情が段々険しくなつていった。

『これじゃ、この子の体は何故』

『それに、ナンなのは有り得ないわ』

『この状態で、封印を全て解いてしまつたらこの子は、死んで……』

潮さんが唇を噛み締めようやく検査が終わった。

『どうでした？ 何か解りましたか俺の体』

『それが、よく解らないのこんな事初めてだわ』

『解らないってそれじゃ、検査の意味が』

『解った事も少しあるの。それはあなたの一族の力がとても特殊だという事よ。普通の退魔師は自分の強い気をぶつけて鬼の力を滅するの。でも、あなた達はその逆よ鬼の力を吸収してしまうの。でも問題はここからよ。鬼の力なんて基本的に溜め込む事なんて出来ないわ。それをどうしているのか全く解らないのよ。それとこれはあなたの体しか診てないからハツキリとは言えない事なんだけれど、もう一つ薄つすらとだけど別系統の気の流れがあるの。それもなんだか解らないわ』

『俺の体は、特殊中の特殊つて事ですか』

『そうね。それと島で襲われた時、雷見たいのが落ちたって言つていたわよね。それにあなたシャワーを浴びて感電したわよね。有り得ないのよ電氣なんて、雷は神鳴りと書いて昔から神が鳴らす物と決まつてゐる。ますます明日、一部だけでも封印を解くのが怖くなつてきたわ』

『大丈夫ですよ。この日の為に今まで痛い思いや辛い思いして來たんですよ。このままじゃ誰も守れないから。昔の俺には何も無かつたけれど今はどうしても守りたいモノが有るんです。お願いします、どうなつても構わないから俺に力を下さい』

『あなた、どうなつても構わないと、万が一の事があつたらどうするの?』

『お袋達には島に帰つたと伝えて下さい。潮さんの言つ事なら信じる筈ですから』

『それでいいの本当に?』

『良いです。ナンクルナイサーですよ』

『本当に、あなたには敵わないわね。判つたわ。明日頑張りましょう』

『お願いします』

その晩はラボに泊らせてもらつ事にした。

『こんな所で本当にいいの? 屋敷かアパートへ戻つて良いのよ

『ここで良いです。面倒くさいですし』

『変な子ね』

出入りはこのカードキーで出来るからとカードを受け取つた。

本当は、とても不安で怖くてしうがなかつたのだ。

もしアパートへ戻つたらそのまま逃げ出してしまいそうで。

死ぬかもしれないという事も怖かつたが、それ以上に失つてしまふかも知れない事が耐えられなかつた。

なかなか寝付かれず、なんとなく外に出てラボの壁にもたれて芝の上に座つて夜空を見上げた。

月がとても綺麗だった。

少しすると誰かが歩いて近づいてくる気配を感じた。

こんな遅い時間に誰だろ、月明かりに照らされて見えて来たのは海の姿だった。

『海、こんな時簡にどうしたんだ?』

『べ、別に散歩だよ』

『そつか、散歩か。少し座るか』

手で軽く芝生を叩いた。

『うん』

海が俺の横に座った。

『月がとても綺麗だな。島でも綺麗に見えているかなあ』

『隆羅、帰りたいのか?』

『どうなんだろう。今は判らないや』

『そうなのか?』

『ああ』

今は島よりも好きなモノが出来たからと言いかけて止めた。
海を見ると僅かだが震えていた。

『海、寒いのか?』

『違う怖い』

『怖い? 何がだよ。何も心配する事無いじゃないか』
海がとても不安になつてゐる事に気が付いた。

『お母さんもお姉ちゃんみたいに研究者だったの。今回みたいにお姉ちゃんと何かを調べていて、そして調査中に事故が起きて死んじやつたの。だからもし隆羅に何かあつたら』

『そうだったのか』

何も言葉を続けられなかつた。

『だつて隆羅が、隆羅の事が……』

月明かりの下、海がその綺麗な顔を俺にまつすぐ向けて静かに目を閉じた。

『ゴメンな』

心中で囁きながら、海のおでこに軽くキスをした。
今の俺にはこんな事くらいしか出来なかつた。

『ありがとう。おやすみ』

海と別れた。

腹が決まった。

やるしかないのだ大切なモノを守る為にはどんな物かも解らない力をねじ伏せて。

翌日は、晴天のとても澄んだ青空だった。

潮さんとキルシユがラボに来たのはもう日がかなり高くなつてからだつた。

眠れなかつたのか少し疲れた顔をしていた。

『おはようございます』

『おはよう隆羅は、良く眠れたの』

『はい、爆睡でした。』

本当だつた不謹慎かもしけないが海の顔を見たら全てビリでもよくなつてしまつたのだ。

『潮さんそんな不景気な顔してないでガツンと行きましょうよ』

潮は少し驚いた顔をした。

『そうね、ガツンとね』

何か吹つ切れた様だつた。

『本当にあなたつて不思議ね』

手順について説明を受ける。

『これから下の部屋で始めるわ。隆羅の右腕の封印を遮断するの無理矢理の荒業だから必要最小限の解除よ。キルシユの力を使うわ。その為にここ数日、特別な訓練をさせていたの。キルシユの鬼の力を隆羅の腕に入れて一時的に鬼の力を増幅させてその力で封印を遮断するの。腕に入る時にかなり痛むけど大丈夫かしら』

『腕に入れるつて噛み付くと言つ事ですよね』

『そうよ』

『なら大丈夫です。実験済みですから、なあキルシユ』

『ああ』

キルシユは俺から顔を背けて唸つた。

『へんな2人ね、でもお似合いよ』

『潮さんサクッと行きましょう。サクッと』

このとても嫌な感じを早く終らせたかったのだ。

その嫌な感じが現実の物となってしまつただが。

ラボの地下の部屋は、まるで映画の中のCIAやFBI、KGBが使いそうな部屋だった。

とても厚い壁で、中が良く見える大きなぶ厚そうなガラス窓がある。2重になつていて中側はアクリルか何かだろう中に入り叩いてみるとガラスではなかつた。

床は柔らかい素材で壁には一面緩衝材が貼り付けられていた。拘束衣を着せられパイプ椅子に座れば立派な映画の一場面である。でも拘束衣じや無く俺はパンツ一枚で部屋の中に居た。

キルシユは目を閉じて精神を集中させていた。

スピーカーから潮さんの声が流れた。

『キルシユ、隆羅、準備は良い。行くわよ』

俺もキルシユも頷いた。

右腕を横に突き出す。

キルシユが『行くぞ』と田で合図をする。

俺は目を閉じて『OK』の合図をした。

次の瞬間、右腕に激痛が走る。

奥歯を噛み締めて堪えるが気が流れ込んでいるせいか、左腕を噛まれた時など比べ物にならないくらいの痛みだつた。

『キルシユ離れなさい』

潮さんの声が聞こえた。

俺が最後に聞いた声だつた。

『うわああああああああ』

右腕に文様が出たり消えたりしている。体が熱い島で覚醒した時よりも激しく。

『くつわあああああああああ』

痛いのか苦しいのかさえ判らず狂つた様にのた打ち回る。体がビクン、ビクンと痙攣する。

『危ないキルシユ逃げて！』

潮さんの声は俺には聞こえない。キルシユは気を放出したせいがあまり動く事が出来ず部屋の隅で丸くなつた。

『バチン！』

体の中で何かが弾け座り込み右腕が何かに引き上げられるように伸びられる。

右腕に文様が濃く浮かび上がる。

バリバリバリ！

放電現象が起こり俺の体から何本もの青い電気が立ち上る。

『駄目だ、もう誰も巻き込みたくない』

その時、俺の体を中心として「フワッ」と青白い光の玉が膨れ上がりキルシユや潮さんを包み込んだ。

次の瞬間、もの凄い音と共に激烈な光が全てを飲み込んだ。ラボ全体に巨大な神鳴りが直撃したのだ。

その神鳴りは天井を突き破り地下まで届き全てのモノを一瞬に焼き尽くした。

『ん、ん……あっ、私は……』

どの位時間がたつたのだろうか。

潮が気付き辺りを見回すラボの周りは木がなぎ倒され一面真っ黒焦げになつていた。

『隆羅！ キルシユ！』

潮がやつとの事で立ち上ると数メートル先に隆羅の体が横たわり、その向こうにキルシユが丸くなつていた。

あの球体の青白い光が包みこんだ場所だけ何事もなかつたかの様に残つていた。

『隆羅！ 隆羅！ 大丈夫？』

潮が隆羅に駆け寄り声を掛け体を揺らす反応が無い。

『キルシユ大丈夫なの？』

潮の呼び声にキルシユが気付きフラフラと近づいて来る。

『何が起きたんだ』

『解らない。でも隆羅が』

キルシューが隆羅の胸に耳を当てる。

『こいつ、心臓が。までかすかに動いている。呼吸もゆっくりだが
しているみたいだ』

海は屋敷の中で凄まじい光と音に遭遇した。

あまりの凄さにその場に座り込んでしまった。

そして窓の外に黒服の男達が数人ラボに向かって走るのを見た。
しばらくして黒服に運び込まれる隆羅の姿を見て、はつと我にかえ
り部屋を飛び出した。

凪も学園で、雷鳴と地響きを聞いていた。

『何、何が起きたの？』

生徒たちが一斉に悲鳴を上げた。

黒服がラボに着くと直ぐに隆羅は屋敷内の医療施設に運び込まれ精密検査が行われたが体には何処にも異常が見られなかつた。
それは信じられない状態だつた最新の医療技術でも原因は解らず、
処置の施しようも無かつた。

心臓の鼓動はとても間隔が長く、呼吸もゆっくりで息をしているの
か判らない程であった。

一見寝ているようにしか見えない。

仮死状態と言つた方が判りやすいかもしれない。

海が走り込んで来る。

集中治療室のガラスの向こうでピクリとも動かない隆羅を見て血の
気が引き我を失つた。

『隆羅に何があつたの？ どうして動かないの？ もしかして……』

『潮さんに掴みかかり泣き叫んだ。』

『隆羅は？ 隆羅は！』

『お姉ちゃん、隆羅は？ 隆羅まで連れて行かないで』

『お願い、隆羅を連れて行かないで……』

『どうして？ なんで？ お母さんも、隆羅も、連れて行っちゃう

の……』

もうそこから先は声にならなかつた。

潮さんは呆然と立ち戻くした。

凪が帰つてきたのは隆羅が屋敷内の別の部屋に移されてからだつた。

『ただいま』

屋敷の中は静まり返つていた。

近くにキルシユがいた。

『キルシユ、何があったの？ あの雷凄かつたね』

キルシユは立ち上がり凪の前を歩き出した。

『キルシユ何処へ行くの？ ついて来いつて事なの？』

凪はキルシユの後をついて歩く。

普段使われていない部屋の前で潮さんが腕組みをしてドアにもたれ

ているのが見えた。

『潮お姉ちゃん、ただいま、何かあったの？』

『凪、ゴメンね』

凪がドアを開け中に入るとベッドに隆羅が横になつている、その向こうで海がベッドに突つ伏して泣いていたのが見えた。

『兄貴、どうしたの何があったの？』

凪が部屋に入るとドアの外で潮さんが顔を手で覆い声を殺して泣いていた。

『ねえ、お姉ちゃん。兄貴どうしたの？ どうして動かないのまさか……』

そこでからうじて海が首を横に振つた。

『大丈夫だから』

『大丈夫って。何が大丈夫なの全然動かないじゃん。まるで死んじやつた見たいじゅん』

海の涙声を聞いて凪が泣き叫んだ。

『嫌だ！ 嫌だ！ 起きてよ。起きてよ！ 兄貴！』

隆羅の体を搖さぶるが全く反応が無かった。

後ろから潮さんが凪を抱きしめた。

『海、凪、本当に『メンなさい』

3人が抱き合つように泣き崩れた。

翌朝になつても、隆羅は田覚めなかつた。

海がベッドの脇で凪は近くのソファーで寝ていた。
潮さんが部屋に入つてきて凪を起こした。

『凪、起きなさい。学校の時間よ』

凪が眠たそうに田を擦りながらゆっくり起きた。

『今日は休む、兄貴のそばにいる』

『黙目よ、そんな事言つたら、隆羅に怒られるわよ』

『なんで、兄貴が怒るの?』

『凪が楽しそうに学校へ行つたつて話したら、隆羅とても嬉しそうな顔をしてたもの。こんな時だからこそ、やせんとしないとね。お願い』

『うん、分かつた。兄貴の事、よろしくね』

凪が学校に行く準備をしに部屋から出でていぐ。

『海も起きて。少しでも何か食べないと黙田よ、昨日から何も食べていないです』

『食べたくない』

『黙目よ、食堂に軽めの食べ物があるから食べてきなさい』

海は、ため息をつきながら食堂へ歩き出だした。
潮がベッドの脇に腰を下ろした。

『どうすれば、田覚めるのかしら。隆羅? メンね』

隆羅の頭を撫でた。

それから2日がたつたが進展はまったく見られなかつた。
海は疲れて隆羅のベッドにもたれて寝てしまつ。

そして海は夢を見た。

『あらあら、海は何をそんなに泣いているの? 泣き虫かわよね』

それは海の母だった優しそうに笑つてゐる。

『ママ、ママなの？』

『心からその人を呼びなさい。海が選んだ人ならきっと答えてくれるはずよ。今はその人の事を信じてあげなさい。分かった』とても優しい笑顔だつた。

目が覚め顔を上げ隆羅の顔を見るが眠つたままだつた。手を握ると少し強い口調で言った。

『隆羅、お願ひ。お願ひだから返事をして！ お願ひだから「じょうがねえなあ」って笑つて。お願ひ……』

胸が詰まつてそれ以上、言葉が出てこなかつた。

午後、海が屋敷の廊下を歩いていると学校帰りの凪が向こうから歩いてきた。

『兄貴の様子は？』

海は首を横に振つた。

窓の外を見ながら凪に海が言つた。

『凪、一緒に行つてくれない』

『どこに？』

海の目線の先はあのラボの方角だつた。

『ひとりじゃ怖いの、お願ひ』

『わかった。一緒に見に行こう、お姉ちゃん』

屋敷を出てラボの方へ2人で歩き出す。

木々を抜けるとそこには信じられない様な光景があつた。

直径30メートル位の円形状に周りの木はなぎ倒され、地面はえぐられ真つ黒焦げになつている。

そこにラボがあつたなんて信じられなかつた。

ラボが在つたであろう円の中心に辛うじて建物らしき床が丸く残つていた。

海は立ち尽くし凪は驚きのあまりへたり込んで声が出なかつた。しばらくすると後ろから潮の声がした。

『まるで、天の業火かインドラの矢ね。今でも信じられないわ。今、

こうして立つていられる事が。やはり、隆羅には神の力が宿つている。あのもう一つの気の流れがそうだつたんだわ。その力が暴走してしまつたの私の所為で。でも、隆羅は私たちを守つてくれた。隆羅の強い想いが鍵の力を解放して青白いとても優しい光で包み込んで。誰も、もう巻き込みたくないという隆羅の想いね。あの床が残つている所がそうよ』

その時、潮の携帯が鳴つた。

『何？ その件は判つたわ、直ぐに行くから』

『急用が出来て、これでお姉ちゃんは行くけど体冷やさない様にしない』

そういう残して潮はラボを後にする。

その日はいつになく涼しかつた。

『お姉ちゃん、あのラボつてお母さんのラボだつたんでしょう』

『そうよ、お母さんのラボよ』

『お姉ちゃん、お母さんつてどんな人だつたの？』

『そうね、凪はお母さんの事よく憶えてないのよね。凪を産んすべく亡くなつちゃたから。とても優しくつて綺麗な人だつたわ。あのラボに写真があつたんだけれど燃えちゃつたみたいね』

ラボの床が残つている場所を海が見ると空から紙切れが一枚ヒラヒラと落ちてきた。

『えつ、まさか……』

直感だつた。無意識のうちに海は走り出していた。

『お姉ちゃん、どうしたの？』

ラボの地下の床だつた所に紙が落ちる。

拾い上げると回りは少し焼け焦げていたが、そこには母の笑顔があつた。

夢が蘇える、涙が止めどなく流れ落ちた。

『お母さん、分かつた。私信じる。ありがと』

写真を胸に押し当てて膝を落として泣いた。

そして、事故から1週間が過ぎようとしていた。

海の疲労もピークだった、隆羅のベッドにもたれて深い眠りについた。

『ん～ん、あ～あ良くな寝た』

俺が目を覚ますとそこは屋敷の中だった。

『あれ、終ったのかな？』

横を見ると海が寝ていた。海を起しきれない様にベッドから立ち上がる。

軽い目眩と頭痛がした。

『あの実験のせいかな。しかし、腹へったな』

腕を見ると傷は何処にも無く何も変わった所は無かった。

頭痛のする頭を擦りながらキッチンへ向かう。

『おお、さすが水無月家。全てそろっているぞ』

寝起きという事もあって胃に優しい物をと思い。

お気に入りの歌を口ずさみながら、チーズリゾットを作り始める。20分程でリゾットが出来上がり、皿に盛りスプーンを探す。

『あれ、スプーンは何処に入っているんだ？』

海がよつやく目を覚ますと皿の前に座る箸の隆羅の姿が見えなかつた。

『隆羅？ えつ何処？』

部屋を出て屋敷の中を探し回つてみるとキッチンから歌が聞こえる隆羅の声だった。

走り出しへから中を伺う。

『あつた』

ようやくスプーンを見つけ振り返るヒドアの所に海が居た。

『海、どうしたそんな顔して？ あ、これはあげないぞ』

『馬鹿あ！』

少しからかう様に海に叫ぶと左頬にストレートが飛んできた。

たまらず後ろに尻餅をついた。

『痛たたた……お前はなあ、いつも、いつも、いつも』

『これは、絶対にやらないからな』

立ち上がり左手でリゾットの皿を持って、俺が言い放ったとたん海が大粒の涙を流し始めた。

『えつ?』

『隆羅! 隆羅! 隆羅!』

名前を叫びながら抱きついてきた。

後ろに押し倒され「ドンッ」と壁に背中をぶつけしゃがみ込む。寸での所でリゾットをこぼさずに済んだ。

『おい、危ないって。おい、こぼれるだらつ』

『馬鹿、馬鹿、馬鹿』

俺の胸を叩いて。

海は俺の胸に顔を埋め大声を上げて泣いていた。

少しして落ち着いてきたのか。

それでもまだしゃくり上げていた。

その時『クウ~』とあの可愛らしい音が聞こえてきた。

『しようがねえなあ。一緒に食べるか』

『うぐ、食べりゅう』

言葉になつてなかつた。

2人してキッチンの床に座り込み壁にもたれながらリゾットを食べた。

騒ぎを聞きつけて潮さんと皿がキッチンの方へ走つてくる。ドアから覗き込むと海が俺の胸に顔を埋め泣いているのが見えた。潮さんが後ろから皿を抱きしめ2人で泣いていた。

『よかつた。本当によかつた』

『兄貴……』

その夜、潮さんから何があり何が起きたのかを全て聞いた。

俺の体に神の力が宿つているかも知れない事も。

翌日、仕事に向かう、店に入るといきなり『如月、お前はクビだ!』と先輩に怒鳴られた。

『遅刻はする、勝手に休みは取る。俺はお前に島でそんな事を教えた覚えは無いぞ』

『すいませんでした。本当にすいませんでした』あまりにこの事に咄嗟に土下座をしていた。

『ふつふふ、嘘だよ。頭を上げて立て。あの海ちゃんのお姉さんには聞いたよ、事故だつて大変だつたな。ところで話は変わるが、海ちゃんのお姉ちゃん綺麗な人だなあ。独身か? 今度、俺にちゃんと紹介しろよ。さあ、仕事するぞ』

先輩が親指を立ててウインクした。

事故つてどんな話したんだろ?。どうせ、俺が海に殴られて壁に頭をぶつけてしまふ起きなかつたとか、そんなヘタレな事なんだろうなあと考えていた。

後で先輩に聞くとほほ、想像通りだつた。

潮さんてやつぱり、ひどい。

そして季節が移ろいだいぶ秋らしくなつてきた。

ラボでの事故からしばらく経ったある日、『潮さんが呼んでくるだ』とキルシユが俺の部屋に来た。

今度は何の用事だらう、本当に勘弁してくれと思つていた。渋々、屋敷に向かう。

いつもの応接間に潮さんが座つていた。

『何の用ですか？』

『そんな、渋い顔してまた私に何かやらせると思つているんですよ。ターチャさんは、今日は、私の用事がある訳じゃないの。ほら出てきて自分で言いなさい』

潮さんが考えている通りで、そこまで判つてているのなら何て考えてみると潮さんの影から凪が顔を出した。

『兄貴、体はもう大丈夫なの？』

『ああ、大丈夫だけ』

『もう、そんな事じゃないでしょ。ちゃんと話しなさい』

潮さんがもどかしそうにしている凪に突つ込んだ。

『う、うん。兄貴、今度の日曜日あいてる？』

『特に何も用事や予定は無かつたはずだが』

『じゃ、お願いがあるの私をドライブに連れて行つて……も一緒に』

『えつ？ 誰と一緒にで』

『その、友達も一緒に』

凪が申し訳なさそうに俯く、なんでも前回の長野の一件で何人かの友達と仲良くなり俺の事を紹介して欲しいと言われ、勢いでみんな一緒にドライブに行こうと言う話しになつてしまつたらしいのだが。約束の日が近づいても言い出せずには潮さんに相談したらしい。

『まつたく。しょうがねえなあ、何処に行きたいんだ？』

『メガネ橋の所なんだけ』

『判つた、今度の日曜日だな連れて行つてやる。大丈夫だ』

内心は、出来ればあそこには2度と行きたくなかったのだが凪からの頼み、』とを断る理由も無い。

『ほり、お姉ちゃんが言つたとおりでしょ「じょうがねえなあ」つてOKしてくれるつて。ターサンは優しいものね、うふふ』

『この埋め合わせは必ずするから、よろしくねターサン』

俺がため息をつくと潮さんが悪戯顔でウインクした。

と言つ訳で日曜の朝、キルシユが迎えに来て。あの格好で、俺はガレージの前に立つていた。そこに潮さんが現れて俺をまじまじと上から下から上へと見ている。

『うーん、このキャップは田立つから駄目よ、ここにしなさい』

『あつ、そのキャップは

いきなり潮さんがキャップを取り上げ、持つていた黒いキャップを被らされた。

『心配しなくても後でちゃんと返すわよ。なんてたつて大事なキャップだもんね』

なんで大事なつて、まあいいか。

『それと、あの車も田立つから、今日はこっちの車を使いなさい』

4ドアだが、やはりヤンチャ仕様には変わりなかつた。

車内を覗くと凪は助手席に座つていて、まあシートは普通のシートだつた。

『シートはノーマルに替えておいたから』

つて替えたんですか潮さん。

『あまり無茶しちゃ駄目よ』

『いやいや、凪の友達もいるんだし無茶はしませんよ』

『それもそうね。それに今日はフォローなしだからね』

『了解しました』

『それと、あの辺、最近ガラの悪いの多いから気を付けてね。喧嘩なんかしちゃ駄目よ、怪我しちゃうから』

『喧嘩なんかしないですよ、怪我したくないし。俺へタレですから。じゃ行つて来ます』

手で潮さんに合図をして車を出した。

『あなたがじや無くて、相手がよ』

『何故だ?』

キルシユが不思議そうに聞いた。

『あの子は自分のポテンシャルを何も解つていないわ。あの実験の前に、あの子の体の状態を確かめる為に私は本気での子の頭めがけて回し蹴りを入れたわ。でも、咄嗟に上段の受けをして衝撃を吸収する為に無意識のうちに横に飛んだわ。本人は吹き飛ばされたと思つてはいるみたいだけれどね。島で古武道をやらされたと言つていけど、ドライビングテクニックもそう。嫌々ながらでもあの子は体で覚えた事は自然に吸収して自分の物にしてしまうのよ。だから本人は普通だと思つてしまい、それが凄い事だとは思えないで居るんだと思うの。本当はとんでもなく凄い事なのにね。違が判る人なら、あの子のポテンシャルを見抜いてとこん鍛え抜いてみようと思うでしうね。たぶん古武道の師範もそうだと思うの。だから私もついからかいたくなつちゃうんだけどね』

『そんな事か』

『キルシユいい。もし、あの子が喧嘩に巻き込まれても無意識の中に古武道を駆使して相手をねじ伏せてしまうでしうね。あの子が切れていたら相手は大怪我じゃ多分すまないわ。その古武道の力があの力だつたらどうなるかしら、あの子が切れて体で覚えたあの力を無意識の内に使つたらあなたには止める自信があるの? 私には無理よ。たぶん誰にも止められないわ。下手をすればここ横浜くらいい簡単に一瞬で灰になるわよ』

考えただけでキルシユはゾッとした。

『あいつがヘタレで良かつたな』

『そうね、でもこれからが要注意よ、大きすぎる力は必ず狙われるから』

そう、ひとつひとつ歯車が少しずつ噛みあい静かにそして確かに動き始めたのだ。

待ち合わせは凪の通つている白百合学園の正門前だった。

『兄貴、学園までの道のりは大丈夫』

『完璧だ。もう何回も朝たたき起こされ、誰かさんを送りに行つているからな』

『えへへ、そうでした。ありがとうございます』

屋敷から30分ほど学園の正門に着いた。

門の前で3人の女の子が待つていた。

1人はおさげでおとなしそうな女の子、その向こうにベリーショートでボーカルな女の子、最後の子はショートボブでメガネを掛けていた。

『おはよー』

『おはよー!』『おはよー!』『おはよー!』

凪が挨拶をしながら笑顔で車を降りると女の子達が挨拶を返した。

凪さんつて凪が年下だらおいおい。

後部座席に3人を乗せて車を出す、緊張した空気が車内を包む。仕方なく俺から話しあした。

『凪、とりあえず自己紹介からしちゃうな。俺は如月隆羅、宜しくね』

『私は、愛。祐天寺 愛ゆうてんじ あいです』

ベリーショートの髪型のボーカルな子だ。

『日吉 瑞子ひよし るこです。瑠璃の瑠に子どもの子つて書きます。宜しくです』

メガネでウエーブのかかった髪の長い子だった。

『私は、小杉 千代子こすぎ ちよこつて言います。チヨコつて呼んでください』

おさげの子だ。

『凪は学園でどんな感じのかなあ』

『凪ちゃんは、頭も良くて今学期からクラス委員長やつて』

愛ちゃんが言つ。

『すこし前までなんか凄く静かだつたけれど、今はクラスのアイドルです』

璃子ちゃんが続く。

『すこしく元氣で羨ましいです』

チヨ「ちやんだ。

『楽しそうだな、とても。元氣なのはいつもの事だけじな俺が笑つていると愛ちゃんが聞いてきた。

『何がおかしいのですか』

『元氣つて言えれば、初対面の時、俺に何したと思つ。不意打ちで後ろからドロップキックだぞおかしいだろ』

『ええ、ドロップキックつてプロレスとかつて言つのですか』

3人が声を合わせて驚いた。

『バ、バ、バカあ。兄貴、な、な、何をいきなり言つてるのよ』

凪が真つ赤になり下を向いた。

『凪、何を赤くなつているんだ。本当の事だつ』

『兄貴のバカ。あれはだつて』

『そう言いながら俺の肩をポカポカと叩いた。

『本当に仲がいいんですね、いいなあ』

璃子ちゃんが言つた。

『いつも学園で凪ちゃんが話す事つてお兄様の事ばかりなんですよ』

『もう、愛も。もう、いいよ』

凪が困つて赤くなつていて。

『チヨ「ちやんはおとなしんだなあ』

『あのう、お、お兄様は沖縄に居たんですね』

『そうだよ、3年くらいかな。沖縄と言つても本島からずつと南の小さな島だけね。みんな沖縄とかに行つたこと無いのかなあ。それとも海外の方が多いとか』

『あまり旅行とか行つた事無いですよ。うちの学園はテストとか多いし長期の休みも補修とかあるし結構大変なんですよ』

愛ちゃんが言った。

『 そうなのか大変なんだな』

『 その島つてどんな所なんですか』

璃子ちゃんが聞いてきた。

『 そうだな、海がとても綺麗で、空がでかくて、ゆっくりとした時間が流れているところかな』

『 素敵です』

チヨコちゃんが言った。

『 そうそう、俺の事は好きな様に呼んでもらって構わないぞ。でも、恥ずかしいから「お兄様」だけはよしてくれないか』

少し前から、呼びづらそうなのを気付いていたのだ。

『 私は、兄さんで、それと、兄さんなら私たちの事、呼び捨てでも構わないですよ。ねえ』

愛ちゃんが言うと2人は『うん』と同意した。

『 了承した。呼び捨てで良いんだね』

『 ハーイ』

3人が声をそろえた。

『 じゃ、私はお兄さんで』

璃子ちゃんが言う。

『 チヨコはお兄ちゃんでいいですか。』

『 構わないよ』

そんな話をしていると高速のインターが見えてきた。

今回は潮さんのフォローなしと言つたりともあり。それなりの速さで走っている。

これが普通なのだ。

高速に乗り速度を上げる、後ろの3人はいろんな話で盛り上がつていた。

『 なあ、兄貴は沖縄の前は何処に居たんだ?』

『 横浜だぞ。それも今のアパートの目と鼻の先だよ半年だつたけど

な。実家は埼玉にあるけどな

『じゃ、埼玉で産まれたのか』

『いや、産まれたのは東京の文京だ』

『東京の文京つてお姉ちゃん達と居た所だ』

『そうなのか』

『うん、今家の前は東京の文京に住んでいたって聞いた事あるもん。凪は小さかつたからあまり憶えてないけれど』『そうなのか、あの辺は親父の庭みたいな所だったからな。上田動物園や近くの池でよく1人で遊んだぞ』

『えつ、1人でつて、どうして』

『あの辺の店でレースの打ち上げがあつて、詰まらないから1人で遊んでいたんだ。そう言えば、池の近くで不思議な女の子に逢ったような』

『兄さん、今どの辺なの』

愛の声で会話が遮られた。

『あと半分くらいかなあ、そろそろ休憩入れるぞ』

『楽しみだねジェットコースター』

愛が璃子に言つた。

『ジェットコースターつてもしかしてまた、あれをやれと凪の奴だな』

声には出さずため息をついて凪の方を見る。凪が申し訳なさそうに顔の前で手を合わせている。

『しようがねえなあ』

給油をかねて休憩のためサービスエリアに寄る。

ガソリンを入れて車を駐車スペースに止めてベンチに座つて空を見ていると3人娘がトイレから戻つて来た。

『いいな、お兄さんつて私も欲しかったな』

璃子が言つた。

『私も、1人つ子だからなあ』

愛が続く。

『お兄ちゃんならチョコも欲しい』

『兄さんって兄弟いるんですか』

愛が聞いてきた。

『いるよ、妹が一人、「茉弥」って言つんだ』

『そうなんですか、いいな茉弥ちゃん』

璃子が羨ましそうに言った。

『そう言えば、兄さんって凪ちゃんの本当の兄さんじゃないんですね。確かお姉さんの、こ、恋人とか』

愛が聞いてきた。

『ん、ん、友達かなあ』

微妙な返事をしてしまった。とりあえず微妙なのである。

『でも、凪ちゃんが、お姉ちゃんの彼氏って言つていましたよ』

璃子が突っ込む。まいつた。

『出逢いは、何処ですか』

『私も聞きたい』

他の2人が興味津々の顔で話にに乗つてくる。

『島でだよ、沖縄の』

『きやー、ロマンチック』

愛が叫んだ。あれがロマンチックなのかその片鱗も無かつたが……『で、2人は何処まで行つたんですか』

璃子がメガネの奥からキラキラと目を輝かせ聞いてくる。引きまくつて困り果てて何も答えられないでいる。

『兄貴、お待たせ』

凪が帰ってきた。ほつと胸を撫で下ろした。

『あれ、兄貴、顔赤いけどどうしたの』

『ん、いや別に』

人さし指で鼻の頭を搔いた。

3人はキャーキャーまだ騒いでいた。

『そろそろ行くぞ』

高速を降りて峠に向かう、メガネ橋の下で4人を下ろし1人で峠に向かつた。

少しだけ車のフィーリングを知りたかったのだ。

8割くらいパワーで何個かコーナーを抜けUターンして4人が待つ

ているメガネ橋に向かつた。

4人は橋をバックに写真を撮っていた。
そこに1台のヤンチャな車が近づき、中からデカイ男とチビな男が
出てきた。

『ねえ、君達。ここで何しているの?』

『俺らとドライブしようよ。ねえ、ねえ』
デカイ男とチビ男が口々に言つた。

『もうすぐ、兄貴が来るから』

『兄貴なんてほつといて、俺らと行こうよ』

凪の手を掴んだ。

『離してください』

『離せ』『駄目』

3人が騒ぎ出した。

『あなた達、最低』

凪が強い口調で叫び。男の手を払い退けた。

『何をこらあ!』

チビ男が凄んだ。

デカイ男が言つた。

『このガキが、クソ生意気な口の聞き方しやがつたんだよ』

4人の少し後ろに車を止めて近づいていく。

『どうしたんだ?』

4人が一斉に俺を呼んで俺の後ろに隠れるように周りこんだ。

『自分の連れのこの子達に何か用ですか?』

『あん、なんだてめえ』

デカイ男が言つた。

『このガキが、クソ生意気な口の聞き方しやがつたんだよ』

凪を指差しながら凄む。後ろを振り向き、小声で何を言つたんだと
聞く『最低』と凪が言つた。

それだけで十分だった。

『何をゴチャゴチャやつてやがるんだ。おい』
チビ男が叫んだ。

あまり離れると危ないと想い、少しだけ下がるように4人に指示する。

そして2人の男に向かつて頭を下げた。

『この子達の非礼は謝りますから、申し訳ありませんでした』

『ふざけんな、なめてんのか?』

デカ男が胸座を掴んできた。

『ちゃんと謝つていいじゃないですか』

『ざけんなあ』

デカ男の手を掴んで答えると俺を突き飛ばした。

バランスを崩して4人の前に尻餅をついた。

『このへタレが、なま言つてんじゃねえぞ！

¥ @#^『

その後の言葉はこの子たちに向けられた、聞くに堪えない言葉だった。

無性に怒りがこみ上げてくる。

俺の事は何とでも言えれば良い、だけどこんな良い子達を侮辱するのは許さない。

この子達をこれ以上危険にさらす訳にいかなかつた。

こいつ等には口で言つたのでは無理なのだ。

もの凄い怒りがこみ上げてくる。

それに反比例するかの様に熱くなるのではなく何かが体の中を上と下がつていきとても冷めた感覚だつた。

『謝つていいじゃないですか』

Gパンについた土を払いながら立ち上がり無意識の内に半身の姿勢をとり、とても冷たく強い口調になつていた。

『やるのか、コラア』

デカ男がくわえたタバコを吐き捨て足で捻り潰した。

そして、手に持っているまだ開けていない缶コーヒーだらうか、それを俺の顔めがけて投げてきた。

それと同時に俺に向かつて拳を上げて走りだす。
感覚が研ぎ澄まされている後ろで4人が耳を塞ぎ目を瞑つてしまがむのがわかつた。

怖くは無かつた。

飛んできた缶を上段の受けで右手の甲で弾き飛ばす。

一瞬、右腕に文様が現れ手の甲が光つた。

「パン！」炸裂音と共に缶はありえないスピードでガードレールに衝突し破裂し中身を撒き散らしてグシャリとつぶれた。
向かつてきたデカ男はピタリと止まり尻餅をついた。

『消える、このクズ』

2人を睨みつけながら冷めた口調で言い放つと男達は慌てふためいて車で走り去つた。

深呼吸をして振り返り4人に声を掛けた。

『もう安心だ、怖かつたかゴメンな』

『兄貴、凄い！』

『兄さん、超カッコいい！』

『お兄さん、素敵！』

『お兄ちゃん、大好き！』

口々に叫んだ。おいおい最近の子はみんなこんななんなのか、そこに

赤いスポーツカーが止まつた。

『そこの、お兄さんちよつといい？』

車の中から女人人が声を掛けてきた。

『この峰に「キッド」が来たつて、本当？』

『さあ、最近はあまりここには来ないんで』

誤魔化して答える。

『クイーンの車探そう、こんなヘタレな子に聞いても無駄よ』

助手席の女人人がと言つた。

『じゃあねえ~』

このとき初めて、この間に来た事が大騒ぎになつてゐるのを知つたのだ。

でもクイーンて誰だ。それに初対面でヘタレつて少し凹んだ。

車に戻り4人に確認をする。

『ジエットコースターしなきや 驄目か?』

『うん』

4人一斉に答える。

『しようがねえなあ、行くか』

『イエーイ!』

4人とも楽しそうに腕を上に突き上げた。

車に乗り込み全員にベルトを締めさせて峠の入り口に向かう。

『さあ、準備は良いか。行くぞ』

『イエーイ!』

4人とも楽しそうに、また腕を上に突き上げた。

アクセルを開けて車をスライドさせながら進む。

『キヤー キヤー キヤー』

コーナーの度にとても楽しそうな声を上げる。

『楽しいのなら、しようがねえか』

峠を越えて軽井沢駅に向かう。少し遅めの昼飯の為だ。

駅の近くの「カフェ ていーだ」に車を止める。

この店は俺が「キッド」と呼ばれていた頃、親父によく連れて来られた馴染みの店だった。

店に入り、マスターが俺の顔を見るなり声を掛けってきた。

『キッ……た、隆羅じゃないか久しづりだなあ、元気してたか?』

『マスター、いつものある?』

『あるぞ、今も、相変わらずだ』

マスターが答えると4人がキヨトンとした顔をしていた。

『兄貴、ここ知つてるの?』
凪が聞いてきた。

『ああ、昔よく来た店だ』

『兄さん、いつものつて何?』

『愛。カレーだよ、ここはカレーライスが絶品なんだ』
4人は顔を見合させ、息を合わせて叫んだ。

『マスター、いつもの5つ』

『ハイよ、元気だなあ。みんな』

『ひとつ大盛りね』

食事を終え、4人はテーブルでマスターからサービスのお勧めスイーツを食べている。

俺はカウンターに呼ばれてマスターと話をしていた。

『おい、キッドお前、最近あの峠で何をした?』

『少し前に、あの中の1人を長野まで送る途中で寄り道したんだよ。ちょっと訳ありで、例の格好で』

『それだけかあ? お前』

『時間が無いのに、メガネ橋の写真が欲しいって言われたから。こつちから全開で峠を越えてメガネ橋に』

『それだな、大騒ぎだぞ』

『なあ、マスター。クイーンつて誰だ?』

『お前の親父キングと張り合つていた凄腕の女の事だよ。何処かの令嬢で名前までは思い出せないな』

『それより、お前あの子達なんだ? まさか未成年はまずいぞ』

『違うよ。彼女の妹とその友達だよ』

本当のところ今は彼女では無いのだが、実は説明するのが面倒くさかつたのだ。

『おい、お前。彼女つて?』

マスターにヘッドロックを掛けられる。

『マスター声がでかいって、痛たたたた、痛いってば』

『おいキッド。今度絶対に連れて来いよ。連れて来て紹介しなかつたら、お前の秘密ばらすからな』

なんで俺の周りの人つて皆こん人ばかりなんだ。

店を後にして帰路に着く、帰りは大諸から高速で帰った。クイーンか、マスターはどこかの令嬢つて言つてたな。ヤンチャな令嬢つて、ある人の顔が浮かんで来たが、深くは考えなかつた。

アパートに着く頃にはすっかり忘れていた。

その夜は、屋敷に呼ばれ皆で食事した。

食事の後、俺は潮さんの書斎に居た。

『ターチャン今日はありがとう。凧も凄く喜んでいたわ。帰るなり機関銃の様にしゃべりまくつていたわよ、よほど楽しかったのね。』

『喜んでもらえればそれで良いですよ。俺も楽しかつたし』

『そう言えば、あなた東京出身なのね、それも文京。これは何かの運命なのかしら』

『さあ、どうでしょう子どもの頃ですか』

『それと、何かあったの？ 峰で』

『ああ、ガラの悪いお兄さん達にちよつと絡まれて、お引取り願いましたが。何か？』

『それもそう何だけれど、缶が爆発したとかしないとか』

『ああ、俺も確かじやないんですよね。久しぶりに半ギレでしたから』

潮の背中に冷たいものが走つた。

『なんなの、分かる範囲でいいから』

『缶を投げ付けられて裏拳で弾き飛ばしたんですけど。その時、一瞬だけ文様が出て手の甲が光った気がするんですよ』

『隆羅、それ本当なの？』

『だから確かじや無いって、潮さんに今、言つたばかりじゃないですか』

『ちょっと来なさい』

潮さんが大きな本棚に向かい1冊の本を押し込むと、本棚が横にずれ始めた隠し扉になつてゐるようだつた。

本棚の向こうはとてもコンパクトだがラボのようだつた。

『ここは、私しか知らないラボよ、少しいい』

従うしかない、いくつかの検査を受ける。

『おかしいわね。画像がぼやけるわ。あれ、これは何。隆羅あなた何を首に着けているの?』

『ああ、これですか「羅閃」ですよ』

『隆羅。『羅閃』ってなんでそんなものあなたが』

『この間、実家でお袋から』

『ちょっと見せて頂戴』

怖いのか潮さんは触れようとしなかつた。

『始めて見たわ、本当にこんな物があつたのね、あなたの母様は何て言つていたの?』

『笛みたいなもので、気の込め方は知らないけど、2人の気が込められていれば、吹いた本人の画像が相手に伝わるとか、……この間は、やつて見せてくれたから分かつたけど言葉にすると』

『やつぱりあなたは相変わらずね、もつ。他には』

『魔除けにもなるつて言つていました』

『そう、あまり表に出さない方が良いわね。大きな力や珍しいものは狙われやすいから、判つた? あなたの安全の為よ』

そして「羅閃」を外してもう一度検査をした。

『判らないはやつぱり、この前と一緒よ。ありがとう』

ラボのデスクの後ろのファイルの棚にいくつかの写真が飾つてあつた。

その中の一枚に目が留まり近づき手に取つてみる。

写真は暗くて周りはよく解らないが、とても綺麗な水色の光の玉が何かの中で光つていた。

『この写真はですか? 宝石か何かの光ですか』

『ああ、それは海よ』

『えつ、海つて?』

『あの子は子どもの頃、両手の間で私達の水の力を具現化する事が出来たの、その写真よ。私達には水の力がある、でも皆同じじやないの。それそれに、特徴があるのよ。海の鍵の力はヒーリングがメイン、嵐は声ね。そうローレライとかセイレーンみたいに人を惑わす力でも、まだ嵐は幼いから力は強くないわ。そして私の力は内緒よ。うふふ』

頭の中を一本の光が走り、子どもの頃の事が鮮明に浮かんでくる。

『俺、子どもの頃にこの光と同じ光を見たことがあります』

『そんな筈は無いわ。隆羅、それ本当なの? 誰にも見せるなつて禁止していたはずなのに……』

『ええ、本當です。場所は上田の動物園の近くの池で』

曖昧だつた記憶が鮮明に蘇える。

『詳しく話しなさい』

『親父のレースの打ち上げが毎回その辺りで行われていて、その日も打ち上げがありいつものように1人で遊んでいたんです。そして池の周りで遊んでいる時に泣いている少し年下の女の子が居て。俺、普段は絶対そんな事しない筈なのに不思議な感じがして話かけたんです。『どうした、何をそんなに泣いているんだ?』ってそうしたら「探し物が見つからない」ってそれで一緒に探したんです。イヤリングか何かだったと思います。1時間ぐらい探して水際の草の中で俺が見つけてキラキラしてとても綺麗な物でした。渡すと「ありがとう」って「これは絶対に内緒だよ」って言つて綺麗な光を見せてくれました』

潮さんが少しだけ何かを考えてから話し始めた。

『運命としか言い様が無いわね。それは間違いなく海よ、池の近くで海がふざけて私のイヤリングを片方失くしたの。その時、少しきつくなつて海が飛び出して居なくなつちゃたの必死に探すと池のほとりに居て。失くした筈のイヤリングを渡してくれたのとても

嬉しそうな顔で。あまりに嬉しそうだから理由を聞いたわ。そうしたらとても優しい男の子が一緒に探してくれたって言っていたの。その少し前に母を亡くしていて、全く笑わない子になってしまっていたのにとても不思議だったの。それからよ、海が変わり始めたのは。『そう幼いあなたに出会つてから』

しばらくお互に何もしゃべらなかつた。

潮さんが口を開いた。

『私達、一族には言い伝えがあるの、それは「光 見し者 共に歩み婚ぐ宿命なり」伝説的なものだと思っていたわ。光を具現化できたのは海ただ1人それも子どもの時のね。この意味分かるわよね。あなたに問いたいあなたの気持ちは何処にあるの?』

真っ直ぐ潮さんの目を見て答えた。

『決まっています。実験の前の夜、海に逢いました。その時は揺れていましたが今は違います。どんな覚悟も出来ています。俺は海の傍を離れる気はありません』

『判つたわ。私の正直な気持ちを話すわ。まだ、海にはこの事を秘密にして貰えないかしら。私、怖いのよあなたの力が。まだ、何も解つていないその力が。これ以上、何も失うわけには行かないの。私にとってあの子達は命なの分かつてくれる。お願ひよ』

潮さんの言葉を胸の奥に仕舞いこんで、アパートに戻つて部屋でとりあえずパソコンのメールのチェックをする。

そしていつも同じように茉弥のメールに目を通して返信する。

凪と凪の友達とまたメガネ橋に行つた事、そして軽井沢で古い知り合いに会つた事など。

俺はいつも遠く離れていた為に茉弥とメールのやり取りを毎日の様にしていた。

そしてあの1週間は急用でと誤魔化してあつた、心配かける訳にはいかない為に。

メールをチェックしていると嫌な件名が「ロゴ」クソ親父からだつ

た。

なじみのバイク屋のロゴを作つて送れと細かい指示書まで「十一寧に添付してあつた。

そのバイク屋は親父が族の頭をしていた時の仲間で親父の補佐をしていた人らしい、なんでも族の雑用を一手に引き受けていて連絡係りもしていたとの事だ。

昔からチームのステッカーや簡単なロゴの製作をして小遣いを貰つてはいたが、まあ、親父のする事なんていつもこんな感じだつた。納期は明日まで、どうせまた忘れていたのだろう親父のそんない加減な性格が大嫌いだつた。

仕方ないやるか、この仕事は割が良いのだ欲しい物もあることだし。速攻で終らせてようと気合を入れる。するとドアをノックする音がした。

出てみると海だつた。

最近、お互に何かと忙しくすれ違いばかりだつたからだらう。急ぎの仕事が入つて構つてやれない事を告げ、部屋に入れた。急いでパソコンに向かうまあロゴなんかは簡単な方である、いくつかのパターンを組み上げていく。

飽きてきたのか海が話しかけてきた。

『隆羅あのね、今、お姉ちゃんと……』

『ふうん、そうなんだ』

『でね、それでね……』

『うん、うん』

少し間があり。

『隆羅、話ちゃんと聞いてる?』

『聞いてるだろ』

『本当に?』

『ああ』

『じゃあ、私の言つた事覚えてる?』

『…………』

『ほら、聞いて無いじゃん、バカ。もういいよ』

聞き流していた。

剥れて俺のベッドの上で横になり向こうに向いて本を読み始めた。

『ああ、もう』

頭を搔きパソコンに向かう。

しばらくすると海の足が俺のイスに当たる。

『何だ?』

『別に』

無視する、たぶん構つて欲しいのだろう。
でも先に構えないと言つてあるはずだ。
しばらくするとまた、足が当たった。

『何だ?』

『別に!』

今度は口調が少し強くなつていた。それでも無視して作業を進める
何枚かプリントアウトしてチェックする。

プリンタの音だけが部屋に響く。

海が立ち上がる気配がした。

『もう、隆羅の』

『しようがねえ奴だなまったく』

海の言葉を遮り、イスをクルッと回転させて今プリントアウトした
ばかりのケント紙を海の前に突き出した。

そこには、田の中に斜め上を向いて泳いでいる人魚のシルエットが
あり。

その下に田に沿うよつたKai Minadukiとネームの入つ
たロゴだった。

『お前に、やるよ』

そう言つとキヨトンとした顔をしていた。

『ありがとう。おやすみ、隆羅』

すぐ笑顔になり嬉しそうにロゴを胸に抱きしめて帰つていった。
ほぼ徹夜の状態で次の日、仕事に行つた事は言つまでも無い。

アパートに帰ってきてから泥の様に眠っていた。

あの日、右腕の封印を解いてから少し変わった事がある。力の使い方は未だに解らないのだが、感覚が研ぎ澄まされている。キルシユの気配なんかは目には見えていなければ近くに居れば何処にいるか分かる位はあるが。

そして、それ以外にも色々と感じられる様になつて来ているのだが、どうも水無月家の連中の気配は集中しないと感じ取れない。水の力のせいなのだろうか。

その日曜の朝も、寝ているとぽんやりと気配を感じた。
誰だ？

トン・トン・トン・トン・トン軽い足音だった。
そしていきなり俺の腹の上に飛び乗ってきた。

『うげえ……』

変な呻き声をあげる。

口を開けるとそこにはマウントポジションを取つていて団の姿があつた。

海は毎日のように俺の部屋に知らない間に入り浸つてこりのだが、この団もちょくちょく俺の部屋に居る事がある。

この鍵つてどうなつてこるんだいったい。

『兄貴、おはよう。もうすぐお皿だよ、早く起きて』

『おやすみ』

『兄貴、起きてつてば』

俺の上に乗つかったままで飛び跳ねる。

『うげ、ゲホゲホゲホ』

水無月家の人はみな俺を殺そうとしているのじゃないかと疑ったくなってきた。

『何の様だ、日曜の朝ばかり』

『日曜の朝だからだよ、兄貴どうせ暇でしょ』

『どうせ暇つて失礼な奴だな、確かにする事と言えば掃除か洗濯くらいなものなんだが。』

『デートしよう!』

『デート?』

『そう、デートしてあげる。兄貴としてあげるつて、これまた失礼だなと思つ』『おやすみ』と言い布団に潜り込む。

『行つてみたい所があるの』

『何処に行きたいんだ』

『原宿』

『日曜の原宿なんて人間の行く所じゃない』

布団に潜り込んだまま言つと、今度は思いつき飛び跳ねた。寸での所でベッドから転げ落ち逃げる「『ン』」と床にしたたか頭を打つた。

『何で逃げるかなあ』

『そりや逃げるわ、殺す気か?』

『で行つてくれるの、一緒に』

『しようがねえなあ、外で10分待つていろ準備するから』

『やつた。兄貴ありがとつ』

着替えを済ませ外に出るが風の姿はそこには無かつた。

『まったく、何処に行つたんだ。風のやつ』

5分、10分、15分が過ぎる来ない、階段に座つて空を見ている。『ゴメン、兄貴。忘れ物しちやつて取りに行つっていたの。てへへ』『てへへつて。しようがねえなあ』

『原宿に何しに行くんだ』

『洋服を見に行きたいの、友達が可愛い洋服がいっぱいあるつて言ったから』

『判つた、じゃあ行くぞ』

歩いて小倉山の駅に向かうそして西横線で渋谷に向かう。

電車の中で凪がずっと学校や友達の話をするのを聞いていた。

渋谷に着き、ふつと思い出した。

『凪、洋服が見たいなら。渋谷にいい所あるぞ』

『えつ。じゃあ行つて見たい』

後悔先に立たずとはこの事を言つのだつた。

ハチ公前に出る、恐ろしい程の人ゴミだつた。

はぐれない様に凪の手を取つて歩き出す。向かうは108だ。

とりあえず108のビルの中に入る。噂には聞いていたが見事に女子だらけだつた。

中に入るとすぐに感じる俺に突き刺さる視線があきらかに痛い。

『ねえ、あの子、凄く可愛いくない。でも横のは何あれ』

『可愛いモデルかなあ。あの冴えないのは付き人なの』

そう、凪はあの水無月家の人間なのである。

潮さんや海が誰から見ても途轍もなく綺麗な美人な訳だから、このちっこいのも途轍もないくらい可愛いくない筈が無いわけだ。もう後の祭りである。

そしてもう一つ気が付いた視線がある。

アパートを出てからすぐに感じたものだつた。

それは電車に乗つた時に誰だかハツキリした。

電車は比較的にすいていた、隣の車両を見るとあきらかに怪しい人物が居た。

大きめの帽子を目深にかぶりにサングラスをかけてこちらをチラチラと伺う海がそこに居る。

凪はまったく気付いていない様子だつた。

凪が屋敷に忘れ物を取りに行つた時だつた。

屋敷の廊下で潮さんと出会う。

『どうしたの凪、そんなに嬉しそうな顔しちゃつて』

『えへへ、兄貴が原宿に連れて行つてくれるつて。』

『あら、ターちゃん」と「トー」のそれは良かつたわね。気を付けて行つてらつしゃい』

凪は忘れ物を取りに部屋に走つて行つた。

その後、潮さんは海に会つた。

『あら、海そんな所でボヤボヤしていて良いの?』

『えつ? 何のこと。お姉ちゃん』

『凪』これからターちゃんと「トー」とて言つていたわよ。凪に取られちゃうかも』

『そんな、訳無いじゃない』

『あら、ずいぶん余裕ね。凪の声はあれよそれでも余裕で居られるの』

潮さんは心配する振りをして面白がつて煽つたのだろう。

それを真に受け俺達の尾行を始めたのが手に取るようになつた。

しかし、これから向かう先はもの凄い人「みの中だぞ。

すこし心配になつた、潮さんが前に俺に言つたあの言葉を思い出したのだ『海はすぐ迷子になるから』。

『まつたく、しうがねえなあ』

渋谷の駅を出てからゆつくりと歩きだす。

そして気付かれない様に海の姿を確認しつつ、集中力を少し高め海の気配を感じられるようにする。

これがまたとてもキツイかった。

でも、しばらくすると体が慣れてきたせいか常に海の事を頭でイメージすると海の気配を感じられるようになつて来た。

それがどうしてなのはまつたく理解できないのだが……

そして今は、108の中を痛い視線を浴びながら凪に引っ張り回されていた。

凪に手を引っ張られて動き回る度に海の姿を確認する。

海が違う方向に進もうとした時は俺が凪を引っ張りワザと海の視界に入るようにして気付かせた。

何故こんなまどろっこしい事をしているかと言えば、海が凪を想いとても気を使っているのが分かるからだつた。

そうしてゐる内に、海も少し慣れてきて余裕が出来て来たのだろう。昼の飯時と言う事もあってか、少し店内は空いてきた。

俺は通路沿いのショップのショーウィンドウを前にして凪が買った洋服の紙袋を持ち立つていた。

凪は近くのショップで洋服を見ている。反対側では海がこちらを伺いながらマネキンの前で立ち止まり洋服を見ていた。とても気になるらしいサイズもちょっと良いのだろう迷つてゐるようだつた。

その時、凪に呼ばれて凪の方に向かう。

『何だ、凪？』

海に聞こえる様に少し大きな声で答えた。

海を肩越しに見ると何度も振り向いてマネキンの洋服を見ていたが、諦めたのか少し残念そうな顔をして俺と凪の後を着いて来た。

しばらく店内を見て周り108を出る。

俺の手には凪が買った洋服の紙袋が数個とそれとは別の紙袋が1つあつた。

人ごみをゆつくり抜けて駅の反対側に出る。

原宿までの大通りは比較的日曜でも人が少なくつて、こ洒落た店もありウインドーショッピングをしながら原宿に向かい2人で歩いた。原宿が近づくに従い人が増え。もうこれ以上、海を確認しながらと言つ状況は無理だと判断して海を見失う前に手を打つ事を考えた。しかし、俺たちに見つかれば慌てて逃げ出す事が手に取るようになかつた。

その為、原宿と言えば竹下通りなのだがそこへは向かわず歩道橋をわたつて原宿の駅前に出る。

海は歩道橋を渡ると見つかると思つたのか通りの向こうで歩道橋の

陰からこちらを見ていた。

駅前の広場で凪に荷物を預け少し待たせて置く事にした。

『悪いが、ちょっとここで待っていてくれ。絶対に動くなよ、それと知らない日本人が声を掛けてきたら適当な英語で答える分かったな』

『えつ意味分からぬ兄貴、何処に行くの?』

『安心しろすぐに戻るから、そこに居ろよ』

若者が集まる所にはキャッチや怪しいスカウトが多過ぎるくらい多い。

駅に電車が入り改札から沢山の人が出て来るのを確認して人ゴミに紛れる。

海を見ると俺の事をロストした様でキヨロキヨロと探しているのが確認できた。

その隙を突いて歩道橋を駆け上がる。

もう一度、海を見ると凪の方を見ているようだった。通りを越え歩道橋を降りて海の背後に立つ。

『コラッ！ 海』

海が慌てて振り返ると田の前に腰に手を当てて立っている隆羅が居る、驚いて少し顔を引きつらせた。

『海、お前ここでいつたい何をしているんだ?』

『べ、べつに何も。その……』

わざと少しキツイ口調で言つと怒られてると思い海がしゅんとする。

『たく、しょうがねえなあ』

海の頭をくしゅっと撫でてから、手を取り歩道橋を越える。

上から凪を見るとキヨロキヨロして俺の姿を探しているようだった。

『お待たせ』

海の手を引きながら凪の前に行く。

『な、なんでお姉ちゃんがここに居るの?』

凪が驚いていた当たり前だね。屋敷に居ると思っていた海が原宿

に居るのだから。

『着いて来てたんだ、俺達の後をずっと』

『えつ、ずっとって何処から?』

『たぶん、屋敷からだろうな』

『で、兄貴は何処で気付いたの』

『小倉山だ』

海が唖然としていた。そして海に忠告する。

『今日は凪に誘われた、だから凪が主役だ。それに散々心配かけた罰だ、海の事は一切構わないからな』

『しようがないな、お姉ちゃんはもう。すぐ迷子になるくせに』

凪と俺は顔をあわせて笑った。

凪の荷物を左肩に掛けて歩き出した。

『さあ、飯でも食いに行くか』

『えつ、どうしたの急に?』

凪が不思議そうな顔をして俺の顔を見上げた。

『誰かさんは、お腹が空いて今にも倒れそうだぞ』

海の動きが段々鈍くなつて来ていたのだ、極めつけは食べ物屋の前でお腹を押さえしゃがみ込んだのを俺は見逃さなかつた。

『お腹が減つてるなんて見ただけじゃ分かんないじやん』

凪が聞くとその時、あの音が微かに聞えたのだ「クウ~」と。

『ほらな、行くぞ』

『まあ、いいか』

右手で海の手を取る俺を見た凪は俺達を微笑みながら見た。

近くのカフェに入り食事をする、そして食後のコーヒーを飲んでいると海がトイレにたつた。

『凪、今日はなんだか変な事になつて『ermen』な』

『えつ、兄貴が悪い訳じゃないし、お姉ちゃんは兄貴の事が心配だつたんじゃないの』

『まあ、俺の方が心配だつたけどな』

『でも、お互に凄いな、これも愛の力だね』
カップに口をつけたとたんに凪にそんな事を言われて思い切り咳き込んだ。

カフェを後にして本日のメインディッシュ「竹下通り」に向かう。俺の左肩には幾つもの紙袋、そして右手は海の手を引いている。もちろん逸れない為だが。

『兄貴。少し荷物持とうか、大変そうだよ』

『いや、大丈夫だこれくらい、それに今日は凪が主役だからな』毎度の事ながら竹下通りは、もの凄い事になつていた人の頭しか見えない。

人ゴミの中を流されながら一応通り抜けると凪は目を回していた。

『海、ちょっと凪を見ていてくれ』

その場を離れクレープの屋台に向かいチョコレートとストロベリーの一つを買い2人の所に戻る。

『ほら、これでも食べながら一休みだ』
クレープを差し出すと、海がストロベリーを凪がチョコレートを取つた。

凪は放心状態で海はとても嬉しそうに食べていた。

『凪、もう大丈夫か?』

『うん、ありがとう。もう平気』

『まだ、見るか?』

人ゴミを見ながら言うと凪がブンブンと首を横に振つた。

『兄貴、ここは毎日こんななの』

『そうだな、平日も人は多いけれど、やつぱり休日は凄いな』

『もう、洋服買えたからいや』

『今日は、凪が主役だ。他に行きたい所は無いのか?』
まだ時間はたっぷり残つていたので凪に聞いてみた。

少し考えて何か思いついたのだろう。

『兄貴が子どもの頃住んでいた所に行つてみたい。ここから遠いの?』

『まあ、そんなには遠くないと呟つが、『ざぶりが

頭の左隅にはそこにはあまり行きたくないと言つて呟つが、』

『じゃあ、レッツ ゴー！』

匪が立ち上がった。

原宿からこいつたん渋谷に戻り西京線に乗る。

戸部公園で降りそこから歩いて15分位の所に、昔住んでいた家はあつた。

『ねえ、兄貴はいつもこの辺で遊んだりしたの?』

『ああ、そうだなこの辺かな』

『ねえ、あれは何』

『ああ、あれは戸部団地だ』

『兄貴、兄貴つてば。さつきから少し変だよ』

『えつ、何が?』

『なんか、生返事ばかりで』

『そんな事ないぞ、別に』

凪の言つとおりなだつた。何故なり、ここで遊んだ記憶なんてほとんど無いのだから。

海は「凪が主役」と言われたせいか何もしゃべらずこいつこいつくる。顔を見るとなんだか嬉しそうに辺りを見回していた。

幼い頃住んでいた家に着く、今は誰かが住んでいるのだろう。

『兄貴、あれつて学校だよね』

『そうだよ、中学校だ』

『行つてみよつ』

凪が歩き出した。少し歩くと直ぐに戸部東中の正門にたどり着いた。中を覗きながら隣が気になるらしく。

『あつちは何?』

『あそこは戸部東小学校だ』

『じゃ、あつちも』

凪がスキップをしている何が楽しいのだらう。

小学校の正門は開いていた、まだ学童の子が残っているのだらう。

『中に入つても怒られないかなあ』

『大丈夫だろう、仮にも俺はこここの卒業生だからな』

凪は校庭に入ると遊具や鉄棒などをしながら走り回っていた。

俺は海と2人でそれを見ていた。

『相変わらず元気だな、凪は』

ひと通り遊ぶと、凪が満面の笑顔で俺達の方へ走って戻ってきた。

『あ～楽しかった』

『そんなんに何が嬉しいんだ』

『だつて、兄貴が遊んだ校庭だよ』

『じゃ、そろそろ行くか』

駅と逆の方に歩き出す。

『兄貴、駅こっちじゃないよ』

『ここからだと、あっちの駅の方が近いんだ』

『少しうぐぞ』

正直言うと、戸部公園は誰かに会いそうで嫌だつたのだ。
この辺りは住宅街で滅多にタクシーなど通らなかつた。

『兄貴、お願ひがあるんだけど』

『なんだ、今日は何でも聞いてやるぞ。凪』

『私も手繋ぎたいなあ』

海に目で合図を送り手を離し、凪の手を取る。

『これで、良いのか？』

『うん。ほら、お姉ちゃんも』

嬉しそうに言つて海の手を取つた。

3人で並んで歩く、凪がとても楽しそうに手を振つていた。

しばらく歩き駅前に着くと凪が何かを見つけたのか子どもの様に手を振り解いて走り出した。

『凪、走ると危ないぞ』

『大丈夫だもん。キャアー』

その時、角でスース姿の男の人とぶつかってしまった。

『だから、危ないと言つたのに。どうもすいませんでした』

『あれ、もしかして如月じゃねえか?』

驚いて顔を上げると、凪とぶつかつたスースツ姿の男は3バカトリオのスギこと杉田だった。

『久しぶりだな。まだ時間は大丈夫だよな。ちょっと黒崎を呼ぶから待つ正在中』

杉田が携帯を取り出し電話し始めた。

こいつらは昔から全てにおいてこんな感じなのである、人の事情など一切無視して

しかし決して悪い奴らじやない事は確かなのである。俺が3年間も振り回されたのだから。

『悪いなこんな事になっちゃって、少し俺に付き合ってくれ』

『別に構わないよ。ね、お姉ちゃん』

海は頷いた。

『サンキューな』

携帯を取り出し潮さんに電話する。

知り合いで会い少し遅れる事、屋敷まできしんと送り届ける事を告げる。

『いいわよ。ターチさんとなら安心だから、あまり遅くならないようにな』

とOKをもらつた。

『潮お姉さんに、電話してたの? それなら凪が説明したのに』

『いや、これは俺の都合だ。俺がきちんと言わなきやいけない事なんだよ』

そこで杉田の電話も終つたようだつた。

『じゃ行くか。あれ? こいつらの女の子達は』

そこで気付いたらしい。どう紹介するべきか考えたが答えは出でこなかつた。ああ、野にも山にもなつてしまえ。

『えつと、こっちが彼女の水無月 海。こっちが彼女の妹の凪だ』海が後ろでイタリアの完熟トマトみたいに真つ赤になり俺のシャツを掴んだ。

『はじめまして、水無月 凪です。ほら、お姉ちゃんも』
凪は驚いた顔をして俺の顔を見上げていたが直ぐに自己紹介をした。
そして凪に促されて海も自己紹介をする。

『は、はじめまして、海です』

それは今にも消えそうな声だった。

『ねえ、お義兄さん、こちらは?』

ちょっと違つてユアンスのお兄さんに聞えたが、そこはあえてスル
ーする。

『ああ、こいつは高校の時の友達の杉田だ』

『はじめまして。私、杉田と申します、スギと呼んで下さい』

何をこいつこんなに緊張してるんだ相変わらず変な奴だなと思つた。

『で、何処に行くんだ。スギ』

『ああ、すまん。クロとの行きつけの居酒屋でいいな』

『ああ、構わないけど』

4人で駅前にあるチョーン店の居酒屋に入る。

飲み物も来ないうちにチノパンにポロシャツ姿の黒崎が走りこんで
きた。

『ハア、ハア、ハア。如月が帰ってきたって言つから飛んできただ
だ』

『あつ居やがつた。この野郎、連絡もしねえでこのバカが
息が上がたまま黒崎がヘッドロックをしてきた。

『痛たたた、クロ痛いよ』

そこでクロが固まつた、海と凪に気付いたのだ。

『スギ。こ、こちらのお2人は?』

『ああ、キサの彼女と彼女の妹だ』

『か、彼女だとお?』

クロが俺の頭を掴んだまま振り回す。

『クロ。痛いって言つているだろ』

クロの手を振り解くとクロが自己紹介を始めた。

『は、はじめまして。ぼ、僕は如月君と高校時代の友達の黒崎とい
います。クロと気軽に呼んで貰つて構いませんので』
緊張しているクロを見てスギと大笑いした。

クロの飲み物が来て、乾杯して飲み会が始まった。

『キサ、お前。今まで何処にいたんだ』

『俺は、沖縄で仕事をしていたよ』

『沖縄つすごいな』

『クロ、どこでも同じだよ。沖縄って言つてもそういう南にある小さな島だから』

『そんな島で何の仕事をしていたんだ?』

『そうだなあ、ホテルのウエイター・カクテルバー・パン屋・色々だ。最後の方は居酒屋を任せていたけどな』

『お前、変わったなあ』

スギとクロが顔を見合させて言つた。

『そりゃ』

『ああ、変わったよ驚くくらいな』

スギとクロが話しに夢中になつてゐるのを見てと風と海に聞いた。

『ゴメンな、大丈夫か』

『うん、平気だよ。樂しいし、面白いし。ね、お姉ちゃん』

『うん』

今日は本当に海が何もしゃべらなかつた。

トイレに向かうと俺を追いかける様に2人が次々にやつてきた。

『キサ、お前あんなに綺麗で可愛い子と何処で知り合つたんだ』

『ああ、島だよ。俺が居た沖縄の離島』

『でも、あんなに綺麗で何処かのお嬢様みたいだと、なんだか凄い緊張するよな』

『やつぱりスギもなのか、ドキドキもんだよな流石に』

まあスギの言つている事は間違いじゃないけどな。

クロも緊張しつぱなしらしい。

残された凪と海は嬉しそうに話をしていた。

『兄貴、楽しそうだね。でも兄貴つて学校の話してしゃべりたがらないよね』

『凪もそう思う、私も隆羅から聞いたこと無いんだ。高校の隆羅の友達かあ、どんな高校生だつたんだろうね』

海も興味はあるらしい。

そこに3人が戻つて来た。

ワイワイと仕事の話などをしていると俺の携帯が鳴つた。

お袋からだ、とりあえず後からと告げ電話を切つた。

『悪い、ちょっと電話してくるわ』

俺は携帯を持つて席を離れる。

しばらく沈黙が流れ凪が切り出した。

『あのう、スギさんとクロさんで、昔のお兄さんの事知つているんですね、さつき変わつたなつて言つていたけれど。昔のお兄さんつてどんなだつたんですか?』

実は3バカトリオは、スギが頭脳系、クロがパワー系、俺が巻き込まれ系なのだ。

スギが話し始めた。

『あいつ、高校1年の1学期に俺らの高校に編入して来たんだよ』

『その、高校って何処なんですか?』

『ああ、埼玉の西陵って聞いたことあるかな』

『えつ、凄い進学校じゃないですか』

『まあ、そななんだけど。キサは試験免除で編入してきたって噂だつたんだ。それでクロと俺のクラスになつて、はじめて見た時は無愛想でいけ好かない奴だと思たよ。キサの地元の奴ら探して聞いてみたんだ。如月つてどんな奴なんだて、そうしたら小中の9年間殆ど人と話をしなかつたらしいんだ。それで小学校でついたあだ名が「鉄仮面」中学の時が「絶対零度」、そして成績はいつもトップクラスだつたらしいんだ』

『あのう、信じられないんですけど。スギさん私たちの事からかつていません?』

『いや本当だつて。だから今あいつを見て驚いたんだよ、なあクロ』

『そうそう、アイツの変わりよつは、俺らの方が信じられないって本当に』

『それで、そなしゃべらないキサに興味を持つてキサを構うよつになつたんだけど、休みの日に何処かへ連れ出そと計画したら、いつも親父と用事があるつて言われてさ』

『えつ、それつて、お父さんと車やバイクのレースに出たりしてたて言うやつでしょ。』

『はあ? 車やバイクのレースに出場してたつて事? そな事をキサの奴してたのかあ』

『えつ! 知らなかつたんですか今まで』

『ああ、キサはあまり自分からそな話する奴じやなからな。しかし酷い奴だな、俺らに何も言わなينて。クロきつちりキサの事しめとけよ』

『スギ。了解したガツンとな』

クロが腕まくりをして笑った。

『しかたなく学校で3人で騒いでバカな事ばかりしていたんだ、そして付いた呼び名が3バカトリオ』

『クロで』

『スギで』

『キサで』す、3人合わせて「3バカトリオ」で

クロとスギが肩を組みながら叫ぶと海と風がお腹を抱えて大笑いした。

『つかみはOKと

『えつ何がですか？ スギさん』

『いや、こっちの話』

クロが即答した。

『面白い人たちだね、お姉ちゃん』

『そうね、変な人たち。でも楽しい』

『でも、変な時期に編入してきたんだね』

『そ、そ、そ、そ、それは俺らも気になつてキサに聞いてみたんだけど何も言わなかつたんだ。しばらくしてキサが最初に入つた高校の知り合いに会つたから聞いてみたんだ。そうしたら、何でも不良グループとトラブルがあつて学校に居ずらかつたらしいんだ。キサは頭も良くてスポーツも卒なくこなすから直ぐに目を付けられたんだと思う。それ以上の事は俺にも分からんんだけど』

『本当にあの3年間は青春つて感じで楽しかつたなあ。3人でバカやつて、でもキサはいつも俺らに振り回されていたと思っているのかも知れないけど、嫌じやなかつたんだろうな。いつも一緒にいたし。それで卒業してからも3人でちょくちょく会つていたんだよ、だけど急にキサの奴居なくなつちやつて。なあ、スギあの時は大変だつたんだよな』

『そ、う、だつたなあ。やつとのことでキサのバイト先見つけてそこの店長に聞いたら。親父さんが来て就職が決まったからここは辞めさせるつて言つたらしんだ。そしたら次の日から来なくなつたつて店

『長が言つてたよ』

『で、今日久しぶりに会つたらあの笑顔だらうビックリだよなクロ』

『そうそう、キサつてその沖縄の島でどんなだつたんだろうな』

『いつも笑つていて、優しくって、凄くヘタレ』

『海が真顔で言つた。』

『キサがヘタレねえ、まだ信じられないやあ』

スギが答えた。

そんな所に電話を終えて席に戻つた。

『悪い、お待たせ』

『キサ遅いぞ』

『まあまあ、遅かつたけど何の電話だつたんだ』

クロがスギを宥めて聞いてきた。

『ああ、お袋だよちよつと妹のことでな。で何の話をしていたんだ』

『お前が、俺らに内緒でレースに出ていた話をだなしていたわけだ』

『そうそつ、しかしキサも酷い奴だよな 一言も言わないなんて』

スギとクロに突っ込まれた。

『いやあ、でもあるな。好きで出ていた訳じゃなくだな。親父に出

ないと小遣なしだつて言われて無理矢理連れまわされたからで仕方

なくやつていただけだしな。俺にしてみれば、そう嫌々仕事やバイ

トをしていたのと同じ事かななんて。まあ昔の話だ、済んでしまつ

た事は良いじやないか、なあスギ、クロ』

『そうだな今は今だけだからな、飲むか』

しばらく雑談をし、凧が居るためにあまり遅くなる訳にもいかないのと。当分の間、じつに居ることを告げ連絡先だけを交換して別

れた。

凧は小倉山に着く頃には疲れて眠つてしまつた。

そりやあれだけ動き回つたんだからしじょうがないのかもしれない。俺達ですらクタクタだからな。

仕方なく駅から凧をおぶつて帰る。

海が荷物を持つてくれるというので半分だけ渡した。辺りはすっかり夜になっていた。

『なあ、海。今日はやけに楽しそうだな。そんなに楽しかったか?』

『うん、隆羅の昔の話も聞けたしね。今までこうして出掛けた事なんて殆どなかつたからね』

『どうか、スギとクロが俺の昔の話しきをね』

一瞬だつたが俺が遠い目をするとそれを海は見逃さなかつた。

『隆羅は子どもの頃、何で誰とも話をしなかつたの? 辛くなかつたの?』

『そりだなあ、何でだらうな。自分の力じゃどうしようもない事があつてな、それでかな』

『子どもの時の力なんて出来ない事ばかりじゃない』

『そりなんだが、どうしようもなかつたんだよ、その時は』

『でも、スギとクロと出会えて良かつたと思つてゐるんだ。俺が変わるべききっかけを作つてくれた奴らだから感謝しても感謝しきれなによあいつらには』

『でも、島で逢つた時の隆羅はそんな隆羅、じやなかつたよ』

『そりだな、俺はあの島で変わつたんだ。あの島がえてくれたんだ。でもあの島でもどうしようもない悲しみにくれた事もあるけどな』

『隆羅なんだか辛いことばかり』

海がとても哀しそうな顔をした。

『ああ、もう、止め止め。湿っぽい話はおしまい。今は今なんだ。今は今しかないからな過去の嫌な事なんて誰にでもあるはずだろみんな同じじよ。それに島で海に逢えたしな。俺は今に感謝しているんだぞ』

海の顔に笑顔が戻つた。

駅前通りを抜け屋敷の近くの閑静な住宅街まで帰つて来ていた。

『そう言えば、今日は全然しゃべらなかつたな。どうしてだ』

『だつて、隆羅が怒つた顔で、今日は戻が主役だからな』って言う

から

少し拗ねていた様だ。

『でも、今日はとつても良い事があつたから許してあげる』

『え、そんな事あつたか何のことだ?』

『内緒だよ』

『そうか。そうだ、その黒い紙袋は海のだからな』

その紙袋の中はあのマネキンが着ていた洋服だつた。

あのフロアを回っている時に海は落ち着きがなくなりモジモジし始め急に何処かに走り出した。

俺は焦つたがすぐにその方向を見て気付いたトイレだつと。

凪は洋服に釘付けだつた。

その隙にあの店に行き洋服を購入したのだ。

まあそれなりの金額はしたが俺の財布の中には買っても少し余力を残す金額が入つていた。

実は今日は欲しいパソコンのソフトを買いに行く為に前もつて銀行に行きおろしてあつた。

その予定は全てキャンセルになつたが、ソフトはまた今度買えば良い事だし。

それにこんな機会は滅多に無い事だしな。

『隆羅、何これ。見ても良いの?』

『ああ、良いぞ』

『えつ、これつて隆羅? 貰つて良いの?』

見る見る海の瞳が輝きだした。

『それ欲しそうにしていただろ。それに、その似合つかなつて海に。なんて言つか、そう、お礼みたいなもんだ今日の』

自分で言つておいて恥ずかしくなり顔が赤くなるのを感じた。

『隆羅、ありがとう。チユツ』

『バ、バカ。何やつてんだ』

海がとても嬉しそうな顔をして俺のほっぺにキスをした。

俺は凪をおんぶして手で紙袋を提げている為にまったく抵抗できな

かつた。

『うふふ、いいんだもん、だつて彼女なんでしょ？ 彼女ならチユウしていいんだもん。それとも、あれは言葉の彩なのどうなの？』少し怒った様な、少し切ない様な顔をした。

『しょうがねえなあ。そつだ、海は俺の彼女だ。如月隆羅は水無月海の事が好きだ』

『私、水無月 海も如月隆羅の事が大好きです』
海の瞳から涙があふれていた。

『泣くなよ。な、これからもずっと一緒に』

海が俺の胸に顔を埋めていた。

『うん』

そして綺麗な顔を俺にまっすぐに向けて目を閉じた。
海の唇に触れるあと数センチの所で背中で声がしてパツと2人は離れた。

『兄貴、ありがとう』

凪の寝言だった。お互いの顔を見ながら笑った。

そしてお互いに『シイー』と言い眠っている凪を見て微笑んだ。

『早く帰ろう。潮さんが待っているから』

『うん』

その日、微妙な2人の関係に終止符が打たれたのだった。

翌日、潮さんに呼ばれて屋敷に行くと。

『昨日は、楽しかったの？』

『まあ、色々ありましたけど楽しかったですよ疲れましたけど』

『そう言えば、海がずーと二口二口しているんだけどターチちゃん知らない』

『知りませんよ。海も昨日は楽しそうでしたから。その事じゃないですか』

『色々ね。まあ、凪も楽しそうだからいいか。これからも海と凪の事宜しくね。それとこれは、この間、凪を長野に送ってくれたお礼

よ
『

『ありがとうございます』

包みを渡され受け取り、包みの中を見ると海の洋服を購入する為に先送りしたソフトだった。

俺のプライバシーってと思ったが、きちんと頭を下げる。

「礼には礼を以べす」

如月家の家訓なのである。

俺と海が微妙な関係に終止符を打つてからじばらくたつた、ある日。俺は海に会う為に屋敷に向かつていた。

途中でキルシユと会つ。

『お、珍しいなお前がこんな所で何していのるのだ』

『ああ、ちょっと海に用事があつてな』

『じゃ、俺様が案内してやる』

『サンキュー助かるよ』

海が俺の部屋に来る事はあつても、俺が海の部屋に行く事は今までそんな機会は一度もが無かつたのだ。よつて俺は海の部屋は知らなかつた。

屋敷の中に入り廊下を歩いていると潮さんに会つた。

『あら、珍しい事もあるもんね。ターチャんが自分からこにこに来るなんて。ああ、愛しのラヴァーに会いにね。羨ましい私も彼でも探そうかしら。キルシユ何処かに良い人居ない』

『お前の、お眼鏡に適う様な奴はこの世に存在しない』

『キルシユずいぶんね。昔は居たのよ、可愛いお姫様に取られちゃつたけど。それにここにも居るじゃない。優しくて、昔は根暗で、意氣地なしで、へタなターチャんが』

『激しく拒否します』

『いつたいどんな話を聞いたんだ?』

『根暗つて屁か?』

『あら、いけず。お姉さんが優しく教えてあげる』

『断固拒絶します』

『そんにはつきり言わなくともいいじゃない。一途なのねターチャんは』

『あまり時間が無いのでこれで』

『これ以上は無意味である。』

『キルシユちゃんを見張つていないと駄目よ。ターチャンが襲い掛からないように』

『襲いません!』

海の部屋はそこからすぐの所にあった。

ドアをノックする、中から『ハイ』と返事がした。

ドアが開く中から顔を出した海は少し驚いた様な顔をした。

『えつ？ 隆羅どうしたの？』

海の顔が少し赤くなる。

『ちょっと海に頼みたい事があつてな』

俺の手を取つて部屋の中に入ろうとして、海が俺の足元のキルシユ 気付き足で出て行けと合図をする。

そして『入つて』と言い部屋に入ってくれた。

『俺はお邪魔虫か？』

キルシユは呟いた。

『あら、キルシユ追い出されちゃつたの？ 駄目ねもう』
海の部屋はとても広く綺麗で、そしてとてもシンプルだった。

海の人となりなのだろうと思つた。

そして部屋の真ん中のラグの上で床に座つた。

『ねえ、今日はどうしたの？』

『海、これから時間空いているか。ちょっと付き合つて欲しい所があるんだが』

『うん、大丈夫だよ。今日の用事は全部済んだから、それで何処に行くの？』

海は少し考えてから答えた。

『実は、妹の茉弥のプレゼントを買に行きたいんだ』

『茉弥ちゃんのプレゼントってなんの？』

『もうすぐアイツ誕生日なんだ』

『じゃ私も茉弥ちゃんのプレゼント選びに行く』

『ありがとうな』

『素敵なことじやない、でも嵐は一緒にやなくて良いの?』

『その事なんだが、実は……』

スギとクロ達と再会したあの日の居酒屋でお袋からの電話の内容を海に伝える。

『それは楽しそう。嵐も喜ぶと思ひ、楽しみだね』

『ああ、じゃ行こうか』

嵐には近口は俺の実家で食事会に呼ばれているから予定を空けておくようにと海に伝言を頼んだ。

そして俺は海と2人で池袋に居た。

何故ここかと言つとここはデパートの集合体だから。
それ以上に、この辺の事を俺が熟知しているからである。
少しデパートの中を手を繋ぎながら歩く、そしてジュエリー売り場
で目に留まつたものがあつた。

それは、あの夜に見た光の様で、そして何よりあの島の海の色によ
く似ていたのである。

それを店員さんに見せてもらひ。

『彼女へのプレゼントですか?』

海の手に力が入り熱くなるのを感じた。

海は最近、彼女という言葉に敏感に反応するようになつて困つていた
のだ。

『いえ、妹へのプレゼントを探しに』

『優しい、お兄様なのですね』

プレゼントなんて言つ物は最初のインスピレーションが大切なのだ、
値段も良い感じだったので即決してラッピングしてもらつた。

その後、デパートの中を見て回り。海は綺麗なオルゴール付きの宝
石箱を選んでくれた。

そして2人とも、もう一つのプレゼントをそれぞれ買って帰つた。

食事会の日がやつてきた。

しかし、その日は朝からなんとなく不穏な空気を感じていた。
感覚が鈍すぎてハッキリと分からなかつたのだ。

でも今日は大切な日なのである、『氣のせいだ』と思いやり過ごす事にして屋敷に2人を向かえに行く。

アパートまで来てもらつた方が早いのだが、これは如月家の招待なのである。

つまり俺がホストなのだ、来てもらつ訳には行かない。

屋敷の前に2人が立つていた。

そして「水の宮殿」のよつた屋敷のガラスと池に日の光が反射して幻想的な光景だつた。

『兄貴、遅いぞ』

凪が声を掛けてきた、我に返り2人に近づく。

凪はなんだかいつもと違いボーカルなのがとても可愛い服を着ていた。

海を見るところの間、俺がプレゼントした洋服を着ていた。

『クラツ』と目眩がするそれくらい似合つていた。

キラキラと反射した太陽の光が瞬き、そのままに女神のよつた。

『もう、兄貴は何を『テレテレ』してやるかな』

海の姿を見とれていると凪に突つ込まれた。海はたまらず顔を真つ赤にしていた。

『でも、お姉ちゃんその洋服どうしたの？　見たこと無いけれど』

『えつ、えーと隆羅に買つてもらつたの』

海がモジモジしながら話す。

『はあ？　兄貴いつの間にこんな可愛い服を何処で買つたの』

『えーとなんだ、この前の渋谷の108でちょっとな』

『信じられない、そんな事してやつたんだ。でもよくお姉ちゃんの好みとか分かつたね、それにサイズも』

『いや、そのなんだ。海を見ていた時にとっても欲しそうな感じだつたし、とても迷つていたのでサイズも合つただろうと、それで隙を見てちょっとな』

『隙を見てちょっとつて。凪が主役だなんて言つていたくせにもう』

『いや、すまん。でもちゃんと凪の洋服もかえたし行きたい所にいつたじやないか』

『まあ、いいけどね。でも本当に、兄貴つて鈍いのか鋭いのか分からないよね。ヘタレなのかと思えば車の運転めちゃくちゃ上手かつたりケーキ作れたり。そんな所をお姉ちゃんは好きになつたんだと思つたけどね』

改めて凪に言つられて恥ずかしくなりお互い顔を赤くしてうつむいた。

『もう、ラブラブで熱々なのも分かつたから。』『馳走様でした。ほら行くよ、茉弥ちゃんが待つているんでしょ』

凪が歩き出した。俺は海の手を取り凪の後を追いかけた。

渋谷まで行き西京線に乗り小武藏浦谷で乗り換え隣の西浦谷に向かう。

本当はこちからの方が実家に近いと教えてもらつていた。

何故、俺が小武藏浦谷からの道しか知らなかつたかと言つと俺が始めて実家に行つた日、たまたま小武藏浦谷に用事が会つたからとさらつとお袋がぬかしやがつたのだ。

駅からバイパス沿いに歩く凪はとても嬉しそうだった、茉弥に会つのが久しづりだからだろつ。

『兄貴。今日は何の食事会なの』

『今日は、誕生日会だよ。凪』

『えつ誰の？ 今、何て？』

凪が驚いたような顔をしている仕方なく少し説明をする、口を滑らせた海は氣まずそうに鼻歌を歌つていた。

『今日は茉弥の誕生日会だ。凪は行くだけでいいからなあ』

『だつて私、何もプレゼント用意していないのに。どうするのよ、

兄貴とお姉ちゃんのバカあ』

一気に凪が不機嫌になつたが実家のもつ田の前まで來ていたのだ。ここから帰るわけにもいがず、俺らの後ろに隠れるようにして家に

入った。

『凪ちゃんだ。凪ちゃんだ。凪ちゃんが来ててくれた』

凪の姿を見て茉弥は大喜びだった。
ダイニングに入るとそこには「凪ちゃん・茉弥ちゃんお誕生日おめでとう」の文字があった。

そう凪にはサプライズパーティーだったのだ。

今日は茉弥の誕生日なのが凪の誕生日も近いこと書つ事もあっての
お袋の提案だったのだ。

『お誕生日おめでとうー。』

みんなから一斉に掛け声が上がった。

まだ、凪は状況が飲み込めずオロオロしていた。
席に着きジユースで乾杯をする。

実は凪と茉弥は同じ年なのだ、凪は飛び級をして高校生、茉弥は出席日数が足りずにダブっているから中学一年だけ。
そしてプレゼントを渡す。

俺から茉弥にはアクアマリンのシンプルなネックレス、そして凪には同じデザインで石が淡いグリーンのペリドットのネックレスだ。
海から茉弥には綺麗な宝石箱、そして凪には色違いの宝石箱だった。
そしてお袋から凪には可愛らしくワンピースがプレゼントだった。

『あのう、ゴメンなさい私、プレゼントを……』

『凪ちゃんいいのよ。私がタカちゃんや海ちゃんに内緒にしておいてつて頼んだの、だつて凪ちゃんが茉弥に会いに来てくれるだけで十分なんですもの、これ以上のプレゼントは無いわ、また、いつでも遊びに来てね。本当に今日はありがとうね』

凪が申し訳なさそうに言つとお袋が凪に優しく言った。

『そうだな、凪は頭がいいから一人でも来れるよな。西浦谷からバイパス沿いにまっすぐ来て郵便ポストの所を曲がるだけだもんな。
今度は1人でも茉弥に会いに来てやつてくれ』

『そろそろ、もう凪ちゃんも私の子どもよ「沙羅ママ」じゃ変だか

らわう「如月ママ」って呼んでね。ママにも会いに来てくれたら嬉しいな』

お袋が凪に抱きついた。

あの居酒屋で電話があつた時に俺が頼んでおいた事があった。凪に内緒にする代わりに凪を甘えさせてやつて欲しいと、凪はどんな事を言つても決して自分から甘えたりしないからお袋からスキンシップを取つて欲しいと。

この事は海にも了承を取つてあった。

大きなお世話かも知れないが、凪は産まれてすぐに母親と別れている。

だから余計に母親の様な人の温もりを感じて欲しかつたのである。

『じゃ、今日から茉弥と凪は双子の姉妹だな』

『嬉しいな、嬉しいな。凪ちゃんと双子』

俺が言うと茉弥が嬉しそうに凪に抱きついた。

『凪も嬉しい』

凪がモジモジしながら恥ずかしそうに言つた。

しばらくくワイヤついていたのだが、2階の茉弥の部屋で遊ぼうと言つ事になり2人が上へあがつて行つた。

『隆羅、私もちょっと見て来るね』

しばらくして海が2階に上がつて行く。

『お袋、凪の事、ありがとうな。これからも連れてくるから宜しく頼むわ』

『うん。そんな事、全然タカちゃんが気にしなくていいのよ。娘が増えたみたいで楽しいも。それと海ちゃんの事、いつまでも中途半端じゃ駄目よちゃんしないと』

『その事なら、もう大丈夫だ。俺の気持ちも伝えたし、海の気持ちも聞いたから』

『そなんだ、おめでとう。ママも応援するからね。でもタカちゃんは、いつも人の事ばかり優先するから、そんなの駄目よ優しいの

は良い事だけね。自分をもつと大切にしなさい。人を想う気持ち
はとても大切な事。人を守る勇気はもつと大切な事。でも人だけじ
や駄目なの自分も守れないときつと哀しい思いをする人が出てくる
筈だから。もし万が一何か遭った時には、自分の力を信じなさい。
あなたの体の中にも退魔師の力が宿っている、その力がきっとあなた
を導き助けてくれるはずよ。それにお父さんがよく言ってたわよ
ね「熱くなつたら負けだ、どんな時にもクールで居ろ」ってママも
そう想うの、どんな時にも冷静で居られれば大丈夫のはずよ』

その言葉は、親父がレースの時にいつも言っていた親父の口癖だった
『熱くなつてもいい、だけど頭の中はいつもクールでいる、そうすればかならず活路は見出せる』

と何故その時は、お袋がそんな事を、言つたのか分からなかつた。

『タカちゃんと海ちゃん、ラブラブなんだ。LOVE IS POWERもパワーアップね』

なんて言いやがつた、本当にお袋だけは訳分からなかつた。

しばらくしてあまり遅くなる訳にもいかないので、海たちを呼んだ。

『おーい、そろそろ帰るぞ』

3人ともとても嬉しそうに降りてきた。

茉弥が寂しそうな顔をしたがしようがない、いつまでもここに居る
わけには行かないからな。

また遊びに来る事を約束して実家を後にした。

外に出たとたん、朝感じた不穏な空気をハツキリと認識でき嫌な予感がした。

その空気は敵意を帯びていた。

そして何処からか見られている感覚も同時にハツキリと感じた。

来た道を歩いて駅に向かつ。

2人に気付かれないように俺から話しかけた。

『茉弥の部屋で何をして遊んでいたんだ』

『最初は、トランプとかしていたんだけどね、お姉ちゃん』

『うん、隆羅の小さい頃の写真見た可愛いね、隆羅』

『それってアルバムを見たって事が、まあいいけど』

『兄貴つて本当に茉弥ちゃんと仲が良いんだね2人の写真ばかりだつたよ』

『そうだな、子どもの頃はいつも茉弥と遊んでいたからな』

その時、海は考えていた。

もしかして隆羅が学校で誰とも話さなかつたのは茉弥ちゃんの事が関係しているのではないかと。

でも口には出さなかつた。

それは、海が踏み込んではいけない領域の様に感じたからだつた。

『どうした海？ 神妙な顔して悩み事か』

『んん、違うのちょっとと考え事かなあ』

『それなら、いいけど』

それは突然訪れた。頭の中に鮮明に画像が現れたのだ。

『黒い影』

『しゃがみ込む海と嵐』

『土手に向かつて走つている自分の姿』

嫌な感覚が増幅した。辺りを見回す。

ここはバイパス沿いの歩道で今は大きな交差点に差し掛かっているすぐ近くに歩道橋があった。

車は多いが人はあまり歩いていなかつた。海を見ると何かを感じたのか少し落ち着きが無く目が泳いでいた。海では駄目だと判断して、凪の肩を掴み凪の目を真つ直ぐ見て言った。

『凪、落ち着いて良く聞けいいか。すぐに海を連れて2人で先に帰れ、この先の高架の右側が直ぐに駅だと判るな。乗り継ぎが分からなければ駅員に聞いてくれ。財布と携帯をお前に預けておくから何かあればすぐに潮さんに連絡しろ分かつたな』

『兄貴、いきなりどうしちやつたの、何があるの?』

凪が不安になり震えだした。

『何が起きてても大丈夫だ。俺が言つた事を信じてくれ、お前だけが頼りなんだいいな!』

その時、歩道橋の上で黒い何かが羽ばたいた。黒い影がこちらに向かい急降下してくる。

『伏せろ』

咄嗟に叫ぶ。海と凪がしゃがみ込む。

右手で払いのけたが影の爪か何かが皮膚を切り裂き血が落ちた。影は急上昇して、また襲つてこようとしていた。

信号が青なのを確認して凪に叫んだ。

『今だ、走れ!』

凪が俺の声ではっと氣が付き海の手を力の限り引っ張つて横断歩道を走り出した。

海は心配そうに俺を見ていた。

その瞬間頭の上を影がかすめ、手を突き出し足のよつた物を掴む。影が暴れる、凪たちが少し離れるのを確認して手を離し土手に向かい走り出した。

影は上から俺を追いかけて来ている様だつた。

土手に向かい走り抜ける、土手の手前で何かが横から飛び出してきた。

咄嗟に腕を胸の前でクロスさせて直撃は何とか防いだが吹き飛ばされ、土手沿いの金網に激突した。

痛みを堪え土手を駆け上るとすぐに犬の様なものが追いかけてきた。

河川敷の公園の遊具の影に隠れる。

『はあはあはあはあはあ』

既に息が上がつていた。

影はたぶん誰かの使い魔なのだろうこちらを伺つている様だがすぐに攻撃はして来なかつた。

『どうする、どうすればいい』

誰も巻き込むわけに行かず河川敷まで逃げて来たが、俺には打つ手がまつたく無かつた。

上から急降下してくる。

転げ出て何とか防ぐが姿勢を立て直した瞬間、今度は犬の様なものが襲つてくる。

これを手で払いのけ走り出す。

キルシユといくらかの訓練はしていたが2匹の波状攻撃にはまつたく役に立たなかつた。

逃げ回るだけで精一杯で……

そして今度は犬が襲い掛かり逃げると鳥の様なものが襲つてくる。何回か同じ事を繰り返す。

『おかしい、簡単に止めを刺せるはずなのに、なぜそこまでしない。何かを伺うか、試しているのか？ それとも狩を楽しむように弄んでいるのか。ふざけるな』

しかし考へている余裕はなかつた。

そして、体を休ます時間は与えてもらえなかつた。

段々と体力が消耗してくるのを感じていた。

『はあはあはあはあはあはあ……』

呼吸を整えることすら出来ない。焦りだけが増えて行つた。

どれだけ逃げ回つたのだろう体中傷だらけなのがかすり傷程度で大きな怪我は無かつた。

それも相手が本気にしていない為なのだろう。しかし俺の体は限りなく限界に近づいていた。変だ、攻撃の間隔が少し長くなつてきている、「はあはあはあ」と言う自分の息遣いだけが聞えていた。

物陰に隠れて辺りを見回すと何処にも影は見えなかつた。何処かに潜んでこちらを伺つているのだろうか、飛び出せば襲い掛かつてくる事には代わりが無かつた。

その時土手の上から声がした。

『隆羅！ 隆羅！ 何処に居るの？』

海だつた何故ここに。もしかして俺を追いかけて来たのか？

隆羅が凪たちの離れるのを確認して橋に向つて走り出した後に、凪は海の手を握り締めて駅に向つて走つていた。駅はすぐ目の前だつた。

『凪、駄目離して！ 隆羅が隆羅が死んじやう！』

凪の手を振り解いて、海は来た道を走りだしたのだ。

『お姉ちゃん。行っちゃ駄目！』

凪が叫んだが海には届かなかつた。

海の姿が見えなくなり凪はパニックになつた。

『どうしよう。どうしよう。そうだ』

そこで隆羅の言葉を思い出した、潮さんに連絡しようと。すぐに隆羅の携帯で潮に連絡を取る。

『お姉ちゃん、どうしよう兄貴が兄貴が！』

『凪、何があったの？ 落ち着きなさい』

『兄貴とお姉ちゃんが死んじゃつよ……』

凪が泣きじゃくる。

『助けて、早く助けて!』

『凪、良く聞きなさい。あなたも水無月の人間でしょ!』

潮の凜とした力強い声だった。そこで凪は何とか落ち着きを取り戻した。

『凪、いい事。慌てないでゆっくりと状況を説明しなさい。隆羅と海は大丈夫だから』

それは凪を落ち着かせる為に言った言葉だった。

『真っ黒な鳥見たいのに襲われて。兄貴が凪になつて走つていて。兄貴にお姉ちゃんと逃げろつて言われて、駅に向つたけど途中でお姉ちゃんが兄貴を追いかけていたの。どうしよう』

『凪はそこから動いちゃ駄目よ。今、何処に居るの周りには何があるの言いなさい』

『えーと西浦谷駅の近くで大きな道、兄貴はバイパスつて言つてた』

『判つたわ、すぐに行くから決して動いちゃ駄目よ。何かあつたらすぐに連絡しなさ判つたわね』

『うん』

そう返事をして近くの街灯の下で凪は立ち戻へしていた。

状況は最悪だつた。

海を巻き込む訳にはいかないがあのままでは、海が危険だ。

『クソ! どうすればいいんだ』

ただただ焦つていた。

すぐ近くの土手の上で声がした。

『隆羅、そこに居るの?』

その時、影が動く気配を感じた。

『ヤバイ、海が襲われる』

瞬時に海に向かい全力で走つていった。

全身の筋肉が悲鳴を上げる。影が向つてくるのが見えた。

頭の中が真っ白になり体の中で何かが燃えたぎつた。

その瞬間、右腕からパリパリと電気が走り文様が薄く浮かび上がる。

その時、頭の中で声がした『隆羅いけない』文様と電気がスゥーと消えてしまった。

影が海に飛び掛る、それを裏拳でなんとか払い飛ばす。

その瞬間今度は上から鳥が襲い掛かって来た。

避け切れない、海を抱きしめて土手を転げ落ち直ぐに起き上がる影は確認できない。

しかし気配はビンビンを感じていた。

海はガタガタと震えている、開けた所では分が悪すぎる辺りを見て

橋脚まで海の手を掴んで走り出す。

橋脚までたどり着き橋脚を背に海の前に立つた。

ザワザワと周りの空気が震え気配が増えている事に気が付いた一気に力タを付ける気だ。

ジワジワ間合いを詰めてくる気配だけを感じた。

『どうする、どうにかして海だけでも……』

その時、お袋の言葉が脳裏に蘇えった。

『人だけじゃ駄目なの自分も守れない』、きっと哀しい思いをする人が出てくる筈だから。もし万が一何か遭った時には、自分の力を信じなさい。あなたの体の中にも退魔師の力が宿っている、その力がきつとあなたを導き助けてくれるはずよ』

『でもどうすればいいんだ』

『熱くなつてもいい、だけど頭の中はいつもクールでいる、そうすればかならず活路は見出せる』

親父の言葉だった。

後ろで海はガタガタ震えながら泣いている。

『隆羅、隆羅……』

俺の名前を呼びながら。

何も守れない自分に怒りがこみ上げてきた。

そして、深く静かに深呼吸をする体が段々熱くなつて来るのを感じる。

しかし頭の中はとても冷静になつてきた。

そうあの時の時のように、しかし今は少し違う感覺だつた。そして、俺にも退魔師の血が、鬼の血が流れていることをイメージした。

上から急降下して影が襲つてくる。

『うおおおおおお！』

右腕に集中して力を込めて影を払いのける。

炸裂音と共に影が消し飛んだ。

体に力が湧き上がつてくるのを感じる。

右腕には形の違う文様がハツキリ浮き出でていた。

今までの文様は直線的だつたが今は違つ曲線と言つた、そうフレイム。

炎の様な形だつた。

これが俺達の退魔師の力、そして潮さんが言つていた鬼の力を吸收すると言つこと理解した。

犬の様なものが飛び掛つてくる拳を叩きつけるが消えなかつた。

おかしい、もしかして。

また上から襲い掛かつて来くる今度は叩き落すように払いのける。再び消し飛んだ。

掌だ掌で触らないといけないのだ。

行ける所まで行くしか無かつた。

覚悟を決める。

そこから遠く離れたビルの上に人の少年が立つていた。

『ほお、覚醒したか、やはり退魔師の者が。すこし特殊のようだが、たいした事は無いな。まあこんなもんだら、後はあのガキの運しだいか死んでもよし、生き延びるもよし』

闇夜に溶け込むように少年は笑いながら消えた。

数が多い多すぎる。海を背にして戦うのは限界だった。

『クソ、田が霞んで来やがった。はあはあはあはあ……』

それでも向つてくるものには手を向けて消し飛ばした。

苦しくて胸に手を当てシャツを握る何かが手に当たった。

『何だこれ、そうだ「羅刹」だ』

『ドクン』

鼓動が跳ね上がる。

何処からか声が聞える。

『炎、爆』

その瞬間、正面から一斉に飛び掛ってきた。

右腕に力を込めて掌を開き一番近くまで来た影を掴もうとして叫んだ。

『炎。爆！』

声と同じ言葉を叫んだ。

オレンジ色の光、いや炎の様なものが掌から広がり辺り一面を包んだ。

そして、全ての影が燃え尽きた。

何だったんだろう炎では無い、実体が無かつたのだ。

透けるような炎と言ったほうが良いのだろうか。

ハツと我に返り後ろを振り返る。

『もう、大丈夫だからゴメンな』

海の肩に手を置いた瞬間、俺の意識がフードアウトした。

凪は恐怖と孤独に堪えながら立っていた。

兄貴はどうしているのだろうお姉ちゃんは無事なのだろうか。

どのくらい待つたのだろう田の前の道路に車が止まり潮が降りてきた。

『お姉ちゃん！』

凪が走り出し潮さんに抱きついた。

『もう大丈夫よ、安心しなさい。隆羅はビックリして走っていましたの?』

『あの、交差点を右に』

『あの、交差点を右に』

『隆羅の事だから、きっと河川敷に居るはずよ、私達も行きましょう』

『う

嵐の肩を抱きながら車に乗せ、車をUターンさせ隆羅達が居るである河川敷に車を走らせた。

隆羅が気を失い海に持たれかかり崩れ落ちる、そこで海が我に返つた。

『隆羅。隆羅ビックリしたの。ねえ』

そこに潮さんの声が響いた。

『海! 隆羅! 何処なの? 返事をなさい!』

『お姉ちゃん、こっち、隆羅が! 隆羅が!』

潮と嵐が駆けつける。隆羅は気を失っているだけの様だった。

『たぶん力を解放しすぎて一時的に気を失っているだけよ。安心なさい、車に運ぶのを手伝いなさい、早く』

目を開けるとそこは、屋敷の中だった。

『ぶっ倒れて、また、ここか。ふりだしに戻った気分だな』

起き上がり枕元にあつた携帯を見て日付を確認する。

『まだ、翌日か』

右手を見て意識を集中する、文様が浮かび上がってきた。

『今度は、大丈夫みたいだな』

横を見ると海がベッドにもたれて寝ていた。

『ゴメンな、いつもいつも』

起き上がりそつと海を抱き上げ、今まで自分が寝ていたベッドに寝かせる。

顔にかかった前髪を指で優しくはらう。

今は意識を集中しなくとも何処に誰が居るかハッキリ感じる事が出

来た

。隣に居るのは潮さんか？

隣に続くドアを見つめ近づくと中から声がした。

『そんな事は判っているわ。今さらそんな事言われなくても。でも、封印を解いてしまつたらあの子の命は。もう時間があまり無い事も全て分かっているつもり。私達は番人よ鍵の回収が最優先される事も分かっている、でももう少しだけ待つてちょうどだい。最悪の場合は回収後、海の記憶から彼の記憶を消すわ、私の手で……』

まだ話は続いていたが、隆羅は静かに部屋を出て屋敷の庭に向かった。

『やつぱり、そうだよな。もう覚悟は出来ている訳だし。俺の命で海や周りの人達、島の人を守れるならしじょうがねえかあ』

隆羅の覚悟は今、決まった事ではなかつた。

それは幼い頃、茉弥が初めて倒れた時に決めた事だつた。

子どもの頃2人で遊んでいると急に茉弥が気分が悪くなり倒れた。

『ママ、ママ、茉弥が茉弥が』

すぐに2階に沙羅が駆けつけてベッドに寝かせる。

沙羅はこうなる事を知っていたようだと幼い隆羅ながらなんとなく思つた。

『茉弥は心配しなくても大丈夫だから

とだけ言い。すぐに電話をしに下に降りて行つてしまつたのだ。

『茉弥、大丈夫？』

顔を覗きこむとても苦しそうだ。

どうしたらいいんだうと泣きたいのを我慢して必死に考えた。

頭の中におでこをくつけている場面が浮かんできたのだ。

そして同じことを茉弥にした、するとスーと痛みが引くように寝てしまつたのだ。

しばらくすると茉弥が目を覚ました。

『アーヒー、ありがと』

とても優しい笑顔だつた。

その茉弥の笑顔を見た時に願つたのだ。

『Iの笑顔を守らなくちゃ、僕が。神様、もし僕の命で茉弥が助かるなら助けてあげてください』

自分にはどうする事も出来ない、それなら自分の命と引き換えてその願いが叶うのなら、それはどうしようも無い事なのだと。

潮は、電話の途中で気配に気付いた誰かそこに居る。

『ちよつと待つて』

ドアを開け隆羅が寝ている部屋を見る、海がない。

『あの子、何処に行つたのかしら』

ベッドで寝ているのが海だとは気付かなかつた。

『変ね、確かに誰か居た気がしたんだけれども氣のせいかしら』

『しそうがねえなあ』

隆羅は庭で呟いた。しばらくするとキルシユがやつて來た。

『お前、もう体は大丈夫なのか?』

『ああ、大丈夫だボコボコにされたが、跡形も無く消してやつたぞ』

『お前だけに話して……いや、俺の独り言だと思つて聞いてくれ。

俺は子どもの頃から大切なものを守るために、この命と引き換えて良いと思つていた。それは今も変わらない。でもお袋に言われたよ。人を守るだけじゃ駄目なんだつて自分も守れないと必ず悲しむ人がいるからつて。でもさあ、世の中にはどうしようもない事つてやつぱりある訳だ。辛い事だけれど俺は海を命がけで守りたいと思つていい。もし、それが俺の力で出来ないのなら、俺はこの命を潮さんに差し出すつもりだ。このベタレの命で世界の平和が買えるなら安いもんだる』

キルシユは思った。

隆羅がいつもあんな無茶苦茶な事が出来るのは、愛する者を守る為なら自分の事などどうなつても構わないと思つてゐる事を。

『お前が居なくなつたら海はどうするのだ?』

『判つてくれとは言えないが。今の俺じゃどうする事も出来ないんだ。俺だつてずっと海と一緒に居たい。でも、どちらかを選ばなければいけない時、お前ならどちらを選ぶ』

ギコツと握り締めた隆羅の拳が震えていた。

『そうだな、判つた』

キルシユはそれ以上何も言わなかつた、隆羅が死を覚悟している事が痛いほど良く判つたからだ。

海が目を覚ました、とても優しく温かい物に包まれていたような気がする。

起き上がると隆羅が寝ていたベッドだつた、ほのかに隆羅の匂いがした。

『隆羅、隆羅ビビ?』

慌てて部屋を見渡す誰も居なかつた。

潮さんが隣の部屋から入つてきた。

『海、どうしたの? 何故あなたがそこに寝てこられるの?』

『分からぬ。私、隆羅を探してくる』

海が部屋を出て外を見ると窓から、隆羅とキルシユが笑つて話しているのが見えた。

『タあ・力あ・ラあ』

『よつ、海。怖い顔してどうした』

『隆羅の大バカ野郎!...』

海の渾身の右ストレートが顔にヒットした。

『痛いつて、何するんだよ』

海の顔を見ると今にも泣き出しちゃうだつた。

茉弥にしてやるよつておでこにおでこをくつ付ける。

『何、泣きそうな顔をしてやがるんだ海は』

少しおでこを離しそのままぶつけると鈍い音がする。

『痛いよ』

『さつきのお返しだ。』

海のおでこにキスをして抱きしめた。

『ゴメンな。いつも、いつも心配かけて』

『うん。』

海が俺に跳び付いてバランスを崩し2人は芝の上に倒れた。

『ねえ、隆羅、洋服汚れちゃった。ゴメンね。』

『いいさ、洗つて黙目なら、また今度一緒に買いに行こう。』

『うん。』

2人は大の字になつて手を握り、空を見上げていた。

『綺麗だな。海。』

『うん、それに気持ち良いね。』

『ああ。』

冷たい風が2人の頬を撫でた。
キルシユも空を見上げた。

その光景を潮は哀しそうな顔で2人を見つめていた。

2人共、助けられる方法は無いが。

もし、あの話を隆羅に聞かれたとしたら隆羅がどうするかも分かっていた。

隆羅にとつてはどちらを選択しても死の宣告と同じ事なのだと。

今年も、もう残すところ僅かだったが、五月先輩と俺は忙殺されていた。

『先輩。 そろそろ俺達ヤバく無いですか』

『如月もそう思うか』

『ええ、かなり来ていると……』

『そうだな。俺も来ていると思うが、そろそろなのかあ』

『多少は、何か出るんでしょうね』

『ああ、考えておくよ。売り上げはウナギ登りだしな』

『ウナギと言ひより、龍みたいですね』

『ああ、そうだな。あの看板のお陰だな』

『でも、あの看板でか過ぎじゃないですか、今に押し潰されますよ』

『如月そんな事言つてると殴られるぞ』

『だつて、あのやたらカイ看板のせいで、俺達潰れそなんですよ』

『それもそうだな』

『オーダー入りま～す』

透通るような声がする。看板の声だつた。

『ハイ』

『あい』

それは、冬が近づく11月の中いろいろの1本の電話から始まった。

『キサか、お前、今どこで仕事しているんだ?』

『浜木町から、4、5分の所だけどなんの用だ、スギ』

『今から、そっちに行くから詳しい場所を教えてくれ』
スギこと3バカの杉田は外回りの仕事をしていた。しばらくしてスギが店に入ってきた。

『キサ、すまんが何が、とりあえず食わしてくれ、忙しくって飯食う暇も無いんだよ』

ランチ終了間際だったが快く了承した。

『本当に、お前ナイスな場所で働いているな、これはきっと神の思し召しだなきっと。俺、この先の会社でで仕事しているんだが、これが終つてから仕事手伝つてくれ。2週間限定・週2～3日・1日1～2時間・帰りはタク送、いいな』

本当に昔から変わらない奴だった。

『しかし、お前の会社、今どきタク送なんて景気が良いなあ』

『おうよ、なんてつたつてあの、天下の「水神コンツェルン」の傘下だからな』

今、聞き覚えのある会社名が出てきたが氣のせいか、何で俺の周りつてこんななんなんだ。

多少と言うか、かなり強引だがこれからの時期は何かと必要かと思ひ了承した。

何でも簡単な仕分け作業と聞いていたのだが、いざ始まつてみるととんでもない代物だった。

仕分けは簡単なのが、仕分ける荷物が過激なくらい重いのだ。

とんでもなくキツイ仕事だったのだ。

アパートへ戻ると体を動かす事さえ出来なかつた。

そして、水無月邸でも大変な事が起きていた。

『潮お姉ちゃん。もう嫌、何とかして』

『あら、厭。そんなに怒つてどうしたの』

『だつて、お姉ちゃんが兄貴に会えないせいでイライラしてすぐ怒るんだもん』

『困つたものね、海もどうしたものかしら』

『大体、兄貴がいけないんだよ。すぐになんでも安請け合ひするからへタレのくせに。それに、お姉ちゃんもお姉ちゃんよ、そんなに会いたいのなら兄貴の店にでも行つて会つてくれば良いんだよ』

『あら、厭。良い事言つじやない、その手があつたわね』

スギの手伝いも残り半分という所で、その日もフラフラで仕事に向かつた。

『ちわーす』

『如月、ちゃんと挨拶をしろ!』

『おはようす』

『仕方の無い奴だなまつたく。紹介しよう、新しいバイトの海さんだ。ホールを担当してもらう宜しくな。今日からうちの看板娘だ』自分目の目を疑つた。

そこに立つてているのは白いスニーカーにキャメル色のキュロットを履き、お店ロゴ入りの黒いTシャツを着てデニムのショートエプロンをつけて、頭にバンダナを巻いている紛れも無く海本人なのだ。

『先輩、何かのもの凄い嫌がらせですか?』

『いや、年末に向けてバイトが欲しいと思っていたら、ちょうど働きたいと電話があつてな管理人さんなら大歓迎だよな。如月』

『はあー。すいません、先輩ちょっとといいでですか。海、ちょっとこつちに来い』

海の手を引っ張り店の外に出る。

『いいか、潮さんの仕事関係の話は絶対にするなよ、大騒ぎになるから。いいな』

『えつ? 何でどうして?』

『どうしてもだ、いいな』

海に念を押す。

『うん、分かった』

『先輩、分かりましたバイトの件、OKです』

店内に戻り言うと海が『ありがとう、隆羅』と腕に抱きついてきた。

『海、それもここでは禁止だ。いいな』

少し強い口調で言うと海が膨れつ面をした。

『もう、隆羅のバカ、あれも駄目、これも駄目つて嫌!』

『海が怒つて殴りかかつてくる。その腕を掴み海の目を見る。

『いいか海、ここは職場だ。OFFじゃなくてONだ。今は俺がお前の先輩だ。それが嫌なら仕事に来なくていい。それと俺の事は「さん」付けか「先輩」を付けて呼ぶ事。分かったな』

『分かりました、隆羅先輩』

俺のことを海が恨めしそうに睨みつける。

『如月、お前達って本当は……』

『先輩の思つている通りです。海と付き合つていますが何か問題でも?』

『いや、別に。まあ如月なら、そういう所は大丈夫なのはよく知っているから。でも少し言い過ぎじゃないか? もうちょっと優しくな』

『いいえ。ONはON、OFFはOFFですか』

『しかし、如月のそんな所は昔から変わらないな。まあ、だから俺はお前をここに呼んだんだけどな。海ちゃんに仕事の段取り教えるから、如月は先に準備してくれ』

『はい』

先輩に言われて俺はキッチンに向かい仕込みと準備を始める。

『海ちゃん』「メンな。如月つて仕事になるとあんな風になっちゃうんだよ。普段はヘナチョコのくせに。そうそう、アイツとは島のホテルで1年くらい一緒に仕事していたんだが。そこで、アイツまだ若いのにバイトのまとめ役みたいな事していたんだよ。かなり人気者だったんだぞアイツはOFFでは皆を連れて海に行つたり、部屋に呼んで飲み会したりしてな。でもONでは厳しかった。恋人同士でイチャついていると怒鳴りとばしていたからな。バイトのシフト表はアイツに任せてあつたんだ。他の奴じゃ絶対に嫌だと皆が言つてな。何でだと思う? 恋人未満の奴らもアイツのシフトだと恋人同士になれるんだよ。どんなに秘密にしていてもね。もちろん恋人同士は出来るだけ同じ休みだつたけどな。皆の事をよく見てるんだ

俺なんか何回驚かされたか。厳しくって辞めて行く奴もいたけどそれ以上に人気者だった。恋人同士になり結婚した奴なんて何組いた事か。でも自分の事はいつも後回しで、自分の事となると全然二ブチンで。後から聞いた話なんだが如月と結婚したいと言っていた女の子もいたくらいだ。海ちゃんもここでは我慢してくれ。あれがアイツのスタンダードなんだ』

『先輩、準備出来ましたよ』

『おお、サンキュー今、行く。仕事はいたって簡単、お客様を案内して水を出してオーダーを聞いて、料理を運ぶだけ。レジは俺がやるから分からぬ事は聞いてくれるかな。それと、挨拶は笑顔で元気良くなOKかな。俺の事は、そうオーナーでいいや』

『はい、分かりました宜しくお願ひします』

海は少し恥ずかしかった、隆羅と一緒に仕事が出来るのが嬉しくつて浮かれていた事を。

『ランチオープンするぞ』

『はいよ』

『ハーハー』

海は自然に笑顔になつていた。

それは今までこんな隆羅を見た事が無かつたからだ。

『オーダー入ります』

『はいよ』

オーダーを見てとても手際よく料理を作り始める。

綺麗に盛り付けをして『5番ヨロシク』とカウンターに出す。

それを海がテーブルに運ぶ。

『いらっしゃいませ』

『ありがとうございました』

大きな声と笑顔で挨拶をする。

それは『ぐ当たり前な事をしているだけかもしれないのだけれど、

とても新鮮で隆羅が凄く大人に見えたのだ。

そしてランチタイムが終わり休憩時間に入る。

隆羅が3人分の賄を有り合せの物で作り食べる。

その賄いは有り合わせの物で作ったのに店で出せるくらいの美味しい食事だった。

隆羅は、あつとこう間に食べ終わり店内のイスで横になり寝てしまつた。

『オーナー。隆羅つていつもこんな感じなんですか』

『んん、最近はなんだか疲れているみたいだな。どうせまたやらなくてもいい仕事でも受けたんだろう、こいつ断るという事知らない奴だからな』

そこには海がまだ知らない隆羅がいっぽい居たのだ。

夜の居酒屋タイムが始まる。隆羅も海もまぐるしく動いていた。しかし隆羅の海への指示はいつも的確ですばやかつた。

そして海が失敗をするとすぐに来てくれてフォローしてくれる。自分が何の作業をしている時も店内を常に見回して、いつも見守つていてくれるている。

とても優しいだけどしつかりした目で、それはとても安心できた。隆羅が厳しいけれど人気が有った理由が分かる気がした。そして1日の仕事が終わった。

『お先ず』

『お先に失礼します』

店から出て狭い階段を下りる。

階段から降りると『じゃあ、帰るか』と言つて手を出すいつも隆羅がそこに居た。

『うん』

海の手を握り歩きだした。

『今日は疲れたか』

『うん、少しだけ』

『そうか、無理しないで頑張れよ』

『隆羅。隆羅つて凄いんだね』

『何が凄いんだ』

『仕事、大人つて感じかな』

『大人つて、俺は大人だぞ』

『違う。違う大人』

『はあ？ 俺は普通の事を普通にしているだけだ』

『ほら、やっぱり大人じやん』

『だから、俺は大人だつて』

『もう、バカ・バカ・バカ隆羅』

『バカ言うな』

こんなお馬鹿な会話をしながら山野線で渋谷に向かう。

乗り換えて西横線に乗る、西横線は渋谷が始発の為に席に座れた。席に着き電車が動き出すとすぐに隆羅は腕を組んで頭を海の肩に乗せて眠ってしまった。

『隆羅つて毎日こんな事していたんだ。こんなに大変なのに私たちにいつも休みの日は付き合つてくれる。凄いな隆羅つて。ありがとう』

隆羅の可愛い寝顔を見て微笑んだ。

隆羅が目を覚ますと海も疲れて寝ていて終着の横浜だった、慌てて海を起こし折り返しの電車に乗る。戻りの電車では大喧嘩だった。

水無月家で今度は不穏な動きが……

『潮お姉ちゃん。お姉ちゃん機嫌が直つたのは良いけれど、毎日、気持ち悪いくらいにこの機嫌なんだけどそんなに仕事つて楽しいのかなあ』

『それは、だつて因。朝から晩まで大好きな大好きなターチャンと一緒に居られるのよ。楽しくない訳ないじゃない』

『でもさあ、初出勤の翌日は、怒つている様にしか見えなかつたけど「お姉ちゃんの仕事の話しちゃ駄目、隆羅にさわっちゃ駄目。あれもこれも駄目つて隆羅のバカ」てぶつぶつ言つてたよ』

『そうね、海の仕事振りも一度見てみたいし、今度覗きに行つて見ましょうか。ターチャンの仕事している姿もついでに見にね』
そして、別の所でも……

この看板娘の噂は瞬く間に広がつていった。

スギの仕事の手伝いも終わり、体力的にも余裕が出来ている。海もだいぶ仕事に慣れてきているようだつた。

しかし、その日はいつに無く暇だつた。

カウンターで海と先輩と3人で雑談をしていると、入り口の自動ドアが開く。

『いらっしゃいませ』

そこに立つていたのは、二三二四顔の茉弥とお袋がこちらを見て手を振つていた。

近づいていき茉弥の頭を撫でながら『いらっしゃい、良く来たな』と声を掛けた。

『兄さま。兄さま』

相変わらず茉弥が腕にしがみついてきた。席に案内する。

『先輩、紹介します。うちの母と妹の茉弥です。で、お袋。』

が島でお世話になつた五月先輩だ』

『隆羅の母です。隆羅の事を宜しくお願ひします』

お袋が立ち上がり挨拶をした。海も茉弥の所に言つてはしゃいでいた。

海がふつと俺の視線に気付き俺の顔を伺う笑顔で頷いた。

オーダーを受け料理を作る、ずーと茉弥がこちらを嬉しそうに見ていた。

海が料理を出すと美味しそうに食べている。

また、自動ドアが開いた。

『いらっしゃいま……』

入り口を見て俺は固まつた。

入り口には大きいツインテールと小さいツインテールが立つていたのだ。

『お姉ちゃん、凪、びづしたの？』

海が駆け寄つた。そう小さなツインテールは凪で、大きなツインテールはメガネをしていない潮さんだった。

潮さんは変装のつもりなのだろうか。

お袋と茉弥の方を見た時にお袋と目が合つた。

俺は人差し指を口に当てて合図を送つた。

お袋が判つてゐるわと微笑みをする。天然でボケボケのお袋だが一応常識人だつた。

『潮さん、お久しぶりです』

お袋は潮さんと会つのは夏休みの海以来なのだ。

『凪ちゃん、こつちこつち』

茉弥が手招きをしていた。

『如月さん、お久しぶりです』

潮さんも挨拶をした。凪は照れながら茉弥の隣に座つて楽しそうにおしゃべりを始めていた。

『オーナー、私のお姉ちゃんと妹の凪です。お姉ちゃん、じゅりりが

オーナーの五月さんよ』

海が紹介すると、潮さんは微笑みながら軽く会釀するだけだった。

俺は何の厄日だと思ったが取りあえず胸を撫でおろした。

潮さんもお袋の隣に座り何かを楽しそうに話始めた。

海がオーダーを取つてくる。

『オーダー入ります』

『はいよ』

俺が返事をした。そこへ先輩が寄つてきてた。

『おい如月。あの海むちゃんのお姉さんつて、何処かで見た事がある気がするのだが』

『先輩、気のせいですよ、気のせい。それより邪魔です、仕事。仕事』

誤魔化した。いつもの様に料理を作り始めると今度は4人の視線が突き刺さつた。

いやあ参つた。

『料理あがつたよ。ヨロシク』

潮さんたちと話していた海に声を掛ける。

『はーい』

海が返事をして嬉しそうにテーブルに運んでいた。

照れ臭くつてしまふがなかつたのだ。

親しい人に仕事場を見られる事が今まで無かつたからだ。カウンターの中で片付けをする事にした。

嵐がいつにもまして輝いた目で隆羅を見ていた。

それは嬉しさじやなくそう憧れの眼差しだつた。

『あらあら、困つたものね。ターチさんは、また旗立てちゃつて』

嵐の顔を見た潮さんが心の中で呟いていた。

4人はしばらく話をしていたが他のお客様が入りだしたので席をたつた。

『ご馳走様でした』

そして潮さんがカウンターにやつて来て俺に小声で言つた。

『タ一ちゃん、あんまり旗立てちや駄目よ。このへ・タ・レ君』
訳のわからない事を言つてきた。

『旗つてナンの事ですか?』

『もう、タ一ちゃんは二ブチンなんだから』

先輩と同じような事を言い出て行つた。

『ありがとうございました』

そしてこの4人の出会いが俺をとんでもない事に巻き込む事など知るはずも無かつた。

看板娘の客寄せ効果は絶大だった。

100人の男がいれば100人ともが振り返るであろう綺麗で可愛い海の事だ。

そして俺と先輩は本当に殺されかけない忙殺に飲み込まれて行つた。

街はクリスマスカラーに包まれ始める、あちらこちらではイルミネーションが輝きクリスマスソングが流れ恋人達は楽しそうに歩き、街全体がこうウキウキと浮かれているようであった。

そんな日曜日、俺は一人で都内をブラブラしていた。

海と風は、この頃暇さえあれば部屋にこもって何かをしているらしいと潮さんが言つていた。

今日も誘つたのだが用事があるからといそと部屋に戻つてしまつた。

まあある意味、毎日朝から晩まで一緒に居る訳だから日曜くらいは1人でゆっくりも良いかと思い出て來たのだ。

実家に居る時から暇さえあれば何をするでもなく都内をぶらついていたので、渋谷・原宿・新宿・池袋、若者が集まる所なら大体案内できる程度に知り尽くしていた。

1人だったので少し裏道をぶらつく事にする、しばらく歩くとそこ

だけ昔のアーロップにタイムスリップしたかのような小さな店がつた。

アンティーク風の木の看板に「Lunch」^{ルナ}と書いてある、ショーウィンドウから中を覗くと小物やジュエリーの店らしかった。ショーウィンドーの中を見ているとペアのブレスレットに目が留まつたシルバーで出来ていて細身のプレートに小さなブルーダイヤが埋め込まれている。

煩くないローンがついてネームオーダー受けますの札がついていた。

海がこのブレスレットをしているイメージが浮かんできた。

実はクリスマスプレゼントを何にするか考えながら歩いていたのだ。

数日前、仕事が終わつた後に先輩に呼ばれた。

海が来てからと言つもの毎日のようにお客様が押し寄せ、忙殺ビリヤ
じやない忙しさが続いていた。

『これは、ボーナスと言つか中身は寸志程度だが受け取つてくれ売
り上げも上々だしな。それとクリスマスイヴは休んでいいぞ2人で
ゆつくり過ごすといい。俺からのクリスマスプレゼントだと思つて
な。店の方はうちの奥さんに頼んであるから大丈夫だ。夜も常連の
お客様の予約だけだしな』

ボーナスは有り難く頂き、休みも遠慮なく取らせて貰うことにした。
俺が来る前までは先輩と奥さんの2人で回していくのだから大丈夫
なのだろう。

そして、今日の目的のプレゼント探しに出てきた。

まあ探すと言つてもただブラブラするだけなのだけど。

茉弥と皿への誕生日プレゼントと同じでインスピレーションが大切
で。

ペアのブレスレットを頼みネームをオーダーして店から出ようとし
て、もう一つ目に付いた物があった。

それはペンダントにもなるグラスホルダーなのだがとてもシックで落ち着いている、これを潮さんにどうかと思った。

まあ潮さんなら何でも持っている気はするのだがようは心だらう。綺麗にラッピングしてもらいプレスレットと一緒に取りに来る事を告げて店を後にした。

その後はデパート周りをしていった。

つばがゆるくウエーブした可愛らしい白い帽子が目に止まつた、茉弥に似合いそうだとと思い即決し。

その向こうには俺が長野の時に被つていた派手なオレンジ色のキャップに良く似たキャップがあつた。

それを皿のプレゼントに選んだ。

お袋には何を送るか悩んでいた。お袋の趣味は親父以外には分からぬ。しばらく歩いていると暖かそうなベージュのストールが目に入ってきた、カシミア入りでいい感じだったので購入し包んでもらう。

だいぶ財布の方は飛んで行きそつなくらい軽くなつたがこの為にスギの仕事の手伝いもしたのだから。

そして残るのは、海と2人でどう過ごすかという事だけだったのが、俺達の知らない所でかなり前に有無を言わせず決定されてしまつていた。

それは浜木町の俺と海の仕事先にあの4人が鉢合わせした日……

『母様、もうすぐクリスマスね』

茉弥が楽しそうにお袋に言つた。

『そうね茉弥、今年はタカちゃんにケーキ作つてもらつてパーティーしようね』

『うん、母様。茉弥、大、大賛成!』

茉弥が嬉しそうにバンザイをして飛び跳ねた。

『それなら、もし良ければ私達とみんなでクリスマスパーティーをしませんか?』

『潮さんの提案だつた。』

『でも、うちは狭いから大人数は無理ですし』

『一般ピープルの家なんてそんなものである。』

『それなら、凪達の家でやればいいじゃん』

『それもそうね』

『えつ？ お邪魔していいんですか。まあ私もお屋敷は見てみたい

ですけれど』

お袋も中流家庭だつた。

『じゃあ、潮お姉ちゃん決定ね』

『それじゃ、ターちゃんにケーキを作つてもらつて、ターちゃんに料理準備してもらつて、ターちゃんに頑張つてもらつ。それでいいかしら』

『大賛成！！』

声がそろつたのである。

それを知つたのはプレゼントを買つて帰つた後の事だつた。

俺は海とイヴの予定を決めるべく海の部屋に向かっていた。

ドアをノックして『海。居るか、開けるぞ』と言つてドタン、バタン、ガタンと凄い音がする。

『駄目、今開けちゃ駄目！』

心配になりノブに手を掛けると海が顔を出した、とても慌てている様子だった。

『凄い音がしたが大丈夫なのか？』

『だ、大丈夫だから。何の用なの？』

『いや、イヴの予定を話したくてな』

なんだか自分自身がとても悪い事をしている様な気分になつていた。

『じゃ、あつちで話しあう』

手を引つ張られて応接間に連れていかれた。

何だったんだろう、年末だしまあ部屋の大掃除でもしていたのだろうと思つた。

しばらく海と他愛のない話をしていると潮さんが現れた。

『あら、ちょうど良い所に居るじゃない。ラブラブカッフルが

『バカッフルみたいな言い方やめて下さい』

嫌な予感がした。

『ターチちゃんと海はイヴの日は仕事なの？』

『いえ、先輩に海とゆつくりする様にと休みを頂きました』

『2人でゆつくりね。でも『メンなさいターチちゃんにお願いがある

の』

『何ですかそのお願いって？ 僕に出来る事なら出来る限りはしますけど』

『ターチちゃんにしか出来ないお願いなの。実はイヴの日いつでパーティーをする事になつてケーキや料理を準備してもらいたいの』

『無理ですね』

『でも、そのパーティーには、沙羅さんや茉弥ちゃんも参加するんだけれど。ね、お願い。この間、4人であつた時に決定しちやつたの。お願いよ』

『それはお願いと言つんじゃなくて、命令か強制と言つんじゃないですか?』

『それは違うわ。お願いと言つ事後承諾よ』

『馬鹿馬鹿しい』

『海も、愛しいターちゃんの美味しいケーキや美味しい料理食べたいわよね』

『うん』

キラキラとした嬉しそうな目で俺を見る。

『ああ。もう、しうがねえなあ。やりますやらせて頂きます』

『じゃ決まりね、ヨロシク。ターちゃん大好きよ』

『それは、結構ですから』

毎年クリスマスは、茉弥とお袋と俺の3人だけでしていた。

俺が居ないここ数年は2人でしていたのだろう。

そんな事を考える、茉弥もみんなとパーティーは楽しみにしている筈だ。

俺と海の2人の都合だけで、無下に断る事など決して出来る筈も無いわけで。

茉弥や凪の事を考えればこそこそだった。

それに海にあんなに嬉しそうな顔をされて断る事の出来る男など居ないだろう。

イヴの前夜、仕事が終わってから俺は翌日の仕込みの為、水無月家のキッチンに居た。

メニューは頭の中で大体決まっている、レシピさえ解ればどんな料理でも作りはするが料理を基本から覚えた訳ではないので殆どがオリジナル料理だった。

それにクリスマスの料理と言つても茉弥の為にお袋と相談しながら

作っていたのでお子様メニューばかりなのだが、だからと言つて決して手抜きではない。

取りあえずケーキとサンドイッチの仕込みだけ前日に終わらす予定でキッチンに立っていた。

ケーキは2種類。

1つはココアのスポンジでラズベリーのムースをサンドしてチョコレートコーティングしたもの、後で粉砂糖でデコレーションをする。そしてもう1つは定番のブッシュドウノエル作り方は色々あるがこちらもチョコレートクリームで、茉弥と凪はチョコレート系がお好みらしい。その為のチョイスである。

サンドイッチは、卵やハム、キューリなどの定番中の定番だ。

予定通り3時間弱くらいで仕込が終わつた、家のキッチンではこうは行かない。

ここはちょっとしたレストラン並みの設備がある、水無月家のキッチンならではだった。

そしてここは、あの日どんな事をしてでも海を守ると決めた2人でリゾットを食べた場所でもあつた。

あの時と同じようにキッチンの床に座り壁にもたれて何も考えずに休んでいると、誰かがキッチンに入つてくる気配がした。見上げると海だつた。

『どうした海？ こんな時間に』

『コーヒーが飲みたくなつて部屋から出たらキッチンに明かりが点いていたから、まだ隆羅がいるのかなつて』

手には温かいコーヒーが入つたカップが2つあつた。

海が俺の横に座り『コーヒー飲む？』とカップを出した。

『ああ、サンキューな。なあ、海。憶えているか？ あの時もこんな感じだつたなあ。海がグシュグシュでリゾット食べてたよな』

『だつてしまふがいいじゃん、あれは、だつて隆羅が』

『そうだな、ゴメンな変な事言つて』

しばらく沈黙が流れた。

俺は、あの潮さんの電話の言葉を考えていた。

あと、どれ位こうして海と一緒に居られるのだろう時間はどの位残されているのだろう。

俺が居なくなった時、海は今までの俺との思い出を全て忘れてしまうのだろうか。

すると海が切なそうな声で話しかけてきた。

『隆羅、何でそんな哀しそうな目をしているの？ そんな目をお願いだからしないで。悩みがあるのなら話してくれないかな、2人でなんとかしよう。お願ひ』

海の表情はとても揺れていた。

『大丈夫だ、俺は海とこれからもずっと一緒にだ』

笑つて答えた。

『うん、私も隆羅とずっと一緒にだよ』

『そうだな、明日も朝から準備だ、もう寝るぞ』

立ち上がり2人でキッチンを後にした。

玄関まで送ると言われたが1人で大丈夫だと断り、海のおでこに軽くキッスをして『おやすみ』と別れた。

今さら悩んでも仕方が無い、俺は全力で海を守る。

どうしようもない事にも全力でぶつかるしか今の俺には出来ないのだから。

覚悟は出来ている筈だった。

翌朝は準備に追われていた。

大根を半分くらいに切りアルミホイルを巻いて皿に立てる。

そこにピックにさしたミートボールやプチトマト、チーズなどをさしてツリーに見立て周りには鶏のから揚げを盛り付ける。

あとは、鶏の骨付きも肉のロースト・トマトソース煮、パスタを数種類、明太子とクリームチーズのディップをクラッカーにのせる。ケーキの丸型にカレーピラフを敷き詰めそこに型と同じ大きさに焼いたハンバーグを入れ、またカレーピラフを敷き少し押し固め落ち

着かしてからお皿に型から外し、ケーキの様に錦糸玉子や一ノジンのグラッセやグリーンピースなどで「コレーションする。

あとは一口おにぎりながらこれは海が手伝つと言つてくれたのでやつてもらつている。

小さめのラップにふりかけなどで色々な味を付けたご飯を巾着の様に絞りボンをするいたつて簡単なのだが数があると結構見栄えがする、それに手を汚さずに食べられる。

サラダ系もと思っていたら、お袋から電話がありタカちゃんだけじや大変だらうから何か作つて持つていくと言つたので打ち合わせをしてサラダ系をお願いをした。

サラダならかさ張るが重たくは無いはずだし、潮さんが車で迎えに行くと言つてくれたので問題は無いだろつ。

凪と潮さんは会場のセッティングをしている様だつた。

パーティーは夕方からだつた。

それがあわせて準備していたが少し時間が余つたので1人で庭を散歩していた。

そしてキルシユに会つた。

『お前これからどうするのだ?』

『どうするつて何がだよ』

『お前には、覚悟が出来ているのだろう』

『ああ、でも誰にもこれから的事なんて分からぬじゃないか』

『そなんなんだが』

『なあ、キルシユ。誰しも先が見えず不安になつたり、未来に期待したりして悩みながら生きているんだ。でも、たぶん何とかなるもんなんだ、どんな事でもな。ナンクルナイサーを気楽に行こうぜ』

『そんなんのなの?』

『そんなもんだろ人生つてやつは、今まで何とかならなかつた事なんて無いじゃないか。そつだろ』

『そつだな』

『でも、二ライカナイやパイパティローマ・ハイドナンが在つたらいいのになあ』

『なんなんだそれ』

『沖縄の昔からの言い伝えで何処かにあると言われてゐる理想郷か樂園みたいなものかな』

『そうか、樂園かそうだな』

『ああ、ヤバイ時間だ。また後からな』

クリスマス・4

クリスマスパーティーが始まった。

まずは乾杯から、大人はシャンパン子どもはシャンメリ―で乾杯をする。

『乾杯!』

『メリークリスマス!』

パン、パン、パン、パン。クラッカーがなった。

楽しいクリスマスパーティーになりそうだ。

プレゼント交換がはじまた。

最初は凪と茉弥だった。

凪から茉弥へは手編みの綺麗なブルーのマフラー、なにやら内緒話をしているが。茉弥から凪にはちょっと不恰好の手編みのミトン手袋だ。

凪から俺には茉弥とおそろいのマフラーだった。

『兄さまとお揃い』と喜んで茉弥がマフラーをして走り回っていた。

そして俺から凪にはあの派手なオレンジのキャップだ。

兄貴とお揃いみたいで格好良いと大喜びして被つて『どう似合つ』と皆に見せた。

凪からお袋へは、とても暖かそうな手袋だ、海と一緒に買つたらしい。

お袋から凪と海へはおそろいの黒のタートルネックのセータ―だった。

茉弥から海へは、凪とおそろいのちよつと不恰好な手編みの手袋だ。

『とても、暖かそう茉弥ちゃんありがとうね』

海が茉弥の頭を撫でていた。茉弥から俺には黒の皮の手袋だった。何でも海と凪に編んでいたら俺のを編む時間がなくなってしまったらしい。

お袋から俺には、『一トタイプの膝位まである大き目のダウンの』

ートだつた。

俺からお袋にはカシミア入りのベージュのストールを、お袋と茉弥は家で交換して来たらしい。

何を交換したのかは秘密と教えてくれなかつた。

水無月家の面々は毎年恒例で皆で後から買いに行くとの事だつた。

俺から潮さんにはグラスホルダーをプレゼントする。

『あら、ターチャン。中々のセンスしているわね』

潮さんから俺には、黒いバスカードの様な物だつた。

『潮さんこれつて?』

『そのカードがあれば日本中のテーマパークや遊園地なんかに入れるわよ。海といつぱいデートしてきてね』

とウインクした。

『ついでだからこつちもあげちゃうと』

シルバーのカードを出した。

『有料道路フリーバスよ。またどこか遠くに行つてもらひ事あるかもしれないし、今日は大盤振る舞いよ』

いや遠くつてありえないし。

俺は日本中が水神コンツェルンに乗つ取られている気がして仕方が無かつた。

潮さんから茉弥には、クリスタルで彩られた蝶の形のブローチだつた。

そしてもう一つ潮さんに預けたプレゼントがあつた。

『これをあの子に?』

潮さんは笑つていた。

『似合ひますよたぶん』

『ターチャンそんな事を聞かれたらあの子怒るわよ』

それはキルシュへのクリスマスプレゼントで中身は赤い首輪だつた。

そして今日のメインイベントばかりに、みんなの視線が俺と海に集ま

つた。

『兄貴とお姉ちゃんつてどこまで進んだの?』
なんて事いきなり凪の奴が聞いてきやがつた。

潮さんとお袋が『全部吐け』やら『A・B・C』などと離し立てる、
茉弥は意味も分からずはしゃいでいた。

顔を見合させて真つ赤になつていると『もう、イチャつくなのは後で
ね、夜はまだこれからだからね』と凪が言つと『ママも詳しく聞き
たいなあ』などとお袋までもが言いやがつた。

『まあ、今日は強引に2人を巻き込んだし、後でいくらでもラブラ
ブしてね。チユツ』

潮さんは投げキッスをしていた。

こうなる事は分かりきつていたが流石に恥ずかしかつた。

『ああ、もう料理が冷めるだろつ。早く食べろ』

苦し紛れに言つたが効果はなかつた。

実は海が準備の手伝いをしている時に『隆羅。少しだけ時間を作つ
てね、2人だけの時に渡したいから』と言つてきたのだ。
それは願つても無い事だつた、俺としても2人だけの時に渡したか
つたからだ。

パーティーは大盛況だつた。

凪と茉弥ははしゃぎ回つてゐるし。

潮さんとお袋は楽しそうに会話をしていた。

2人が悪巧みを考えていない事を祈るばかりだつた。

海はとても嬉しそうな顔でみんなを見ていた。

しばらくすると茉弥が耳元で『兄さま、お膝抱っこ』と言つてきた。

『ん、いいぞ』

茉弥を抱き上げ左膝に乗せ後ろから抱える。

『えへへ、兄さまのお膝』

嬉しそうに体を預けてきた。

凪が羨ましそうに見ていたが恥ずかしくつて自分もとは言えないの

だろう。

『 凪もか？ ドンと来い』

右膝を叩く。凪が嬉しそうに走ってきた。

凪を抱き上げて右膝に乗せる。

『 ふふ、温かいね』と茉弥と顔を合わせる。

2人の温もりが伝わってきた。

『 あら、本当の双子ちゃんみたいだわね』

お袋が嬉しそうに見ていた。

『 ターちゃんはモテモテね。海、ターちゃん取られちゃうわよ』

潮さんが「冗談を言つたが海は何も言わずにただ微笑んでいた。

それからも盛り上がつたが茉弥は眠そうにしていた。凪に頼んで隣の部屋で寝かせてもらつ事にする。

お袋が凪の案内で茉弥を連れて出て行つた。

しばらくするとお袋だけが戻つてきた。

『 あれ、凪はどうした？』

凪がまだ寝るような時間じゃなかつたので聞いてみた。

『 うふふ、茉弥と一緒にベッドに入つて、お話していたら2人とも寝ちゃつたわ』

はしゃぎ回つて疲れたのだろう。

しばらく4人で話をしていた、話の内容は殆ど俺と海の事で酒の肴にされているだけだつた。

そのうち潮さんとお袋が2人で話しこみだした。

『 なあ、海。楽しいなこんなパーティー』

『 うん、そうだね。来年も一緒にパーティーしようね』

『 ああ、そうだな』

少し心が痛かつた。ドアがスーと開きキルシユが入つてきた、腹でも減つたのだろう。

潮さんに鶏肉をほぐして貰い食べてだした。

『 大きな猫ちゃんね、可愛い。あら、この子使い魔ちゃんね』

沙羅がキルシユを撫でながら言つた。

『えつ？ 判るんですか』
海が驚いていた。

『ええ、これくらいならね。海ちゃんも知っていると思うけれど、私も退魔師の一族の端くれだからね。あまり力は無いけれど。この子の名前はなんて言いつの』

『キルシユです』

『キルシユちゃんかケーキみたいな名前ね。なんだか懐かしい匂いがするわ。もしかしてキルシユちゃんは母に会つた事あるのかしら母の匂いがする』

『良かつたわね、新しい生き方を掴んだのね。海ちゃん達のお陰かしら』

沙羅がキルシユに話しかけるように言った。

『沙羅さん、それはどう言う事なのかしら、教えてもらいたいのだけど』

潮さんの目が真剣になつた。

『潮さんは知つていてると思うけれど、私の母、綺羅の力は日本でも5本の指に入るくらい強かつたわ。でもね、鬼や妖しは別として、全ての使い魔を滅していった訳じゃないのよ。余程の悪さをしない限りはね。ダメージを与えて弱つた所を封印して契約を断ち切るの。力は使う側によつて悪くも良くもなるだから使う側の問題で、この子たちは決して悪くないつて。でも自分には救う事も出来ない。後はこの子たちの生きたいと思う気持ちと運に頼るしかないんだつて言つていたわ。でも殆どの使い魔は契約が切れた為に消えてしまつた。でもこうして生きていってくれる子がいるのね私は嬉しいわ。母は間違つていなかつたんだつて』

海は隆羅の島でのあの言葉を思い出していた。

『人間が作り出した物は、殆ど便利な道具だと思つ。でも、悲しい事にその殆どの物が凶器にもなつてしまつ。それは道具を使う人の心によつて便利な物にも凶器にもなつてしまつ。道具に責任は無いんだ』

そう全て人間側の問題。

そしてその思いはきちんと受け継がれている事に驚いた。

海が気付くと部屋に隆羅は居なかつた。

さつきキルシユが部屋に入つてきたのは隆羅が部屋からでた直ぐ後のことだつたのだ。

おそらくキルシユの気配を感じていたのだろう。

『お前、どこに行くんだ?』

『キルシユ、悪いが少し独りにさせてくれ』

『そうか、判つた』

キルシユは入れ違いで部屋に入つていつた。

屋敷の廊下の電気は消えていたが月明かりが差し込んでとても明るかつた。

茉弥と凪が寝ている部屋の先まで歩き廊下の床に座り壁に寄りかかり庭の方を見ると池の水面に月の光が反射してとても綺麗だつた。

隆羅は、あの河川敷での出来事の説明を潮に求められた時の事を考えていた。

『隆羅、あそこでいつたい何があつたの教えてちょうだい。お願ひよ』

『あの日は、朝から嫌な空気を感じていたんですけども氣のせいだと思つて。そして実家に行き誕生日会をして実家を出た時に朝感じた嫌な空気をハツキリ感じたんです。それでも取りあえず海と凪に心配を掛けまいと駅に向かい、その途中で頭の中にスライドの様に画像が浮かんできました。『上から襲い掛かる影』『驚いてしゃがみ込む2人の姿』『河川敷に向かい走つている自分の姿』それで凪に海を連れて先に帰るようになつた。その時に影に襲われて画像と同じ事が起きたんです。2人が俺から離れるのを確認して河川敷へ、その手前で違う影に襲われて河川敷では2匹から襲われて弄ばれているようでした。逃げ回っていたら海が現れてしまい橋脚を

背にしてどうにかしなきやと思つていた時に、周りをかなりの数の影に囲まれて峠の時と似た状況で覚醒してしばらくは応戦したんですが、方を付けようと一気に襲い掛かられた時に手から透けたオレンジ色の炎のようなものが当たり一面に広がつて影が跡形も無く消えて海の無事を確認した後の事は覚えていません』

『使い魔は全部で何匹居たの?』

『15くらいかと』

『覚醒のきっかけは何?』

『何かと言わればお袋の言葉かも「自分の退魔師の力を信じる」常にクールでいる』と言われて『

『何故、沙羅さんはそんな事を』

『分かりませんが、お袋も何か感じていたのかかもしれません』

『使い魔のマスターは居たの?』

『いえ、見られている気配だけでした』

『それだけの使い魔を従えると言う事は、かなりの力の持ち主でかなりの使い手だわ。もしかしたら「逢魔の闇」まさか……』

『逢う魔の時の事ですか、黄昏時や百鬼夜行が現れるつて言つ』

『本当にあなたは変な事に詳しいわね』

『逢魔の闇は、昔から私達の鍵を狙つている者の事よ。闇を操る者、闇は百鬼夜行を従える者。ありえるわね、鍵は今、私達の手を離れている。そして強い力は強い力を引き寄せてしまうから』

『それは、どんな姿のですか』

『大体人型ね、容姿不明、年齢不明、性別不明、時によつて色々よ。でも子どもの形が一番最悪ね理由は分からぬのだけど昼間でも活動可能だわ』

『昼間ですか?』

『そうね、でも危険を冒してまで動き回らないと思うけど。使い魔は元が生きた動物だから昼でも関係ないけれど闇は違う、子ども以外の形なら太陽の光を浴びれば消えてしまつ』

『吸血鬼みたいですね』

『吸血鬼の方が可愛いものよ、もし闇なら勝ち田は無いわ。100%じゃないけれど力が桁違いなのよ』

『何故、100%じゃないんですか?』

『それは、正直に話すから良くなさい。あなたの封印が完全に解ければ何とかなるかもしれない。自分の力をフルに使いこなせると言う条件付でよ、それでもどうなるか全く分からない』

『封印が解ければですか?』

『そう、だけど今は解き方も分からないし、解いた右腕だけでさえ使い方はまだ分からない事ばかりなんでしょう。あまりにも危険すぎるわ』

屋敷の廊下で窓の外を見て遠い田をしていた。

『正ただし、本当に何とかなるのか、気楽な気分じゃねえぞ、まつたく』

『隆羅、見つけたあ』

海の声に少し驚いて見上げると、そこにはとても綺麗で可愛らしき顔つきの海が微笑んで立っていた。

『どうした、海?』

『ああ、忘れているでしょ』

『えつ何がだよ』

『約束、忘れているでしょ』

『悪いそうだつたな』

『そりだつたじなくて』

俺の耳を海が引っ張った。

『痛いって、だからゴメン』

『もう。はい、メリークリスマス』

海が笑つて紙袋を出した。

『ありがとうな、開けてもいいか』

『うん』

『凄いな、海が編んだのか、とても暖かそうだな。ありがとう大事

にする』

それはさつくりとした白い手編みのセーターで左腕のところに書いたラインが一本入っていた。

『ちょっと、難しかつたけどね』

『そうか、俺からもクリスマスプレゼントだ。メリークリスマス小さな包みを渡す。中はあのペアのブレスレットだ。』

『ありがとう。開けていい』

『ああ、いいぞ』

『これって、隆羅ありがと』

海が包みを開けて抱きついてきた。甘い匂いがする。

『ねえ、名前が彫つてあるよ』

『そうだな』

『じゃあ、ん、ん』

海が俺の皿の前に手首を突き出した。優しく手を取り着けてやる。

彫られているネームは「Takara Kisaaru」

『じゃ、隆羅も。ほら、手』

『ああ』

手首を出す。海が手首に着けてくれた。ネームはもうひんと「Kashi

Mi n a d u k i』

『なんだか、結婚式みたいだね』

『そうだな、でもあれは指輪だぞ』

『いいんだもん。凄く嬉しいんだもん』

『そうか俺もだ』

『隆羅とどんな時も一緒にだね』

『そうだな、俺も海とどんな時でも一緒にだ』

お互いのブレスレットを見つめた。

『ねえ、隆羅の昔の話を聞いたいな』

『この間、スギと口に聞いたんだつ』

『そうじや無くて。じゃあ島のお話し、私と出合つ前の』

『そうだな、あまり話す機会なかつたもんな』

『うん。聞きたい、お願い』

『親父ともめて、地元から居なくなり横浜で仕事をしていたのは知つていいよな』

『うん、聞いたよ』

『その後、船で沖縄本島に向かいそこからまた船で石神島へ向かつたんだ。島には着いたけれど仕事も見つからず、金は無くなつて来るし小さな漁港で途方に暮れたたんだ。そこで漁師をしていいる睦月正つまり睦月美夢の兄貴に会つたんだ。』

『へえ、じゃあ美夢ちゃんとは付き合い長いんだ』

『ああ、3年くらいになるかな。それでそここの漁港で正が一方的に話しかけてきて行く所が無いのなら家に来いつて連れて行かれてしまはらく世話になつていたんだ。魚を運んだり、漁具の手入れの手伝いをしたりしながらな。俺には友達なんてスギとクロしか居なかつたから凄く戸惑つたんだけど、あいつらとお袋さんはそんなの結構いなしだった。驚いたよ見ず知らずの人間にそこまでしてくれるなんて、この島もこの島の人も皆、温かいんだつて思つた。そして正達に出会つた事で俺も変わつて行つたんだ。そして島で生活をする事を決めたんだ。ホテルで仕事して最初は寮に入つてそこのホテルで五月先輩と出会つて一緒に仕事して、落ち着いてきてアパート探してあのアパートに住み始めたんだ。でもホテルで仕事を始めて1年くらいの時にトラブルを起こしてホテルを辞めて。その後いろいろな仕事をしたぞカクテルバー やイタリアンのお店の調理、コンビニ、最後が居酒屋とパン屋。それで、空から光の玉が振つてきたり、知らない女の子が部屋に居て殴られたりだな水の精だの影だの鬼だの信じられないものがいっぱい出てきた。俺も退魔師の一族の末裔だつたり。でも、海に出会えた事、嵐に出会えた事、潮さんに出会えた事、感謝しているんだ。そして初めてこんなにもひとりの人を好きになれた、ありがとうな海』

『私もだよ、ありがとう隆羅。でも美夢ちゃんにお兄さんがいるんだ』

『いや、今はもういない。海で亡くなつたんだ』

海が知らない隆羅の心の傷を少しだけ見た気がした。

『あのね、私にも私をえてくれた人が居るの。笑顔を忘れてしまつた私に笑顔をくれた人。子どもの頃に、どこかの池の周りで大切な物を失くしてしまつて泣いていたの。そうしたらひとりの男の子が「どうした、何をそんなに泣いているんだ」って「探し物が見付からない」って言つたら一緒に探して見つけてくれたの顔も覚えていないし、名前も分からぬ。でも、凄く優しくて温かい男の子だつた。それで、私の秘密を教えてあげたの絶対に内緒だよつて。また、会いたいな。きつといつか会えるよね』

『そりだな、きつと会えるさ。海がそんなに思つていてのならな。海にもそんな事があつたんだな』

『うん、だけど最近とても怖いの』

『怖いって何がだ?』

海がとても不安そうな顔をして俺の顔を見ていた。

『幸せすぎて怖いのこんなに幸せで良いのかなつて。凪やお姉ちゃんも隆羅に会つてから毎日、とても楽しそうだし、隆羅のお母さんや茉弥ちゃんはとても優しくしてくれる。それに、こんなにも大好きな隆羅がいつも傍にいてくれる。でも隆羅ばかりが危ない目に遭つて、私は何も出来なくて。子どもの頃とても幸せだつた。そしたらママが突然、居なくなつちゃたの』

『大丈夫だ、心配ないから。俺はどこにも行かないから』

『嫌あ、嫌だあ。ママも隆羅と同じように「大丈夫、心配ない」つて言つて死んじやつたんだもん』

号泣だつた隆羅のシャツを掴み隆羅の胸に顔を埋めて。

『隆羅が、隆羅がどこかへ行つちやう! 隆羅が居なくなつたら私、私どうしたらいいの? 隆羅、お願ひだからどこにも行かないで! 私を置いて行かないで。どこにも……』

何も言えず、ただ力いっぱい抱きしめた。

それしか出来なかつた。

どれだけ泣いたのだろう少し落ち着いてきたようだつた。

『海、大丈夫か?』

『うん』

しばらく沈黙が流れた、海のしゃくり上げる息遣いだけが聞こえた。

『隆羅、キスして。お願ひ』

海が顔をまっすぐこちらに向けて目を閉じた。

優しく海の頬に両手を当てて顔を近づける海の息遣いがとても近く感じる。

「キィイイイイ」ドアが開く音がして慌てて離れた。

茉弥が寝ぼけて出てきたのだ。

海の肩が震えている、俺の肩も震えていた。

笑いを堪えて。

2人で顔を見合させて大笑いした。

『あははははは』

『うふふふふふふ』

『大変だな、ヘタレの彼氏つて言つのも』

『うん、でもそんなヘタレが大好きなの』

『そうか、めちゃくちゃ綺麗な彼女が居るのも大変なんだぞ』

『そうなの?』

『そうさ、でも大好きだからな。しうがねえなあ』

『そうだね、しうがねえなあだね』

俺と海は立ち上がり茉弥の所に歩み寄つた。

『おーい、茉弥どうしたんだ?』

『兄さま、海姉さま。おトイレど?』

『じゃあ、一緒に行こう。茉弥ちゃん』

『兄さまも一緒に』

『ああ、分かつた』

3人で手を繋いだ。

翌日、俺と海は拉致された。

朝、海と凪は2人で朝食を食べていた。

その頃、潮さんは書斎で調べ物をしていたらし。

凪が目聴く海の左手首に光る物を見つけた。

『お姉ちゃん、これはなにかなあ』

海の左手からスリも真つ青なくらい目にも止まらぬ速さでブレスレットをすばやく外す。

『駄目。それだけは駄目。凪！返しなさい…』

『やだもん』

凪が食堂から飛び出した。

『お願い。返して！ 凪！』

凪を追いかける。

凪が潮さんの書斎に逃げ込んだ。

『朝から騒がしいわね。何なのいつたい』

『凪。返しなさい！』

そこに海が走り込んで来た。

『2人ともいい加減にしなさい。朝ばらから』

『海、一体何の騒ぎなの？』

『凪が私の大切な物取つたの』

『凪、何なの貸しなさい。あら素敵なブレスじゃない。ネーム入りでラブランブね。凪、返してあげなさい』

潮さんが凪から受け取りブレスレットをまじまじと見ていた。

『ええ、だつて』

『だつてじゃありません。ターチサンから貰つたものを誰かに取られたら凪は嬉しいの。違うでしょ』

『判つた。その代わりこれを着けてここに居てね』

ブレスレットを凪が海に返すと、海はホッとして左手にブレスレッ

トを嵌める。

すると、ガチャリと海の右手に玩具の手錠を凧が嵌めた。

それにはロープが着いていて書斎のソファーアの足に縛り付けられていた。

そして凧は書斎から飛び出して行つた。

『お姉ちゃん、お願い外して』

『あらあら、でも鍵は凧しか持つていらないわよ』

『仕事に遅れちゃうよ』

俺はまだ夢の中だつた。

俺の左手首にもブレスが光つていた。
しばらくするとガチャリと音がした。

『ガチャリってなんだ』

左手首を見ると厳つい手錠の様な物が、そこにはロープが付いていてその先にツインテールが居た。

『確保成功。これより護送いたします。来い』

凧に引っ張られた。

『あのう凧さん？ 引っ張るのはいいんですけど。俺、今Tシャツにパンツ一枚なんですかね』

俺が立ち上がると凧の顔が真っ赤になつた。

『ば、バカ兄貴、早く何か穿いて』

イスに掛けてあつたGパンを穿く、手錠とロープが邪魔でバランスを崩し凧に覆いかぶさつた。

『ど、どいて、早くバカ、バカ、バカ』

『おつ悪い悪い』

立ち上がりGパンを穿きシャツを羽織る。

『バカ兄貴、こっちに来い』

思い切り引っ張られた。何かの変なプレイみたいだ。

連れて行かれたのは潮さんの書斎だった。

書斎に入ると海が手錠とロープで繋がれていてしゃげていた。

『海、何してるんだ。お前?』

『凪に嵌められた』

『兄貴もここに座れ』

言われ手錠を外されて、海がされていた手錠に繋がれた。

『潮所長、隆羅及び海を拘留いたしました』

凪が俺達に背を向けて訳の分からぬ事をしゃべり始めた。俺は凪に聞えない様に海に話しかけた。

『海、こっちに手を出せ』

海の手錠をヘアピンで外す。

『隆羅、それどうしたの?』

『しゃー』

指で口を塞ぐ。そして自分の手錠を外した。

潮さんは楽しそうにこちらを見ていた。

『これから、2人にはじっくりとペアのブレスレットについて尋問させてもらいます』

ガチャリと凪の足首に手錠を嵌める。

『えつ?』

凪が驚いて振り返った。

『海、走れ』

『仕事に行つて来まーす』

手を繋いだまま走りだした。

『待つてえーー ギヤアン!』

潮さんがお腹を抱えて笑つていた。

凪が追いかけ様として手錠についていたロープがピンと張り倒れたのだ。

『凪、あなたの負けよ。ターチャンもやるようになつたわね。うふ

ふ』

俺と海は笑いながら走り仕事に向かった。

あのヘアピンは凪に覆いかぶさった時に1本だけ凪の頭から抜いて

おいた。

玩具の手錠など子どもの頃によく親父にされて拉致られたので外す事などお茶漬けサラサラだった。

除夜の鐘が鳴っている。

俺は実家でお袋と茉弥と大晦日を過ごしていた。
久しぶりの実家の風呂で湯船にのんびりつかる。

海達はと言うと何でも大晦日に定例の集まりがあるらしく年明けに
しか戻らないらしい。

そんなわけで実家でゆっくりとしている訳だ。

『あら、茉弥。何をしているの?』

『あのね、兄さまにお年玉あげるの』

クリスマスプレゼントの隆羅のダウンのコートに茉弥が板チョコや
クッキーなどをポケットに入れていた。

『茉弥のお菓子なのに良いの?』

『うん、でも内緒だよ』

『分かつたわ、茉弥は優しいのね』

『えへへ、茉弥。兄さま大好きだもん、内緒ね』

『2人だけの秘密ね』

『茉弥はそろそろもう寝なさいね。2階に行きましょう』

『うん、分かつた』

2人は茉弥の部屋がある2階に上がった。

『ああ、気持ちよかつた。あれ、お袋は。2階かなあ
お袋が2階から降りてきた。

『茉弥はもう寝たのか?』

『ええ、今寝かせたわ。年越しそばでも食べる』

『あ、うん。少しだけな』

2人でコタツに入りながらそばを食べながら話をしていた。

『今年も、いろんな事があったわね』

『そうだな』

『去年の1番の出来事は。タカちゃんが帰つてきてくれた事かなあ』

『そうか、居ても居なくても同じだろ』

『違うわよ、茉弥だつてあんなに喜んでいるのに』

『そうだな』

『それに、タカちゃんに彼女が出来て。海に行つたり、一緒に遊んだり、クリスマスを楽しんだり。とても楽しかったわ』

『俺も、楽しかった。大変な事ばかりだつたけどな、今はその幸せだしな』

『このーの。惚氣でいるの?』

『違うよ、みんなの笑顔がだよ』

『そうね、みんなの笑顔が1番ね』

お袋が少し寂しげな顔をした。

『タカちゃん、茉弥と凪ちゃんの誕生日会の帰りに襲われたつて聞いたけど大丈夫なの?』

『大丈夫だつた、としか言えないな。潮さんが封印を解いてくれた右腕しか退魔師の力は使えないし、自分自身でさえ自分の力がどれ程のものかも判らない。婆ちゃんみたいに百戦錬磨ならいいけれど俺が自分の力を知つて使える様になつたのはつい最近だ。それに潮さんの話じや、この前襲つてきた相手は俺の封印を全部解いても危険な相手だつて言つていたしな』

『そうか、ママはタカちゃんを信じているわ。でもその相手つてそんないに凄いの?』

『そうらしい、「逢魔の闇」かもつて潮さんは言つていた』

『そ、そなんだ。そつか』

沙羅の表情が強張つた。

『お袋は何か知つているのか?』

『お婆ちゃんから、少しだけね。何回か対峙したけど勝てなかつたつて言つていたわ』

『婆ちゃんでも敵わない奴にどうすればいいんだろうな』

『さうね、でもタカちゃんはもう決めているんでしょ。絶対に守るつて』

『ああ、だけど……』

『だけど何なの、タカちゃんが不安になつてしまつたら、海ちゃんはどうすれば良いの。しつかりしなさい』

『そうだな』

『タカちゃんは、不器用で真つ直ぐで。とても頑固で一度決めた事は絶対に譲らなかつた。でもちゃんとやり抜いて来ているじゃない。茉弥が元気なのもタカちゃんのお蔭よ』

『でも、治つた訳じゃ……』

『仕方が無いの、原因が解らないのだもの、タカちゃんが悪いんじやないの』

『でも、その原因つて』

『はい、そこまで。今、タカちゃんが守るべきは海ちゃんでしょ。茉弥の事はパパとママに任せておきなさい。いい分かつた』

その時玄関から声がした。

『おーい、今年は帰つたぞ』

『あ、パパお帰りなさい』

『おつクソ坊主。いたのか珍しいな』

『クソ親父に珍しいなんて言われたくないねえよ。それにこりは俺の家だ』

『バカ。こりは俺の家で坊主の物じやねえ』

『いちいち、うるせえんだよ。人の揚げ足ばかりとりやがつて』

2人が睨み合い一触即発の雰囲気になつた。

『もう、新年早々。2人とも止めて下さい。パパもタカちゃんも判つた』

『了解です、ふんクソ親父が』

『タカちゃん、怒るわよ』

3人でコタツに入りテレビを黙つて見る。

これが俺と親父がいる時のスタイルだが、今年は少し違つていた。

『おい、坊主。お前生意氣にも彼女が出来たんだって』

『あん？ 悪いか』

『どんな子なんだ。お前の事だ写真でも持ち歩いているんだろ。見てみる』

『そんなもの、持つてねえよ』

『けつ、しみつたれてるなあ。ちゃんと紹介しひよ』

『ふん、いつもブラブラして、家に居ない人間にじびりやつて紹介するんだよ』

『携帯とかあるだろ。今時のガキがナマ言つてるんじゃねえぞ』

『クソ親父の番号なんか知らねえもん』

『はあ？ この親不孝者が。そんな風に育てた覚えねえぞ』

『俺はお袋に育てられたんだ。クソ親父じゃねえだろ』

『しかし、正月早々。時化た面しやがつて。またどうじょりもない事ウジウジと考えてるんだろ。』

『つるせえ、クソ親父に何が分かるー。』

『お前の面見ていたら、何でもお見通しだ。このガキが！』

ヒートアップしてテーブル越しに方膝を立てて睨み合つた。

『2人ともいい加減にしなさいー！』

茉弥が起きて来てしまった、俺と親父の大きな声で目が覚めたのだった。

『母さま、どうしたの？ あつ父さまだ、また兄さまと喧嘩。茉弥、

喧嘩嫌い』

『茉弥、じつにおいで。喧嘩していた訳じゃ無いんだ。起こして悪かったな』

『うん、父さま』

『坊主、少し頭でも冷やして来い』

『そう言いながらヘルメットを隆羅に投げ付けた。』

隆羅が受け取るとヘルメットの中には鍵が入っていた。

『ああ、そうするよ。茉弥ゴメンな』

『明日には返せよ。明後日は使うからな』

『ああ、判つたよ』

『タカちゃん。出掛けるの？ それなら10分だけ待つて。お願い』

『それじゃ外にいるから』

隆羅は玄関から外に出た。

『パパお願ひ、隆羅の気持ち分かつてあげて。もう何回もあの子は危険な目に遭つているの。命懸けなのよ。今ままじゃ2度と帰つて来れなくなつてしまふかもしれないの』

沙羅が不安交じりの顔で仁を見つめて言つた。

『そ、そうだつたのか。何も知らないでつい、いつも通りやつちまつた悪かつたな』

しばらくするとお袋が外に出てきた。

手にはお袋用のヘルメットとステンレス製の細身のボトルを持つていた。

『はい、ヘルメット。海ちゃんの分、それとこれ』

『海の分つて、海は今日は居ないぞ』

『備えあれば何とやらよ。これは熱々のコーヒー沙羅スペシャルよ、寒いから気をつけて行つてらうしやい』

『お袋、いつもこんなで悪いな』

『大丈夫よ、パパもきっと分かつてくれるわ。似たもの同士だから2人とも』

『似てゐるかそんなに。じゃ、行つてくるわ』

親父のスペシャル・ヤンチャ仕様のバイクのエンジンを掛けた。いつもながら心地よい音がしてエンジンが吹け上がる。

俺の格好はスペシャル・クリスマス仕様だった。

海のセーターにお袋のダウンのコート、風のマフラーに茉弥の手袋。それにお袋スペシャルの熱々コーヒーが右ポケットの中に入つている。

バイクを走らせる。

そして島で俺の事を変えてくれたアイツの事を何故か思い出していった。

島に着いたのはいいが仕事も見つからず途方に暮れていた。

『おい、お前こんな所で何しているんだ』

『別に、関係ないだろ』

『そんな暗い顔していたら来るもんも逃げていくぞ』

『構つなって』

『生憎、俺はお節介なんだ。何があつたかは知らないけれどなあ。

世の中は、全てナンクルナイサーだ』

『ナンクルナイサー?』

『そうだ、楽しい事も嬉しい事も全てOK。哀しい事も辛い事も全てOK。何とかなるから気楽に行こうって意味だ』

『どうせ、その面じや行く当ても無いんだろう。だったら俺の家に来い。お袋と妹が居るが大歓迎だ。ほら、行くぞ』

それが始まりだった。

そいつの名前は正^{ただし}と言つて。

親父を早くに海で亡くし親父の跡を継いで海人^{うみんちゅう}(沖縄の漁師)をしていた。

年は俺の1つ上だった。

正の家には、お袋さんと妹が居たが見ず知らずの俺を快く受け入れてくれた。

俺はその家にしばらく身を寄せた。舟は苦手だがなるべく一緒に海に出て手伝いをした。

正が獲つて来た魚をお袋さんが店で売つて生計を立てていた。何でもやつた店番、正のもう1つのダイビングの仕事の手伝い。そしていろいろな事を教わった。

島の事、島の言葉、しきたり。そして正の強さ、お袋さんの優しさでつかい包蔵力、妹の純粋さ元気、そのお蔭で笑えるようになり心を開く事が出来た。

そして1ヶ月が過ぎた時に決めたんだ。

『正。俺、この島で生活しようと思つんだ自分の力だけで』

『そりやうか、そろそろいい時期かも知れないな。お前もいい顔になつ

たしな。生きているつて感じがするだろ』

『ああ、そりやうだな。とりあえずホテルの寮にでも入つて、そこから

始めようと思つ』

『そりやうだな、何かあれば相談にも乗るし力にもなるからな。それと時々でいいから顔出してくれ。妹はお前の事、気に入つてゐるみたいだしな』

『ああ、分かつた約束するよ』

『ナンクルナイサーだぞ、怒つたら負けだ』

『ナンクルナイサーだな』

そして、隆羅の島での生活がスタートした。自分の力で生きる為の。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6033t/>

アクアマリンの瞳に抱かれて

2011年10月16日23時44分発行